不良少年少女心理

精神分析

★第5卷・第2號★昭和12年3月・4月★

主要項目

詳細目次は巻頭に

T・I・P・A・ VERLAG

東京精神分析學研究所出版部



性心理のデパートであり、女性心理のカリケチュアであり、大寫しである!!ひとり精神分析學のみがよく彼女の微妙な心理を闡明し得る。性心理、女性心理研究の國民的寶庫の秘帳は遂に開かれた!!

阿部定の精神分析的診斷

法醫學から觀た型	金子準二
阿部定の精神分析	長崎文治
定の無意識動機に就いて	高橋鐵
阿部定の定イズム雜考	高橋鐵
戒心すべき誰にでもある傾向	諸岡存
愛慾葛藤問題としてのお定事件	大槻憲二
下腹部切取事件の流行	大槻憲二
幼少女時代	編纂者
小學校時代	編纂者
不良少女時代	編纂者
事件の時間的表示	編纂者
參考文獻表	編纂者

圖版(お定の肖像及び筆蹟・ピアヅリ作サロメの挿圖)

東京精神分析學研究所編

定價 五十錢・送料共

東京精神分析學研究所出版部發行

本郷區動坂町三二七番地

振替・東京七八八一七番

第五版出來!!

（第四版自序の内より）　本書がこのやうに需用せられることは、學界及び世人の間に斯學が益々眞劍な興味の對象となりつゝあることを示すものであるが、併し私はその故にとて斯學の將來を樂觀することは尚早であると思つてゐる。我等の前途はなほ遼遠であるが、たゞ確信と努力とを以て一步一步前進して行けばよいのだ。他人の毀譽褒貶になど一々神經を尖らせるには及ばない。その意味に於いて私は、斯學父祖フロイド博士の沈着冷靜な態度に學びたいと思ふ。

精神分析概論

大槻憲二著

増補改訂第四版・四六版・口繪二葉
定價80錢・送料6錢

✖本書の四大特色

一、現代日本人が讀者たる事を忘れてゐないこと
二、斯學の組織的知識を與へること
三、實例はみなわが國のものを擧げて興味多く說けること
四、その理論的根據につき明快にして要を得やすいこと

第一章　精神分析とは何か

（Ⅰ）無意識の發見。催眠術と精神分析（Ⅱ）夢の解釋。その方法と實例。典型的の夢。（Ⅲ）無意識と精神症、神經症、無意識の特徵。相反並存性とは。

第二章　精神分析の科學性

（Ⅰ）科學とは何か。（Ⅱ）種々な解釋の可能。（Ⅲ）解釋と認識。（Ⅳ）科學性の複雜。二者選一と無意識。（Ⅴ）重複決定。竹取物語分析。（Ⅵ）所謂科學者の偏見。

第三章　精神分析の機能

（Ⅰ）病的の心理。ナルチスムスとは。（Ⅱ）各種の理論。抑壓說。リビドー說。動力說。エディポス說。幼兒性慾說。生死本能說。（Ⅲ）病氣の治療。分析と綜合。非醫者の分析。（Ⅲ）理論の應用。言語學的興味。文藝學的興味。源氏物語分析。

第四章　超心理學としての精神分析

三つの見地とその綜合。（Ⅰ）動的見地。（Ⅱ）局所的見地。（Ⅲ）經濟的見地。

第五章　精神分析の發達

（Ⅰ）シャルコー及びジャネー。（Ⅱ）フロイドの史的地位及び特徵。汎性慾說解嘲。（Ⅲ）ユングアードラー、その他の分析學者の特徵。（Ⅲ）國際學會と研究機關。

第六章　精神分析研究手引

（Ⅰ）我が國に於ける研究史及び文獻。（Ⅱ）術語表解　（索引）。

東京精神分析學研究所出版部
東京市本郷區駒込動坂町三二七
（振替口座）東京七八八一七番

不良少年少女心理號·內容目次

『精神分析』第五卷・第二號

隔月刊行誌
定價五十錢
送料共

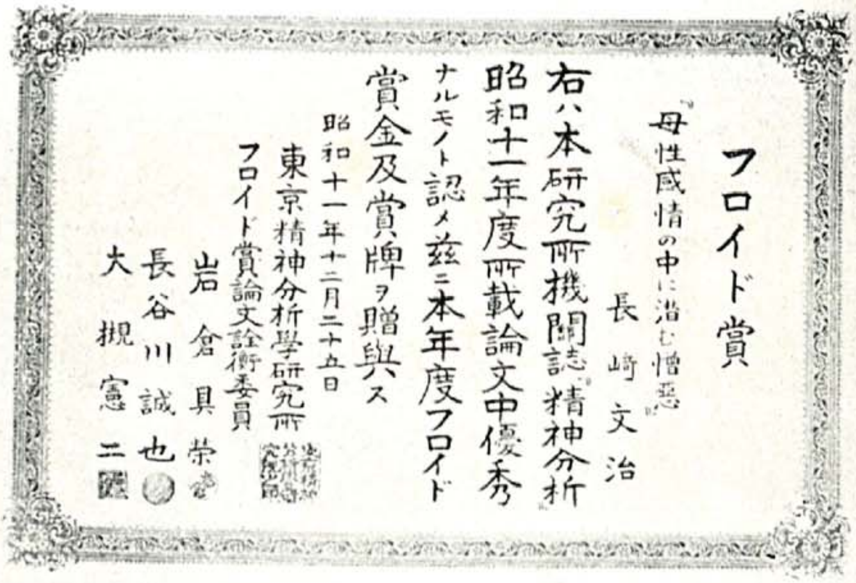
精神分析

半年　一圓五十錢
一年　三圓
送料共

昭和十二年二月三月

思春期の研究　第五卷第一號

東京精神分析學研究所
本鄉區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番



フロイド賞

『母性感情の中に潜む憎悪』

長崎文治

右ハ本研究所機関誌『精神分析』昭和十一年度所載論文中優秀ナルモノト認メ茲ニ本年度フロイド賞金及賞牌ヲ贈與ス

昭和十一年十二月二十五日

東京精神分析學研究所

フロイド賞論文詮衡委員

岩倉具榮

長谷川誠也

大槻憲二





（上）フロイド賞狀　（中）フロイド賞牌表裏

（下）フロイド賞贈與式記念撮影（前列右より三人目長崎氏。）
詳しくは本文彙報欄參照。





（右）　故榊保三郎博士（諸岡氏稿参照）
（左）　佛國分析者アランディ博士（彙報欄参照）

★不良少年少女取扱の第三段的方法

精神病者に對する取扱態度は文化の進展につれて三段の變化を遂げた。即ち、昔は宗敎的迷信によりこれを惡魔につかれたるもの、又は惡魔そのものとして無暗に虐待する態度をとつた。次にはこれを哀れむべきものとして人道主義の名に於いて無暗に涙をそゝぎ、たゞ感傷的にのみ扱つて、何ら科學的處置法を知らなかつた。共にその態度はあまり主觀的に偏してゐた。第三に、やうやく客觀的態度をとることが出來るやうになつて、その原因の調査と取扱方を科學的にすることを知るやうになつた。この方法は虐待的でもなければ感傷的でもないが、そこには峻嚴なものと慈愛的なものとが含まれてゐる。

不良少年少女に對する態度にも正にこれと同じく三段の變化の歴史が見られるであらう。然るに今なほ科學的態度をとると云ひつゝ、あまりに涙の過多なる向きもないとは云へない。科學的方法や態度は、つまり中庸の道である。一方に偏することは科學的とは云へない。それはその人自身が科學的に整理せられてゐない（我々の立場に即して云へば、分析せられてゐない）からであると云はねばならない。

不良少年の犯罪性と精神分析學

杉田直樹

近時犯罪傾向をもつ兒童少年、卽ち反社會的傾向又は社會生活に少しも本能的關心を持たない幼少年者が著しく多くなつて來たことは、社會事業乃至少年保護事業に從事してゐる人の誰しも驚いてゐる所である。私共も職責上斯う云ふ少年を平生に多少扱つてゐるので、何か此の犯罪行爲が個人的の社會意識と境遇との間の軋轢から發生する衝動的の動作なのではあるまいかと考へ、さすればその矯治の上に精神分析的方法を應用する可能性もあり得るわけで、小兒分析上の重大なる一部門となし得るであらう、と思つていろ〳〵の例に當つて考察をして見た事がある。しかし多くの場合、犯罪少年は分析に堪へ得るほど內的經驗を豐富にもつて居らず、又之を自由聯合によつて發表し得ないやうなものが多く、謂はゞ精神的內部生活に於て全く低格であり、深く精神的軋轢を抑壓し得るほどに內向的のものでないといふことが分り、斯うした少年の犯罪傾向に就いては、やはり從來の如く客觀的立場からの考察によつて闡明するより外、適當の研究法がないといふことに想到したのであつた。卽ち多くの不良少年の性格異常は、(一)道義的情操の發達不良により或本能的衝動又は無思慮の反應的行動に對し、その解發を抑制するの力がなく、至つて無邪氣に反社會的行爲を反復する。(二)又は本能に基く行爲衝動力が異常に强くて、平生他人家族友人などと一所に居る時には相當に社會生活に對する道義的情操は作働してゐるが、孤獨、暗夜の如き時、飢寒の如き生理的逼迫欲求、或は遊戲慾、娛樂の誘惑又は好奇心の如き精神的慾求の强く起つた時などには其の衝動力に負けて了つて、自ら發覺を

警戒しつゝも犯罪行爲をして了ふ。(三)自我の獨立意志の薄弱なため友人の誘惑やいろ〳〵な娯樂物飲食物等の刺戟又は親の命令などにおのづと強く示唆せられて少しも理智作用の抑制を感ぜずに出鱈目な行爲を平然して了ふ。さう云ふやうな比較的内部的精神作用の鋭くない、廣義の精神低格者が不良少年の中に甚だ多いといふことは、從來の精神病學者が論じた通りであるやうに思ふ。

しかし少年の下意識界に有する反社會衝動の發露によつて、惹起せられる犯罪行爲と思はれるのも全くないではない。家庭の不良、兩親との不和、環境の壓迫特に性格の缺陷などのために教師友人等から常に反感を買つて平生の自分の對社會的欲求(交友、娯樂、他人の深切を受容すること等)が抑壓せられ勝ちの者が、ひねくれた性格 Der Verschrobene を發展し一種の報復的の衝動から反社會的行爲に出づるものも決して少なくはない。多くの精神分析學者は斯う云ふ拗ね者を小兒分析的に研究して、社會意識の未だ備はらざる兒童の反社會的行爲はつまり自己の近親者に對する怨恨不滿の反應を社會に投影するものと解してゐるらしいが、斯う云ふ內的軋轢に基いてやゝ計畫的とも思はれるやうな繼續的の犯罪行爲をするものは、不良少年中比較的少數に止まり、具體型丼に氣質型共に乖離性の特異の家系的素因を有する者に限つてゐるらしい。一般に精神分析學者は成人に於ては如何なる人でも其の內界軋轢が行動の上に同樣の法則で影響を與へるやうに考へてゐるが、內界の軋轢は主として社會生活と、個人の內部的欲求との背馳から發生するものであつて、從つて其の氣質の特質として始めから社交的であり且自我的欲求の乏しい回歸性氣質者に於ては其の生活態度が寧ろ妥協的であり讓步的であり、其の自我は容易く轉導又は抑制せられ、一般に內部的の葛藤の起こることが少ないものである。私共は從來からも精神分析學は乖離性氣質者特有の自己內生活 Autistisches Leben の一過程を研究するものであつて、その原則は乖離症者又は乖離性異常氣質者、又或はさう云ふ傾向を享有してゐる精神變質的の人々にはよくあてはまり、又自分も之を理解することを得るものであるけれども、その反對の回歸性氣質傾向の者又は內向的精神生活を體驗しない者には精神分析學的原理も其の應用も全く一種出鱈目の聯合遊戯としか考へられないといふ事實にあまりにも屢々當面してゐるのである。又「ヒステリイ」性又は偏執性の人は體質

的には多く肥滿型又は鬪士型に屬し氣質的には回歸型に類するやうに認められてゐるけれども、元來其の氣質は特異の列型をなすもので、その感情性は豐富且鋭敏であるけれども殆ど全く自我中心性、自我亢進性であり、少しも他人に對する同情、深切、概して社交的傾向を有してはゐない。卽ち感情移入性に乏しい。乖離症者が冷淡で殆ど全く自己內生活にのみ蹈踏してゐるのに反し、なまじ「ヒステリー」者、偏執者は外向的に自我を發揮しやうといふ强劇なる傾向を有する混合型であるために、却つて外向的傾向が著しいやうに思はれるけれど、實際は外界を自我の爲めに利用しやうといふ斗りであつて、從つて自我の欲求通りにならないと直ちに外界に反感をいだき易く、精神分析學的には幾多の精神內界軋轢を來し易く且之を抑壓しなければならない機會が多いものだといふことは當然の結果と云ふべきであらう。

周圍の人の苦樂を思ひやり他人の迷惑といふことに感情を移入し得べき本當の回歸性型の者は常に自我感情を謙抑に壓迫し得べき氣質のものであるから、概して內界軋轢の機因が少ない。その行動は外界の刺戟に應じ直に外向的に解發せられて完了してしまふから、第三者が之を觀察しても直ちに其の行動の原因も結果も明白になつてゐる。斯かる者にはたとひ反社會的の効果をもたらすやうな行動があつても、其の動機も過程も明白で少しも其の間に抑壓が存しないから、極めて明朗であつて、謝罪すればそれで事濟みになつて、何の餘殃を貽すことがない。つまり其の犯罪性は性格の裡に潜む乖離性によるものではなく、從つて斯かる者の犯罪防止の爲めにはその個人の對人格又は對氣質的醫學的措置をとるといふ如き廻りくどい對個人策をとるよりも、寧ろ徑ちに刺戟となるべき境遇を改善することのみによつて確實にその目的を達し得るものである。所が、乖離性型の者であつて小兒期の環境の不良等のために內部的に性格がこぢれて反社會的になつて了つたものに對しては、單に環境だけを改善してやつても、其の性格的の反社會的傾向はそれのみで改善せられる可能性は甚だ乏しい。斯う云ふものは環境の改善によつてよし一時的によくなつたやうに見えても、後日に至つて如何なる單純な內界葛藤のみを動機として何時再び犯罪性を暴發しないとも圖られない。どうしても永く監禁して其の經過を觀察しなければならないことになる。

一般に幼少年の頃にはその體型として將來肥滿型となるべきものが潛伏してゐて、本當に發現しない事實幼少年時の肥滿體質は凡て腦下垂體疾患によると同様に、幼少年期には乖離性氣質の本質は未だ完全には出現して來ないものである。多くの幼少年者は社會的經驗がないから自づと社會無視的 Asozial ではあるが、決して反社會的 Antisozial ではない。三四歳迄は自我が强いから幾分社交妥協性に乏しく喧嘩を仕勝ちであるが、六七歳からは社交本能が徐々に自然發達によつて現はれて來、自我感情は自づと薄弱になつて來るものであるが、「ヒステリイ」や偏執症者では此の幼年期性の「エゴイズム」が何時迄も末長く强盛に遺殘してゐるもので、從つて或學者は「ヒステリイ」を指して精神的幼兒型 Psychische Infantilismus に過ぎないと解してゐる。しかし斯う云ふものこそ家庭や環境の事情により幼少時より餘りに幼兒の自我に對する干渉が多過ぎたためか、或は其の反對に少しも自我に反省を與へる機會なく「我儘一ぱい」(Omnipotent) に育てられたためか、何れにせよ自我抑制、特に理智による自我反省の訓練が足らなかつたために、後天的に發生したものと考へるより外はないのである。斯かる精神內界に少しも彈力性無しに成育を遂げて來たものが青春期以後「性ホルモン」の作用によつて神經系の刺戟性に異常を來した機會に外界刺戟と內界欲求との軋轢葛藤を體驗するときは、徑ちに暴發的に精神異常や神經症狀を急發するものである。しかし同一の精神分析學的精神動機が何人に作動してもいつも同一型又同一强度の症狀を發するものとは限らない。それはその者の氣質型に於いて自我抑制的の未發達を伴ふ乖離型氣質者又は特異生活史の者のみに於て鋭敏且强劇に現はれ、比較的世間的生活の辛酸をよく堪へ且味つて來た者にとつては、さうした精神軋轢が病的症狀を惹起するといふ傾向は微弱であるのであらう。外傷性神經症 Traumatische Neurose と名付くる、交通機關や工場等の椿事負傷の後に屢々來る慢性の神經症が、「ヒステリイ」者、乖離性氣質者に多く來り、回歸性氣質者、保護者ある幼少年者、低能者等には決して來らず、又地震落雷の如き天災地變の際の負傷後には決して來ないといふ專門醫家の體驗に徵して見ても、斯うした症候の全部が精神分析學的條件によつて發するものたる事實が肯かれると共に、精神分析學は特異の氣質傾向者のみに適用せられる法則であつて、決して人間性の全部に通用するものでないといふ事實も亦肯かれるであらう。そこ

で私共が不良少年の犯罪の原理を精神分析學的に取扱ふことの可能性について研究上の失敗をしたといふことの理由も納得出來るのである。「ヒステリイ」性又は自我亢進者の不良行爲は要するに本當の意味の反社會的のものではなく、單に高々社會無視的のものに過ぎず、環境の事情の不適意に對して「意地惡る」をなし、駄々をこねるといふ程度に止まり、謂はゞ無躾不行儀といふに止まり、決して犯罪的 Verbrecherisch と名付くべきものではない。

（私はこゝまで一氣に書き來つて更に數節を書き加へやうと考へてゐる間に、不圖したことから右手中指を負傷してもう筆をもつことが出來なくなり、その治療の間に締切日になつたので已むなく此處へ一旦擱筆し、更に好機を得て、外向的氣質者の精神分析的事業について具體的の考察を述べさせて戴くこととする。一二、一、二四。東京自宅にて附記）

不良少年少女の心理とその分析的取扱方

大槻憲二

一、不良兒童の心理學的意義

精神分析學は精神病者と精神的健康者との本質的差違を認めざる如く、犯罪者と正規社會生活者、又は不良少年と善良少年との間の本質的差違をも亦、認めざるものではある。併し勿論、そこに本質的同一性を認めても、その顯現に於ける差別を認めないほどに非常識なものであると考へられてはならない。たゞ我々はその本質的同一性が如何にして現象的差別となつて發したかを研究し、もしその差別のいゝ方への除去が可能であるならば、その可能性を實現せしめたいと考へるに過ぎないのである。故に精神分析學の教育法は正常兒に對すると不良兒に對すると、その根本方針に於いて相違あるべき筈はない。斯學に基く教育法は當然、所謂正常性をも、その底に不良性への可能性又は傾向あるものと用心深く認めて扱ふと共に、所謂不良兒に對してもその歪められたる顯現を憐れんで、その本質を可及的に正しい形で生かしてやりたいと念願するものであることは云ふまでもない。

抑々、不良少年とは何であるか。それは反社會的な行動をなす年少者であつて、つまり少年にして犯罪的傾向を有するものである。反社會的であつて非社會的、又は（杉田博士の用語を借りれば）「社會無視的」のものではないのだ。リビドー遷綿の樣相から云へば、反社會的（不良）のものは轉嫁的（ユーバー・ラーゲント）であつて、自己戀愛的（ナルチスチツシユ）ではない。自己戀

愛的のものは、概して云へば、不良兒となるよりは寧ろ精神病者となる傾向があると云ひ得るであらう。併しこれ等の區別は不良兒を狹義に解せんとする場合に容認せらるべきであつて、廣義の場合には社會無視的傾向のものも亦、不良性の內に包含せしめられねばならないであらう。その場合は、併し寧ろ、精神的健康兒と不健康兒とに二大別せらるべきではあらうが……。故に、次の如き表が與へられ得るであらう。

一、精神的健康兒
- A、ナルチス型の兒童
- B、轉嫁的の兒童

二、精神的不健康兒（廣義の不良兒）
- a、非社會的兒童
- b、反社會的兒童（狹義の不良兒）

杉田博士は「精神分析は特異の氣質傾向者のみに適用せられる法則であつて、決して人間性の全部に通用するものではない」と云つてゐられるが、それは精神分析學の所謂抑壓現象が外傷性神經症者に於いて最も顯著に見られると云ふ事實を過大に評量する場合には或は妥當であるかと思はれるが、抑壓過程と云ふことは精神分析學が固より重要視するところであるとは云へ、併し決してこれのみが精神分析學の發見ではない。凡そ人間として本能（エス、リビドー）と理性（自我）と良心（超自我）とを、程度の差こそあれ、具へてゐないものが絕對にあり得ない以上、精神分析學的事實は一切の人間性に妥當するものであると認められねばならない。何となれば、精神分析學は實に、人間心理のそれ等の三つの個所（インスタンツエン）の間の動的、力學的葛藤、又はリビドーの量的、經濟的の變動消長に依つて、心理の種々な樣相を理解し說明し處置せんとするものだからである。抑壓とは一種の力學的現象に外ならないのだ。

さて、問題を不良少年の事に戻す。私も亦、只今の場合、右に擧げた表の中の二のb、即ち「反社會的兒童（狹義の不良兒）」を主として問題にして考究を續けて見たい。

反社會的兒童とは云へ、凡そ思春期の少年少女にして多少とも反社會的傾向を示さない者があるであらうか。この問題は今更改めて提示するまでもなかつたことであつた。我々は既に本論の頭初に於いて、不良兒と善良兒との本質

的差違を認めないと斷つておいた點に盡きてゐる。併し、私がこゝにこれを更めて持ち出したには別の意味がある。これはさう云ふ一般的命題としてゞはなく、特殊的命題としてゞある。即ち、思春期に於ける男女少年の心理に於いては、右に擧げた三つの心的個所の間の力の均衡が必然的に失はれてゐるからである。人格の中心、又は主體たるべき自我（理性）は未だ極めて幼稚、未發達であるのに、それを批判し指導すべき超自我の威力は、多くの場合病的に銳く、而もその背後から迫まり來る本能の力は壓倒的だからである。かゝる不均衡、不公平な狀態に於いて心理の航程に破綻を來たさないことが如何にしてあり得よう。私は寧ろ、思春期年少者にして神經症者又は不良兒となるものゝなほ比較的少數なるに驚嘆してゐるほどである。

二、思春期に於ける不良性發現の必然性

精神神經症と早發症痴呆症との區別診斷が容易でない如く、素質的不良兒と神經症的不良兒との區別診斷も容易ではないであらう。例へば、かの阿部定の不良少女時代の如きを、素質的不良女兒と見るか、神經症的不良女兒と見るかは、餘程細かい調査を必要とするであらうが、恐らくは官憲はそのやうな研究を試みることなしに、彼女を投獄して了つたものと思はれる。私は兩種の合體と遠察してゐるのであるが、彼女に就いては、なほ後に論及するところあるであらう。

フロイドは、その『禁制論』の中で、神經症を惹起せしめる三つの原因を擧げてゐることは、私が本誌前號に於いて詳說しておいた通りである。フロイドが擧げてゐる三原因の內、第一は生物學的原因で、人間の子供は長い間かゝつて育てられ、その間彼等は全く無力で、庇護者に完全に依憑してゐる。第二は、種族發達史的原因であつて、これはつきり、人間の性慾が早期幼兒期（三、四歲頃）と思春期（十二、三歲頃）との二期に別れて開花し、その中間に潜在期の抑壓時代（種族發達史的には氷河時代）を經過してゐると云ふことであり、その間の複雜な（一般動物には全く想像も及ばぬ）心理生活のためにエネルギーを消費すること極めて多大であるためである。第三は、心理的裝置

の不完全と云ふことである。前にも述べた通り、人間の心理は三つの機能主體（エス、自我、超自我）から成立ち、それ〳〵に意志があつて、相互に指令を發して時にその間に撞着を見ること（殊に年少時代には）多く、そのために心理エネルギーの經濟に非常なる破綻を生ずるからであらう。

一般動物は大體に於いてその生活年數（壽命）の二十分の一の年齢に達すれば性的その他一切の生活に於いて完成してゐるのに、人間は二十分の一頃の年齢（三、四歳）では未だ全く不完全なものであつて、何等一人前の能力を具へてはゐない。松果腺に異狀あるもの丶みがこの時期に於いて不自然な（併し動物的には自然な）性的發達を示すやうであるが、正常なる一切の兒童は、夜間の勃起その他種々な徴候に於いてその第一開花期様相の片鱗を示すのみであつて、未だ全くその實行能力を具へてはゐない。實行能力は具へてゐないが、その性能傾向は分析的觀察者の眼には歴然とその行動の端々に見えて居るのである。その後、八、九年間の潜在的抑壓期を經て、思春期に至つて猛然たる勢を以て性感は第二期開花に入り、少くともその性能力は完成するが、文明社會に於いては彼等の生活能力は未だ彼等にその成熟完全せる性能力の發揮實現を許容しない。そこにまた同時に愈々高まり來る超自我の批判が加はり、他方本能の要求と、超自我の指令とを等分に聽き、公平に調節すべき自我の力は未だ殆ど成熟してゐないのであるから、彼等の生活が破綻に赴くべきは固より當然である。大部分の少年少女が、程度の差こそあれ、思春期に入ると共に不良的傾向の幾分を示すことは已むを得ないことでなければならぬ。思春期に於いて全然不良的傾向を示さない兒童が果して將來有爲の材であるか否かと云ふことも、なか〳〵速斷し兼ねることであらう。比較的早熟で、自我の完成早く、他方に於いてエスの力に於いて微弱である如き兒童は不良性を示すことが殆どないであらうが、さう云ふ兒童は將來に於いて偉大な發展をなすとは考へられない。寧ろ、エスの力のあまりに強く、自我はそれに反して晩成であるために、强力なるエスのために押されて非社會的行動をなすと云ふやうな少年であるならば、その成人の後には（自我は成熟し、エスは昇華の機會を多く持つてその暴力性を失ひ、超自我との間に圓滿なる統制を見たる曉には）有爲の材となる可能性が多いと云つてよからう。聖アウグスチヌスや水戸光圀の如きが、大體さう云ふ型の人物であ

つたらしく、彼等はその少年時代には相當の不良性を示したと云はれてゐる。

三、不良少女としての阿部定の行動

私は近頃、かの怪奇殺人者阿部定の不良少女時代の生活に就いて多少の調査をなし＊彼女の兩親の苦心に多大の同情を寄せると共に、他方本人の無意識葛藤に對しても秘かなる憐愍を禁じ得なかつたのである。

註＊ 詳しくは東京精神分析學研究所編『阿部定の精神分析的診斷』を參照ありたし。

お定がエスに於いて素質的に強力な少女であつたらしいことは確かである。さうしてその強力なエスは必然的にサディスティックな形で發現してゐるが、その強力なエスに對して自我と超自我とは軟弱であつた。エスをしてサディスティックな發現形態をとらしめたこと、その自我及び超自我の軟弱であつたことに就いては、兩親の教育態度が不適當（あまりにマゾヒスティック）に過ぎたことがその責めを負はねばならないと思はれる。さうしてその超自我は容易にエスに屈從してしまつたやうである。次のやうな事實に就いて、それが察せられる。自我と超自我とは甚だしく軟弱であつたとは考へられない。自我は寧ろ殆ど普通であつたと思はれるが、超自我は容易にエスに屈從してしまつたやうである。

お定は小學校五年生の時、その學友久保仙子同道登校の途中で、急に今日は休んで兩國へ見世物を（當時評判の見世物が掛つてゐたので）見に行くとて學友に別れて了つた。學友も一緒に見に行きたい誘惑を感じたが、その衝動を抑制して了つた。お定にもその抑制がなかつたとは考へられないが、彼女はその抑制に反抗して願望を充足することに病的な歡喜があつたに相違ないと思はれる。抑制とそれに對する反抗とがあつたと察せられるのは、彼女のその時の樣子が「怒つてゐるやうな、妙に取付く島のない態度だつた」と學友の描寫してゐるに徴して疑へない。

學友は大變氣になつたので、學校から歸ると直ぐにお定の家へ行つて見た。ところが、お定はまだ家に歸つてゐなかつた。で、學友仙子は家に歸つてその事を母に告げると、母親はまたその事をお定の兩親に報告した。夕方少し暗くなつてから仙子はお定の家へ行つて見た。すると、仕事をしまつてガランとした店先きの仕事場の隅つこに、お定

は後手に縛りつけられて轉がつてゐた。暫く覗いてゐたが、いつまでたつても目を閉ぢたまゝぢつと身動きもしないので、死んでゐるのではないかと思つた。奥の方からは、夕飯でも喰べてゐるらしく、職人たち（疊屋）の賑かなざわめきが聞こえて來た。仙子がおづ〳〵と近づいて「お定ちやん」と呼んで見ると、お定は目を開いてニッコリきまり惡さうに笑つた。そして大儀さうに半身を擡げながら、「あんた、すまないけど、そこの庖丁取つてよ」と云つた。それが、いつもの否應いはさないやうな口調であつたのと、それにお定をこのやうな目に合はせたのは、抑々自分がお定の行動を母親に告口したゝめに兩親の耳に這入つたからだと云ふ、いさゝか超自我の苛責（仙子が告白した動機の中には嫉妬が混入してゐたのであらう）もあつたので（仙子はさう告白してゐる）、拒むことも出來ず、傍の庖丁をとつてお定に渡してやると、彼女は「お仙ちやんは早く外へ出てゐて」と云つて友達を外へ出しておいて、ゴシゴシと繩を切り始めた。そしてやがて跫音を忍ばせて外へ出て來ると、「いゝ氣味！」と云つてクスリと肩をすくめて笑つた。「でもお定ちやん、どうするの？」と仙子は心配して尋ねたが、お定は平氣なもので、「お仙ちやん、心配することないわよ。あたいこれから本郷の叔母さんちへ行つて泊まつて來るの」と云ひつゝ、その頃習ひはじめてゐた三味線の調子をチリトンシャンなどゝ口と手でとりながら、明るい通りの方へ出て行つた。……と、仙子は語つてゐるが、如何にも場景躍如としてゐて、少女お定の不良不逞ぶりの相當に根深いことを示してゐる。

　右は尋常五年の時の事であつたが、お定が高等科に這入つた年の夏の終りにまた、その不良振りに於いて一層進展した事件が勃發した。それは魚屋の鐵ちやんと云ふ若衆との間に起きた問題であつた。鐵ちやんとの間に就いて浮いた噂が擴がつた後に間もなく、お定は學校をやめて家に引込んでしまつた。仙子がお稽古の歸りなどに立寄つて見ても、お定の兩親は不機嫌な顏をして、「お定は親戚に行つてゐますよ」と云つて、何故か會はしてくれず、またその行先も敎へてくれなかつた。併しその後十日ほどしてからお定は再度姿を現はし、お針の師匠の許に通ふことになつたので、お仙は會つて話して見ると、親戚の家へ行つたなどゝ云ふのは噓で、二階に監禁せられてゐたのだと云ふことであつた。その時、お定は兩親を非常に怨んでゐた。さうしてその憤慨ついでにこんなことまで云つたと云ふ。「お

仙ちやん、くやしいぢやないの、お父ッさんもおッ母さんも、學校の先生までも、あたいのことを、鐵公と何かあつたんだらうつて、さういふのよ。いくらさうぢやないと云ひ張つても、身體を見りや分る、强情な奴だつて、てんできいてくんないの。ほんとに、あたい正直いふけれど、そんなことないのよ。たゞ鐵公と一緒に、活動見物に行つたり、おそば屋へ行つたりしたゞけなのよ。それなのに、あんなことするなんて、馬鹿にしてゐるわね。」と云ひつゝ彼女は少し涙ぐんでゐた。さうして「あたい、だから、本當にそんなことしてやらうかしら」と云つて捨性らしく唇をかんだ。

こゝまで根深く不良化した子供に對しては懲罰は何等の効果がないどころか、却つて悪い反動を示す。懲罰はもつと早く加へられねばならなかつた。さうして、服從の快感を十分に經驗させておかねばならなかつた。で、次に私はお定の場合を參考として懲罰の意義に就いて少しく論じて見なければならない。

四、懲罰の意義及び方法

右に擧げた三種の不良行爲の心理機制に就いて、まづ分析研究を試みてかゝらう。三種の不良行爲の第一は無斷休校であり、第二は縛纏切斷であり、第三は鐵公との自由遊興であらう。これ等の行爲をなすに當つて本人はそのよくないことを知つてゐないのではないことは、旣に私の云つた通りである。彼女の自我はそれが兩親の忌諱に觸れるべきことを十分に承知してゐるのだが、彼女の超自我は自我に加担せずして、エスのために自我と共に克服せられてゐる。併し始めから克服せられてゐたのではなく、長い間逡巡はしてゐたのである。愈々、自我が超自我を克服してエスと馴合つたのは自我としては餘程の決心を要したのであらう。それ故に彼女はその時「怒つたやうな」表情をしてゐたのである。それは兩親の見えざる俤、聞えざる聲（超自我）に對する反抗を意味してゐたのであらう。縛纏を切斷した時もその心理機制は全く同樣である。自我はそれを切斷して兩親の怒りを更に買ひ增すべきを十二分に承知してゐるのであるが、兩親（超自我）を克服することの快樂の方が、彼女のエスにとつて、兩親の怒りを買ひ增すこと

の恐怖よりも大きかつたのだ。否、その恐怖の興奮さへもが彼女にとつては、一種病的な性的快感であつたに相違ないと思はれる。第三の場合の心理機制も全く同樣である。その兩親（超自我）の怒りを買ふべきことは百も承知の上であつたのだ。果然、兩親のみならず、學校の先生までもがこれを憤り、彼女を懲罰したが、そんな懲罰は彼女にとつてはたゞ恐怖に因る性的な快感を誘惑する機會たるに過ぎなかつたと思はれる。彼女は實はもつともつと懲罰して貰ひたかつたのであらう。そんななまぬるい懲罰でなく、もつと嚴しいサディズムを加へて貰ひたかつたのだ。さうしてそのサディズムによる恐怖に依つて性的な興奮を覺えたかつたのだ。彼女はそれほどまでにサド・マゾヒスティックになつてゐたのだ。で、これ以上兩親や先生（超自我）の苛責懲罰を誘惑するには、それ以上の惡事を働くより外に道はない。そこで彼女は「本當にそんなことしてやらうかしら」と云ふ決心にまで追ひやられたのである。一つにはそれが彼女の本來の願望で、超自我の盲判を待望してゐたのだ。であるから、かうまで不良化した子供に對しては普通の懲罰は全く何等のよい効果を齎さないどころか、却つて益々彼女を惡くするのみである。これほどの苛酷なる（彼女の主觀にとつて）懲罰を受けた以上、もつと惡いことをしてやつても當然だと云ふ無意識論理が働くのみならず、もつともつとサディズムの淫樂を享受しようと云ふ慾望を强めるやうになる。

　では、かう云ふ不良兒に對しては懲罰は全然加へないのがいゝのであらうか。懲罰を加へてやらなければ何處か外へ行つて他人から懲罰を加へて貰ふやうな行動をとるかも知れない危險がある。懲罰を加へずに一室に監禁しておくことも、この年齡に達した子供に對しては實際上不可能であらう。現にお定の兩親がその方法をとつて、やがて十日ほどしてまた彼女を解放してゐるのである。尤も、懲罰だけは一通り加へるには加へたらしいが……。

　かくまで不良化した子供に對しては、甘やかしておいてもいけないし、懲罰を加へてもいけないし、放任しておくことも事實上出來ない。事實上何とも方法がないやうであるが、分析以外の方法としては、形式上に非常に大事にするらしく扱つて而も効果に於いては非常な懲罰になるやうな態度をとることだと私は思ふ。換言すれば、性的亢奮を與へないやうな懲罰（サディズム）の加へ方をすること共に、他方彼女の超自我を覺醒させて自我との位置を轉倒せ

しめる如き方法である。例へば、シェイクスピアの『じやじや馬馴らし』の男主人公ペトルーシオがその主人公カサリーナを取扱つたやうなやり方である、こゝに『じやじや馬馴らし』の筋書を書くことは煩はしいからやめるが、それを知りたい人は、拙著『精神分析・社會生活法』の附錄『女心の分析』に精しく分析的に論じておいたから、參照せられたい。その女主人公カサリーナもお定の如く、幼時期に兩親から甘やかされて育つて來て、その正しいサディズムの醍醐味を享受すべき機會を持たなかつたのだ。エスに於いて非常に強力なものが正しいサディズムの醍醐味を享受しないと、自分の方がサディスティックなり、丁度痒ゆいところを掻いて貰ひたい者が、周圍の人から爪を立てゝは可愛さうだと云ふので存分に掻かずにそつと撫でゝだけおかれたりすると、本人の方がイライラして來て却つて周圍の者にかうして掻くのだと云つて爪を立てゝ向つて來るやうなものだと、私は右言及の論文の中で論じておいた。その意味で、お定も亦その幼兒期に於ける取扱はれ方の惡かつた不幸な女（幸福すぎて不幸な女）であつたのだと私は思ふ。

とは云へ、お定の父親は彼女に相當のサディズムを加へるには加へたのだが、そのサディズムは全く昇華せられざるサディズムで、彼女の超自我を養成し得る程のものではなく、たゞ彼女の性的興奮を誘發する程の、洗練せられざるものであつたらしい。現に彼女の幼友達仙子は、その種の思ひ出をかう語つてゐる。「お定ちやんのお父さんは、昔氣質の職人でしたから、何かと云ふとすぐに打つたり折檻したり、ずいぶん手荒な叱りやうをしたやうでしたけれど、それがお定ちやんには、ちよつともそれほど叱られてゐると感じないやうでした。*」と。

註* 恐怖が性的亢奮を誘發すると云ふことは性心理的現象に就いて分析調査をして見たことのない人々には不思議に思はれるかも知れないが、それには數々の實話が擧つてゐる。試驗場で射精したり、殺害されるに際して膣内に分泌したりすることは人々のよく知るところであらう。

恐らくは彼も亦、世の大部分の父親たちのやうに、たゞ自分の感情や亢奮にまかせて子供等を打擲し懲罰し、子供の超自我を養成する程の懲罰を加へるの道を知らなかつのであらうと思はれる。併しそれは分析を學ばざるものであ

る限り、相當に教育ある人に就いてさへ期待し難いことであるから、彼の如きあまり教養なきものに對して、これを要求することは無理であらう。超自我を養成する程の懲罰の加へ方とは、つまり子供をして「服從の快感」を知らしめることである。つまり、自分の主觀にまかせて怒つたりするのではなく、子供に十分に道理の徹底するやうな叱り方をするのである。それにはまづ子供の無意識心理の機制を十分に洞察するだけの分析眼を具へてゐると云ふことが先決問題であらねばならないのである。幼少の子供の無意識心理の動きに順應して客觀的に、子供自身が今は自分に懲罰が必要だと考へてゐる時に析よく懲罰を加へてやるやうにするならば、子供の超自我は加速度的に强化せられて行くであらうが、自分で必要と認めてゐる時に懲罰を加へてやらず、自分で必要と認めてゐない時に感情的に懲罰を加へたりするから、子供の超自我は不完全ながらも兩親を批判して、その權威を認めず、これに反抗することに却つて亢奮を覺えるやうになるのである。卽ち「服從の快感」を知らずして「反抗の快感」のみを知るやうになるのである。旣に「反抗の快感」を覺えてしまつた子供に對して新たに「服從の快感」を知らしめることは、『じや〳〵馬馴らし』式の非常手段を用ゐるより外に道はないと私は信じてゐるのである。

　私は近頃、自家の子供等がその母親と次のやうな問答を交してゐるのを聽いてゐて、秘かに自家の子供等が「服從の快感」を知つてゐることに安堵を覺えた。卽ち、子供等の學友はその兩親に對して、ドロツプを買つてくれなければ、勉强しないと駄々をこねて、兩親からその願ひを容れて貰つたと云ふことをやゝ羨ましげに話してゐたに對し、母親は「さう、それではお前がたもさうして御覽」と云つた。すると子供等は「自家ではそれは駄目だ」と斷念してゐた。我等は子供等に理想的な教育を施したと云ふ自信はないが、分析を知つてゐたお蔭でまづはこの程度には大過なく育て得たかと思ひ、秘かに斯學の恩惠に感謝してゐるものであることを告白するために、こゝにこの挿話を傳へて、本論の結びとする。(完)

少年教育に於ける心理學上の問題

北山　隆

一、無意識の存在

諸氏もヒステリー・恐怖症（フオビヤ）・強迫神經症・パラノイア等といふ名稱を御承知であらうが、さうした人聞きの悪い名を被される人達の中には、案外立派な智能・人格を持ち、非凡な社會的地位にある樣な人が、隨分と存在するのである。彼等の中には長い間、首尾よく自分の苦痛や症候を隱しおほせてゐる者が多く、近親者の爲に故意にそれを隱してゐる場合もあれは、自分一個の習慣として深く恥かしい事に思つたり、自ら矯正に努めたりしてゐる場合もある。

故に社會的には立派に通る人であり乍ら、分析的見地よりすれば、自己の意識的生活方針に反する樣な利己的本能、破壞的感情に捉はれた赤ん坊になつてしまふ者が出て來る。かゝる心理には普通の智的社會的心理生活とは違つた平面にある願望のせいである事が觀察せられる。而してこのやうな心理は心の發達が不平均なためで、そこには自律力は半分程しか及ぼされてゐないのである。心理組織といふ物は種々の層から成立つてゐる。即ちそこには進歩發達してゐる時期もあるし、停滯してゐる時期もあるし、定着や退行を示してゐる時期もある。その各時期の特徴が集まり、全體として所謂人格を形成してゐるのである。

こゝに教育に關する問題として、先づ「無意識の爲す所、その葛藤、その現はれ」を論じよう。この無意識なる語

を、不快な耳ざわりな言葉として嫌やに感じられた方があるかもしれない。しかし我々がこの語をよく理解する時、さうした不快は必ずや消失するであらう故に、私は理論や定義を述べることはよして直ちに實例によつて無意識の現はれをお目に掛けよう。

二、兒童心理に於ける無意識

（一）、四歳未滿の男兒。一人子で極く小さい時から、父親が母親へ愛情を見せると忽ち激しい嫉妬を起してフン返りかへり、顔を眞赤にし足をバタ〳〵やつて邪魔しようとするのだつた。この子は肉體的にも精神的にも健全であつたが、最近喧嘩相手と否の區別なく他の子供達を無闇に擲る樣になつた。更に面白いのは他人を酷く打つた後できつとその子に接吻する事で、「何故なぐる？」と問はれると、すつかり消氣て返事もしない。唯、或時かう云つた。「僕は惡魔だから」と。又或日、二人でボートに乘り乍ら私が水中の魚について話をしてやつた時、子供はかう答へた――「僕、お父さんを水中へほり込んでやるの」――。夏になると母親は子供と田舍へ行き、父は週末に來る事になつてゐた。父が歸つた月曜の朝、子供は大眞面目で「お父さんが町でお金を儲けてる中だけ、お母さんは僕と結婚するのよ」と云つた。又こんな夢も見た。「鳥が一羽飛んで來てお家を壞しちやつたの。僕その鳥を殺してやつた。」（殺すといふ語を非常に強く云ひ乍ら足をバタ〳〵させた。）

この夢を分析すれば疑ひなく父親への嫉妬と憎惡の表現である事がわかる。強い父、愛する父へその感情を向ける事が出來ない子供は、それを遊び友達の方へ轉移したのであつた。

（二）五歳の女兒があつた。兩親は「やがて生れる赤ん坊」の事をよく云ひ合つてゐたが、生れる三週間ばかり前から其の女の子は一人で色々の妙な遊びを始めた。私の見た時には部屋の眞中に父の杖を立て、ハンカチをのせた上に父の帽子をかぶせた。そして其の周圍を始めは緩く、だん〳〵早く廻り出し、「新しき王は起ち給へり（A new King has arisen）」と聖書の文句を唄ひ乍ら遂には夢中になつてしまう。「お嬢ちやん、それは今度生れる赤ちやんで

すか」と私が問ふと彼女は走るのを止めて非常に恥かしさうに逃げて行つた。生れる日が近くなるといよ〳〵その遊びは甚しくなり、丁度その前日に一人でそつと家を飛出し――そんな事は今まで無かつた――大分違い友達の所へ行つて、その日と次の日を過した。歸つて來た時、彼女の態度はすつかり成人になつてゐた。兩親から離される恐怖、新來の闖入者への子供らしい抗議、及び新しい家族卽ち「新しき王」を可愛がらうとする成人らしい、倫理的な態度を共處に見る事が出來る。

（三）一人の勞働者が九歳の男兒を連れて私の所へ來た。一人子で學校では一番、病氣をした事もない。この二週間程、この子は强迫的に絶間なく頭を横に振る症候が起つて、止る事が出來なかつた。人目につくし、自分でも苦痛なので學校へ行かなかつた。一應診察し、又夢を調べて見ると、それは何かの抗議を意味するらしく思へた。「お子さんが御出來になるのじやありませんか」と父親に訊くと、彼は次の部屋から妻君を呼んだ。彼女の恰好は立派にそれに對する答へとなつた。その後の豫想外に短期間の分析によつて、この子は赤ん坊が母の愛を奪ふ事を恐れてゐたのであり、その痙攣も頭を横に振る否定の身振りによつて、來るべき事件への抗議と拒絶を表明してゐた事が明かとなつた。

三、兒童の無意識に於ける外傷及び願望

右に述べた幼兒的な無意識の外に、外傷と云つて、特に酷い目に逢つた樣な經驗がその人の生涯に心理的障害を起す事がある。外傷には「出產、生齒、離乳、家庭よりの獨立、思春期の到來、第二次的性的成熟（聲變り・髯其他出現・初潮）等」がある。例へば、出產外傷を考へて見るならば、我々は勿論生れたばかりの赤ん坊に出產の經驗を訊く譯には行かないが、出產の前後に於て、胎兒が何等の印象を持たない事はなからうと思はれる。暗い胎內と外の光、溫度の變化、及び胎內の具合と蒲團着物等との差異、これらの物は呼吸其他の身體的變化を除いても當然万人の終生忘れられぬ外傷となる可能性がある。最近の研究によれば不安神經症の如きは出產外傷に起因するらしく、フロ

イドも人間最初の經驗たる出產外傷は、個人の一生に於る苦しい感情的反應の原形となり、家を離れる時、愛する人を失つた時など特にさうであると云つてゐる。（以上の外傷と些か趣きを異にした物に全くの個人的外傷として、幼い時に頭へ何かを酷く落されたと云ふ樣な場合がある。）

外傷と共に幼兒心理を形づけるのは幼兒の根本的な願望、特に愛情を得んとする願望が重大な物である。かのアブラハム教授の引かれた古い物語によると、或時フレデリック二世がかう云つた。「一邊も言葉といふ物を聞いた事のない子供がゐるとしたら、そいつらは一體何うしてお互に遊ぶだらう？」物好きな王樣の命令で、一つの言葉も身振りもなしに何人かの子供を育てる事にした。が、王樣の質問は未解決のまゝ終つた。何故なら、それら子供達は皆死んでしまつたから。親しい言葉や身振りなしには赤ん坊たちは生きて居られない物だ――と。又かう云ふ話もある。やはりアブラハムの云ふ所によると、世界大戰中ドイツに至れり盡せりの保育院が作られ、出征兵士の赤ん坊が育てられた。熟練した保姆がついてゐたに拘らず赤ん坊は忽ち樣子が變になり、「保育院病」と名付けられる樣な狀態に陷つた。その症狀は食慾衷失、發育停止、內臟障害、神經不安、不眠等であつたと。これは如何に設備はよくても、心理的要求の滿たされざるために幼兒らが死ぬといふことを示す例である。人間は時間通りに飯さへやつて置けば良い樣な機械ではない。この原則が承認されない限り、母の乳及び母の愛撫から離して、子供を保育院等へ入れる譯には行かない。尙愛情について云つて置きたいのは、愛情といふ物が往々にして何か行爲の報酬として與へられる事である。「お前がチヤンとさうしたらキッスして上げますよ」と云ふ風に。だが、かう云ふ取扱を教育家たる者は決して濫用しないで頂きたい。それは「不變の愛」を否定し、愛は他の代償物で買ふ事が出來るといふ事を教へる譯になる故に。但しそれが悪いと云つてその反對へ極端に走るのも又よろしくない。教育家は「絕對の愛」と「報酬的な愛」の中間を巧妙に用ひる事が望ましい。

四、教育者自身の無意識

始め、分析的な自己觀察の必要を明かにする爲に、上流階級のモダンな智識ある二人の母親の話を述べる。一人は四人の子持で、不感症であつたが、時々、氣まぐれに子供をいじめては、すぐ後で自責感に攻められるのだつた。彼女は、八つの男兒が「お母さん何處いくの」の訊いた答へに、「お醫者さんへ――お醫者さんは、私がお前達を可愛がる樣にして下さるからね」と云つた事を自慢げに話した。一見この答は子に對する誠實と愛を表明する樣であるが、無意識には又もや此の母親は子供への惡意を示したに過ぎない。「子供を可愛がる樣にして貰ふのです。」といふ言によつて、母親の疑ふべからざる、本能的な愛と善意への確信を崩し、逆に母への不信と悲しみを助長したのである。分析の示す所によると、彼女は子供時代への定着を持ち、その爲に妻及び母としての自らの地位を悟る事が出來ず、無意識的には子供として止つてゐたが故に、自分の子供を敵對者として遇したのであつた。

今一つの例は、或母親が六歳の男兒に「どうして僕には兄弟が一人もないの?」と問はれた時、子供に對して常に正直なるべき事を知つてゐた彼女は「これ以上子供の出來ない樣にしてしまつたのだよ、赤ん坊は厄介だからね」と答へた話である。こゝにも正直の假面を被つた、酷い子供への惡意が見られる。この母親の言葉は「自分が愛され必要とされた爲に生れて來た」といふ子供の確信を動搖せしめ、自分が生れた時も一向歡迎されなかつたに違ひないと考へさせる樣になる。この母親にも諸種の神經症的傾向があつたが、その中核を爲す物は矢張り子供時代への定着であつた。

かうした定着が子供に及ぼす害毒は非常なものであるが、もし敎育家が其の傾向を持つてゐる場合が起つたとしたならば、それは傳染病保菌者同樣の恐しい事になる。敎育家は是非自らの心理的葛藤に注意し、子供の無意識を傷つける事のない樣に願ひたい。それには敎師の良き鏡である兒童の無意識的態度を仔細に觀察し、更に精神分析の研究によつて自身の無意識を悟られるならば、敎育の効果は一段と進歩される事と思ふ。さもない時は、敎師が不本意乍ら知らず〳〵子供に取り返しのつかぬ傷害を與へるに至る。

先日、ある女の先生が面白い話をしてくれた。即ち、一人の所謂劣等兒(男)を扱つた際、その先生には万更さう

とも思はれなかつたので、その冷淡で無關心な子供を特に注意し、常に元氣づけては答へさせる様にした處が、子供は次第に先生へ心を向ける様になり、遂には大いに自己表現を行ふ様になつた——と。

私は之を聞いて、それは必ずや子供の發育を助けるべき愛の缺乏から來た、外界興味へのナルチス的禁止の表はれであつたらうと云ふと、先生は急にその子が繼母に育てられた事を思ひ出したのであつた。

この場合、子供が母を求めるに對して先生が女性であり且、その人格が子供好きであつた爲に成功した譯である。この點から私は、教育上に最も重大な「轉嫁及び逆轉嫁」の問題を考究しようと思ふ。

五、教育に於ける轉嫁及び逆轉嫁

轉嫁はフロイドによつて發見され、フェレンチ等によつて强調された、斯學の重大問題であつて、幼兒心理に大きな役割を持つた人（親兄弟等）を思はせる様な人物に對する、善意的又は惡意的な感情の轉移を云ふのである。（西郷や乃木が父を思起させ、吉祥天やマリアが母を思はせる如き。）

前揭の兒童の話では、無意識的に母の姿を求めてゐた子供は、その安住する處のない子供としての感情を早速、先生へ轉嫁したのである。その先生が若いに拘らず母性型だつた爲に、子供が母の姿を先生へ轉嫁する事を許し、同時に又子供のさうした態度に對して、先生の方からも子供を積極的に愛したのであつて（逆轉嫁）、之によつて先生自身がその母性的本能を滿たす事が出來、二人が相互に轉嫁し合つた形になつてゐる。卽ち、子供の母を求める聲と、先生の子供を愛さうとする感情とが、相互利益として結合された譯である。考へて見ると、この場合うまく行つたのは、實は偶然の幸運であつて、先生と子供の態度がたま〳〵一致したからである。もし、この先生が母性型ではなく神經症的性格で、子供を目の敵にする様な人であつたならば、どうなつたであらうか。恐らく、單に其の子供の指導に失敗しただけであく、更に一層子供を惡くしてしまつたであらう。

最後に結論として、かう云ひたい。——兒童の取扱を誤り、爲に兒童に惡影響を與へる事なからしめんには、第一

に兒童の根本に於ける無意識的要求竝びに願望を察知する事、第二には敎育家自身が、自らの無意識機制を研究されん事が最良法である――と。

六、補　記

右はニューヨークのファイゲンバウム(Dorian Feigenbaum)が一九二七年にカナダのトレントに於ける世界敎育總會に於て行つた講演を紹介布衍した物である。論中、彼の英才たる事が處々に感ぜられるが、最後の轉嫁及び逆轉嫁の問題については些か說明を附加する必要があらう。

右の例に於て彼は、子供の敎師に對する轉嫁のみならず、敎師が子供へ指し向けた逆轉嫁をも敎育に必要な、全く喜ぶべき現象であるが如く述べてゐる。子供が敎師を愛し、敎師も又子供を愛せば敎育の理想は旣に盡きたかの樣に考へられる。すると、分析眼よりする敎育はペスタロッチ流の、或ひは近來流行の、お安い母性愛万能主義と同一であらうか。

吾々は分析療法に於ける逆轉嫁こそ分析者の最も警戒すべき事であり、陷穽である事實を忘れる事は出來ない。不幸な定着の爲に戸迷ひしたリビドーを解放し、患者の自我統制下に導くのが分析療法の目的である事を知る者は、患者の轉嫁のみならず逆轉嫁をも許して、その戸迷ひリビドーを單に右から左へ移す如き方法には斷じて讚同し難い。それは、學校內の敎育と云ふ點のみに於ては、或ひは一向差支へないかも知れぬ。しかし、その生徒一生の敎育(卽ち分析的敎育の目的)を考へる時は、實に寒心すべき敎育法ではあるまいか。相互に纒綿し合つた生徒が其の敎師を離れねばならなくなつた時、如何になり行くかを、敎育家は省る必要がないであらうか。實際上、卒業後も無闇に先生を訪れる子に碌な者はない。敎師は父たるも母たるもよし――だが、同時に常に嚴正なる分析者たるの位置を下るべからず(特に高學年に於て)である。

ファイゲンバウムも其の邊充分承知であらうが、讀者の誤解を恐れて念の爲に申添へる。

(完)

精神分析學から觀た不良兒

長崎文治

神經症的犯罪の機制

ニューヨークの有名な心理學者、デイヴィッド・シイベリー博士は、過去十年間に於ける精神病者累加の統計を取つた擧句、二百年後には地球上は狂人で滿たされるだらうとの嘆聲を發した相だが、文明病としての精神々經症患者を加へたならば、今でも常態の精神を保持してゐる者を探すに相當な苦心がいるだらうと思ふ。

犯罪者の精神鑑定をした醫者が、殆んど云ひ合せた樣に、犯罪者には何等かの程度に於て精神素質の異常が認められると云つてゐるが、併し實際に於て、遺傳から來る中樞神經の器質的疾患の爲めに道德性の缺如してゐる者の犯罪行爲よりも、神經症者の犯罪の方が多いから、多數の犯罪者は生活環境に依つて生ずると考へられる。併しこゝで生活環境といつても、それは普通一般に環境論者が考へてゐる樣な純客觀的な機制ではなく、本來快樂にのみ支配されてゐる人間の非社會的な傾向を現實生活に導くところの心理機制であつて、つまりエディポス・コムプレクスの克服如何にあるのである。卽ち生育の最初に持つた、異性親への性的牽引、同性親への排拆傾向と異性親に對する關係を一致させて、異性親と同一化し、嚴格な父親の原型を道德律として攝取して人格の內部に一つの部分人格としての超自我を作り、これが所謂良心となつて非社會的な衝動を制禦する目付役となるのである。それ故、小供の最初にして

重要なる生活環境とは兩親であつて、子供に對する兩親の正しき處遇により、エディポス・コムプレクスは克服せられて、子供の人格の中に社會性が獲得せられることになる。若し兩親の小供に對する態度が寛に過ぎ、又は嚴に過ぎた樣な場合には、小供の精神の中に發達して行く超自我、卽ち人格の高尙なる部分の發達は阻害され、又は異常な方面にそれて發達をする。その結果、エス卽ち衝動に支配されてゐる自我を統御する事が出ないで、人格の社會的部分と非社會的部分との葛藤が起きて精神の負擔が加重せられる。この負擔といふのが罪障感 Schuldgefühl といはれるものであつて、これは本來、超自我の要求が過大であるか、自我自身がその負擔に耐え兼ねるか、何れかの場合に生ずるもので、この罪障感、卽ち精神的の苦悶が、肉體的苦悶として、一の具體的の症候として肉體の上に肩代りさせられたものが神經症であり、犯罪行爲はそのやうな神經症が積極的に一つの行動として表はれて來たものであるとも見られ得るであらう。それであるから神經症と犯罪行爲とは同根異態で、前者は所謂内向型の人に表はれ、後者は外向的性格者に現はれる。

この罪障感といふのは、現實的行爲に因つて生じた感情ではなく、純粹に精神的原因によつても起り得るものであるが、結局はこれ等は同一精神過程を經るものである。卽ち、一般の犯罪者が犯した罪狀を自白し、これに對して適當な刑を與へられる事によつて、今迄の不安焦燥の氣持から脫して、平和安心を得ると同樣に、神經症者は自己の抱く罪障感に對して、これを除去する爲めに懲罰を要求する。併し現實社會では非社會的願望も一定の行動的表現に迄達しなければ懲罰を與へない。そこで何等かの犯罪を行つて懲罰要求を滿させ、それに依つて罪障感を消滅させるのである。かゝる神經症的の犯罪行爲は罪障感に依つて驅り立てられるのであつて、フロイドは、犯罪者、殊に年少犯罪者には犯行後に罪障感が現はれるのでは無くして、犯行前に見られると云つてゐるのは此の點に就いてゞある。そして不良兒は殆んどと云つてよい位神經症的犯罪者である。

不良兒に懲罪や訓戒は役に立たない

不良兒の多くを神經症的犯罪者であるとするならば、かういふ小供を矯正するには如何なる方法を講ずるのが最もよいかといふ事が問題となる。

勿論、懲罰といふものは餘り用ふべきでなく、その效果は極めて少い。概して神經症的な不良兒に對して懲罰を以て臨む事は、如何なる場合に於ても效果は擧らない。

これが他の器質的疾患に依つて腦中樞に故障を來してゐる不良兒とか、又は終始非社會的な環境に育てられた爲めに犯罪に對する正しい認識を缺いて、正不正のけじめをつけ得ない者や、犯罪的な雰圍氣の中に生活してゐる爲めに道德性がいびつになつてゐる樣な場合――例へば「仁義」や親分子分の關係に依つて成立つてゐる特殊の團體で、この團體では、時には非社會的行爲を、義理とか人情とか、又はその團體のみの指導精神の上から敢然として行ふのである――さう云ふ場合には、懲罰によつてその非社會性を知らせ、又は部分的團體の有する指導原理道德は全體的社會の道德の前には何等の力が無い事を懲罰によつて實證して、橫道に外れてゐる道德意識を取戾させる事は出來ようが、神經症の不良兒は懲罰を受け度い爲めに犯罪を行ふのであるから、懲罰を與へる事は、彼のこしらへた民の中へ巧く落込む事になる。併し、それでも懲罰を受けた事によつて、彼を犯罪行爲にまで驅り立てた罪障感が根切りになつたならば、この迷へる不幸な羊を救ふ事が出來るが、罪障感といふものは自我と超自我の葛藤の產物であるから、その本源を涸らさなければ無くならないし、罪障感のある限り永久に犯罪行爲は續くのであるから、罪障感といふものは恰度涓々として湧き出る泉の樣なもので、いくら掛み干しても後から後からと溜つて來る。不良兒が、その犯した罪の故に折檻されゝばされる程、必ずしも反抗的でなくとも、益々惡人の傾向を强くし、折檻を受けてゐる時にでも、それに對して、苦痛は感じてはゐるが――決して苦悶してはゐない。寧ろその時、又は折檻直後には滿足氣な表情をさへ示してゐる。斯樣な子供にはいくら折檻してもするだけ無駄である。唯彼の被虐性感情を滿足させるだけで、終ひには折檻を受ける事自身に快感を感じ、折檻して貰ひ度い爲めに犯罪行爲を行ふ樣にさへなる。

又、訓戒もかういふ子供には役立たない。訓戒といふものは、感情が意識によつて統制されてゐる健康兒童の場合

には効果を齎らすが、神經症の不良兒は、自我がエスからの衝動に尻押しされて、理性の領域に迄高まつてゐる超自我の命令に反抗してゐるものであるか、又は超自我の要求が過大であつた爲めに自我の反抗となつてゐるかであるから、超自我に左擔する樣な訓戒の方法は却つて自我の超自我に對する負擔性を昂める許りである。

それでは不良兒匡正には如何なる方法が最も有效であるかと云へば、それは分析的再教育である。この禍根は神經症的な不良兒はその出發の最初に大きな禍根を殘してゐるから、これを刈り取つて了はなければならない。この禍根はエディポス・コムプレクスである。不良兒の心理をいま一度幼少時のエディポス・コムプレクスに戻してそれを克服させ、その上に自我と超自我の調整を計つてやらなければならない。このエディポス・コムプレクスの時代は兩親の愛育の下にある時代であるから、不良兒は愛の教育によつて擁護されなければならない。それは不良兒の心理機制をよく分析してゐる保護者、又は教師によつて行はれるもので、不良兒をたゞ横着者とかひねくれ者とか、外的にのみ見てゐる樣な人達には不可能な事である。

不良兒矯正に於ける轉移の方法

不良兒が感化院の中とか、教師の下では極めて善良であり、全く犯罪性から脫却し切つて了つたかの如くみえるが、一旦教師の手を離れ、又感化院から家庭に歸されると幾何もなくして又犯罪をなすといふ事は屢々聞くところであつて、この點に於て感化教育とかその他の矯正施設は何の役に立たないとさへ非難されてゐる樣だ。事實、感化教育が連りに研究され、矯正施設が整つて來てゐる割合に、その成績は擧つてゐないし、單に一區劃內の保護下に、又は教師の監視下に於てのみ不良行爲が屛息してゐるといふのでは感化教育の價値は無い。感化教育の目的は横道に外れて來た不良兒を正しい社會生活の常道に還す事で、歪められてゐた彼の自我を整理してやり、社會性を獲得せしめることである。ところが、從來の感化教育は自我の整理の方にのみ重きを置いて社會性の獲得といふ方面に注意を向けなかつた爲めに、切角矯正された不良兒が、社會的適應を得る事が出來ないで蹉跌し、再び犯罪行爲に陷る樣にな

るのである。最近この點を痛感して、感化教育の中に社會性の獲得と云ふ一項を重視して來たのは、斯界の一大飛躍である。

併し社會性の獲得といふ事を單に社會の事象を認識させ、これに對處して行く、所謂意識的方面の教育を以て足れりとするならば、一般の教育と少しも異らないし、何等感化教育の特色を持つものではない。矯正された不良兒といふものはもう一度幼兒期の纎弱な感情狀態に齎らされて來てゐるもので、エディポス・コムプレクス克服期に遡ぼつて自己の無意識を整理し、父への同一化、母への同一化を行つて最初の社會性を獲得し、これが次第に洗練されて他人との關係に推及ぼして、正しい社會的適應が出來るのである。そして小兒の家族、特に父や母に於ける愛の關係といふものが將來の總ての愛の關係の形式や經過をさへも決定するものであるから、社會生活に於ける對人關係は、小兒期の愛の生活によつて規定されると云ふ事が出來る。

不良兒は、必ず最初の小兒期に於て愛の要求が滿される事が少なかつたか、又は、餘り多過ぎたかの何れかであつて、愛の生活が障碍されてゐるから、不良兒を矯正する爲めには教師は不良兒の幼兒期の最初の愛の關係を自分に移して來なければならない。これと同樣に、一旦矯正した子供は更に整理された家庭に還して、正しい家族關係の中に教師との紐帶を移させしめなければならない。この轉移が巧く行くか行かぬかによつて不良兒矯正の實が擧がつてゐるかゐないかゞ分るのである。

不良兒が、感化院の中では噓も隱しもなく眞箇に善良となり、最も信頼する教師の側では、如何なる場合に臨んでも、假令教師の監視が緩んでゐても、決してその信頼を裏切らないといふ事は當事者から聞く處であるが、これは感化院を出され度さに殊更に裝ほつたり、教師の眼を恐れて不良行爲を行はないといふ樣な常識的な考へ方は實際に於ては當てはまらない。又、感化院から歸された子供に對する家庭や社會の取扱ひ方に缺陷がある爲めに、又もや不良行爲を犯すといふのも遡源的の觀方ではない。

感化院に於て不良傾向を矯正され、又社會性が附されたとしても、轉移の方法が巧く行かなければ何の役にも立た

ない。胎兒から母親の手へ、母親の手から家族關係の中へ、家庭から交友關係、又は學校へ、學校から社會生活へといふ轉移の道程が調子よく行く所に正しい人間性社會性の確立があるのである。この轉移の重要性は幾度か述べた所であるが、古來總ての人間生活に不可缺の役割を持つてゐるものである。

現代の感化教育はこの轉移の機制に留意し、感化院、又は教師から社會又は親の手に巧く移してゐるであらうか。胎内にある中母親と胎兒を繫いでゐた臍緒は出産によつて斷ち切られなければならない。兩親の愛を一身に集めやうとする利己主義も同胞の抗議によつて或程度の徹回を餘儀なくされる。そして、餘り家庭で我儘に育てられた子供は學校生活に於ては敎師に、交友關係に於ては友達と、馴染む事が出來ない。それと同樣に、感化院に於て矯正された子供は、こゝで作られた感情關係を徐々に兩親又は社會への感情關係に移し、それと共に、感化院に對する感情關係を次第に弱めて行く樣な方法で取扱はれなければならない。アイヒホルンはこの轉移の關係を重要視し、これによつて不良兒矯正に成功を收めてゐる。(完)

靈魂二元觀と雙生兒崇拜（オットー・ランク）

——恐怖と自我、我々はこの二者を持つ雙生兒である——ホッブズ

延島英一譯

我々が度々接する雙生兒を素因とする考へ（モチーフ）は多くの場合別自我を素因とする考への具象化なることが確められてゐる。其中には自我のみが見得る純然たる幻想的別自我の他に、ジーキル博士とハイド氏の場合の樣に相矛盾する二性格への自我の分裂があり、ミュセーの例の如く兄弟の二重人格があり、又雙生兒の二重人格もあつたが、此最後の形態（ナルシス神話）にあつては異性の雙生兒間の戀愛まで見られたのである。文藝上では、雙生兒の主題は混同喜劇に好んで用ひられた。註一 民俗學、祭儀、又宗教生成などを參照すると、此雙生兒問題は我々を人類文明の始源にまで遡らせる。スコットランドの學者ハリス Rendel Harris が其一聯の科學的勞作（註二）で示すところによると、雙生兒崇拜は人類の最古且つ最普遍的な制度に屬してゐる。それは原始人の迷信の中に見られるのみならず、現代の我々の宗教的信仰の中にも痕跡が殘存してゐるといふのである。

此ハリスの示す人類文化發達に對する雙生兒崇拜の非常な重要性、それから又偉大な宗教的諸體系の有する二元的性格、此二つの事實は兩者の相關々係に關する我々の研究を正當化すのである。ハリス博士の研究は常に科學的愼重を期することを特徴としてゐるが、其愼重な彼が雙生兒崇拜の中に世界文明及宗教生成の最深の根帶を見ざるを得ぬといふ意見に傾いてゐる。此意見を支持する爲に彼は無數の證據を提出して、叙上の關係の存在に疑惑を懷くことの殆んど不可能なことを示してゐるのである。しかし我々としては、かゝる證明可能な事實を越

えて、何故雙生兒が此重要性を有するに至つたか、又何故其崇拜が文化の傳達具となるに至つたかを全く思辨的な仕方で問題とせずにはゐられない。此問題に答へるには、我々はハリスが原始人の間で集めた事實の他に、靈魂に對する信仰の發生及其累次的變型の研究を必要とする樣に考へる。卽ち別の言葉でいふと、我々は雙生兒崇拜は二重靈魂の存在を信じた一結果と見て、其反對の別自我を素因とする考へが雙產なる些か特殊な現象に基いて生じたとする見方に同じないのである。從つて我々は雙產崇拜の中に別自我を素因とする考への神秘的具象化を見ざるを得ないのである。そして又此別自我を素因とする考へは、一方は可死で他方は不死な二重の靈魂の存在を信ずることから生じたものとするのである。

　我々の此見解を證明する爲には、先づ雙生兒崇拜に關する我々の知識の骨子を纒めて、別自我存在の信念を一時度外視し、二元的靈魂觀に就て我々の知るところとそれを比較しなければならぬ。ハリスは如何してゐるかと見ると、彼は殆んど有ゆる原始民族の間に苛酷な、頗る嚴格な雙生兒禁忌が存してゐるに反し、眞の雙生兒崇拜がヂオキュール兄弟に超人的能力を歸する開化民族に於て始めて出現する事實を出發點とし、此問題の歷史的發展に基き、次の如き結論を下した。卽ち原始的には雙生兒は其母と共に殺されたが、後になつて此慣習は緩和されて雙生兒だけが遺棄され、その次に雙生兒崇拜が起つた、といふのである。しかし問題の此見方には大いに批評の餘地がある。といふのは原始民族と開化民族の有ゆる棒大な比較と同樣、それは原始開化兩種民族間の本質的相違點、文明を考慮に入れてゐないからである。問題は斯う言へはしないか？　卽ち開化民族が原始狀態を脫却し、開化的發展を成就した所以は、正に彼等が雙生兒の優秀な資質を果敢に肯定し、以て其祖先の原始的恐怖を克服し、雙生兒を殺す代りに崇敬し得たからである、と。

　我々は現存原始種族の民俗、最初の開化民族の神話及傳說、並びに個人的不死に對する人類の宗教的信仰などが今日まで保存して來た諸事實を少し比較して見たい。ダルヴィエラ伯爵 Conte Goblet d'Alviella は、ベルギーのクール・サンテチアンヌに於ける發掘に關する報告で、一見甚だ殘酷な雙生兒に對する原始人の禁忌に就て次の如き明晰な意見を述べてゐる。（註三）

　「大部分の未開民族は雙生兒の出產を常に超自然的、少くとも胡亂千萬な事實、一つの呪咀と看做し、其結果產兒、又往々其母をも殺害したが、しかるに稍進步した民族は、それを禁忌することで、卽ち彼等を追放又は隔

離に處し、全住民へそれの傳染するのを避けることで滿足してゐる。しかし未開人は超自然といふことの中に、汚穢と淸淨、禍と福の觀念を簡單に混同する。雙生兒は超人的力の生殖と看做されるが、其事の爲人々は其勢力との和解を願ひ、死後彼等を神禮を以て遇するのである。故に我々の祖先が、雙生兒の或者を其母と共に殺害し、それと同時に彼等を崇敬したことは、毫も不思議とするに當らない。」

カトリックの傳道師セスー T.-H. Cessou は西部アフリカ（リベリア）から、雙生兒の占術的才能に對する信仰に關し次の如き報告を送つてゐる。

「雙生兒は實際、夢で種々學ぶ無類の特權を有してゐる。其譯は多分彼等が彼世で此世のまゝの生活をしてゐる死者の靈に夢の中で會ふからだと思はれる。」

玆に我々は雙產崇拜と靈魂に對する信仰との間に存在する關係を明白に見る。此信仰は原始人の間では動物擬祖（トーテム）の形態を取つてゐる。此種族、卽ちゴラー族の第一の禁忌（タブー）は、或一動物（人若くは寧ろ死者の靈を象徵するブッシュゴート）を食べてはならぬことである。だから時折子供にブッシュゴートといふ名がつけられるが、セスーは猶其說明を續けていふ。

「では何故雙生兒はブッシュゴートを食べてはならぬか？ 老人の語るところによれば、ずつと昔に雙生兒が夢で死者の靈がブッシュゴートになるのを見たといふのが其理由らしい。彼等は獸でない人間のブッシュゴートを見たのである。或特徵ある逃方をするブッシュゴートがゐたら、それは獸ではなく死者の靈である。だから夢で見て或ブッシュゴートが人間なのを知つてゐる雙生兒は、それを食べてはならぬのだ。もし食べたらそれは惡事であるのみならず、其上それによつて彼等は其特權を喪失し、能力を失墜するに至るであらう。」[註六]

靈魂に對する信仰に於て旣に動物擬祖を脫したかなり開化した民族の間でも、雙生兒崇拜に太古の動物崇拜の痕跡が混じてゐるものがある。例へばギリシャでは雙生の天神（ヂオスキユール）の子、カストルとポルクスは妹のヘレネと同樣、鵠とレダの子として崇敬され、ローマ古代史では雌狼（一說では啄木鳥）が棄兒された雙生兒ロムルスとレムスの養母として尊崇された。アスヴィン[註七] の例で明らかな樣に、文明史は雙生兒崇拜は或種の動物（馬か牛）の家畜化、並びにそれを人間の役に立たせることゝ配合してゐることを示してゐる。アスヴィンは古代インドの宗教に大きな役割を演じてゐるが、アスヴィンとは雙生の騎士の意である。最初期のアスヴィン信仰によると、彼等が馬又は寧ろ馬身の神を祖先とするといふことは疑

はしいが、彼等が馬の調教者、殊に軛を發明した御者として崇敬されたことは疑ひない。雙生兒崇拜が同一の軛に繋がれた一對の馬の思想と關聯してゐることは却々人に信ぜられない。しかし鋤を牽く一對の馬、相並んで波濤と戰ふ一對の舟子の場合に我々が此同一思想に接する以上、此一對思想の意義に關する疑惑は當然消滅すべきである。(註六) 此問題に關する意見はどうあれ、神聖雙生兒が崇敬されたのは、彼等が牛を軛につけ耕作に從はせた半神人(ヒーロー)といふばかりでなく、軛と鋤の發明者、卽ち文化の進歩に貢獻した工匠であつた爲であることは確實である。ハリスの發見によれば、雙生兒は舟を初めて造つたものと看做されて居り、ローマの宗教では航海者の守護神とまで崇められてゐたのである。

然るに原始民族の間で見られるのはこれら開化的諸機能の僅か一つに過ぎず、しかも雙生兒禁忌と結びついてゐる最も原始的なもの、卽ち國邑の創立でしかない。ロムルスとレムス、アンフィオンとツェトス、カインとアベルの物語は、彼等の一人は殺され、一人が國邑を建てたことを敎へる。我々は勿論此殺人の中に、國邑乃至家の建設の際の贖罪的犧牲の思想を見ざるを得ぬ。だが家或は邑の耐久を長期、或ひは永遠に保證する爲に生人の犧牲を要求する此慣習は、一體何ういふ意味を持つてゐるのだらうか？此問題の解答が、靈魂に對する信仰の中にあるのを示す前、我々は先づ第一に原始民族の間に於ける此國邑創立の端緒を研究せねばならぬ。其痕跡は今日でも未だアフリカの或地方で見られ、其處には各種の聖域があるが、禁忌された雙生兒と其母は死を避けたければ或期間又は永遠に其處へ移住し、其處で生活せざるを得ないのだ。此母の負ふ禁忌にも拘らず、彼女と結婚同棲を望む男は、同じく此雙生兒邑の住人となるより仕方がない。島や森で隔絶した土地にある此邑は、斯様に「禁忌(タブー)された者」の住地に漸次なるのである。

ハリスによると此雙生兒邑はヨーロッパにさへ或時期には澤山あつたといふが、其歴史を我々は細く說いては居られない。我々が唯だ記憶して置きたいことは、そしてそれは最も重要なことだが、原始民族と開化民族の間に存する國邑創立の仕方の相違である。此區別は我々の說明にとつて甚だ重要性を有してゐる。卽ち原始民族の間では、安全地域(聖域)は雙生兒と一緒に追放される母の手で創立されるに反し、幾分文化の進んだ民族に在つては、國邑は成長した雙生兒の一人の手で、母の沒後、又其一人の殺害後創立されるといふことである。我々は人類の全精神領域に亙つて、文化一般及個人の發達は母性支配からの累次的解放によつて行はれるといふ事

實を確認し得る。(註七) 此傾向（個人をして個人的創造により自己を表現せしめずには置かぬ傾向）は、又動物擬祖から別自我の妖怪に至る多樣な形式の靈魂に對する信仰を發生させたのである。(註八) 事實に於て個人の中に宿り乍ら、しかも不死の生命乃至永遠の再生を含んでゐる靈魂に對する最初の信仰は、母性及肉體的出生とは獨立な一原則、私が「自己創造原則」と呼ぶ一原則を作り出したのである。

靈魂の思想は死者に對する恐怖によつて人類の中に極く早く生じたが、それは斯樣に個人に於ける最初の二元論を生んだのである。靈魂の原始的思想は、自我と出來るだけよく似た別自我の形態（影、反射）の下に生じた。靈魂觀の發達に關する新研究は、靈魂の表象は最初から二元的なること、卽ちそれが個人の生存中活躍する生靈と死後初めて生じ彼世で生活を續ける死靈とに區別されてゐたことを示してゐる。これらの新研究(註九)は、又ギリシャのプシケ Psyche に於て最初に結晶した我々の靈魂一元觀は、洗練された知識の所產であること、それに反し宗教の反映する民衆的信仰は、今尙昔の如く可死靈魂と不死靈魂とを區別することを明らにした。しかし別自我が不死の生存を保存する守護天使から個人的可死の警報者に變じ、更に進んで死の近接の豫告者に變つて行つた間に、雙產現象は具體的樣式を以て靈魂二元觀を證明し、更に其事實により個人的不死を立證したかの觀がある。雙生兒は可視の別自我を伴つた一人の人間の具體化と見られたのである。かゝる人間は當然超自然力を驅使し得るに違ひなく、そして多分それを有害な仕方で用ひるものと見られた。先づ第一に雙生兒は其肉體的別自我の爲に不死であると見られたが、原始民族の信仰では此事は他人の生死を支配する力を彼等が有する意味となる。此信仰の特色は雙生兒の一人の神聖な不死的性質に關するギリシャ、ローマの傳說の中に見出されるのみならず、此主題の最古の文藝的表現、エジプトのお伽噺「兄弟物語」の中にも見出される。此お伽噺の二人の兄弟は實際は雙生兒ではないが、しかし魔術の絆によつて生死に對し互ひに不可分に繋つてゐる。その爲に一人が苦みを感ずると、も一人も、其同じ苦みを感ずるのである。此に類似した傳說は、南アメリカの原始民族の間にも弘く流布してゐる。これに就ては後で又論ずる。(註十)

雙產と農業との間に或關係の存在することが主張し得るならば、それは雙生兒なる思想の含む奇蹟的な多產性の爲ではなく、寧ろ靈魂獨立の思想によるとする方が正しい。雙生兒或は少くとも雙生兒の一人は、死の靈（獸又は神）から純然たる靈的方法を以つて自生したもので

あるから、從つて彼等は其魅力を用ふれば、植物を土から成長させることが出來ると見られた。雙生兒が野牛を馴らし、其性的力を農業に用ひ得る所以は、彼等自身が靈魂の不死の欲望によつて自生し、其故に性的生殖から獨立したトーテム動物であるからである。彼等が舟を發明し、航海者の守護神となる所以は、彼等が其二重人格によつて不死を保證されてゐることが、溺死をも含む一切の死から彼等を保護するからである。（戰鬪の場合、スパルタでは雙生兒が軍隊の前衞となつて進擊し、ローマでは建國の雙生兒の表徴たる二名の執政官が戰士の最前列に立つて進軍した）。雙生兒は其出生直後直ちに水の試練を經るが、それといふのは彼等は大抵小籠に入れられ（モーゼ）、ロムルスとレムスの様に水上に棄兒されたからである。[註十二]前に述べた様に彼等が都邑の建設者であり創立者である所以は、けだし都邑は母胎の無上の象徴だから、嘗つて自己創造によつて獨立を表明した様にそれによつて兩親からの獨立を表明したのであると見られる。

最初は雙生兒が半神的行爲（ヒロイツク）を果し得るのは二人が力を協せた場合に限られた様に見えるが、其所以は彼等の不死が保證されてゐるのは、正に彼等が雙產なるが故である。此事は南アメリカの傳說に、極めて明瞭に表れて居り、雙生兒兄弟間の衝突は彼等が其使命を果した時初めて起る。（エーレンライヒ著『神話』五十頁）。雙生兒は一人は可死で一人は不死だとする廣く流布してゐる思想は、人間は唯だ自己の不死を信ずるが故にのみ文化を進捗させる半神的行爲を行ふと說く靈魂に對する信仰の表明に過ぎない。雙生兒は自然の常態に反する獨立自生と思はれたことが、又彼等が自然の中に其前に無かつたもの、我々が文化と呼ぶものを創造し得た理由と見られたのである。雙生兒を獨立自生とする思想は、私の見るところでは異性雙生兒は母胎內で出生前既に性交を遂げ、それによつて、族外婚の禁忌に違反したとなす、弘く流布してゐる信仰の中に明瞭に表れてゐる様に思はれる。[註十三] しかし雙生兒の一人を犧牲とするといふことは、唯だ異性雙生兒の場合に對してのみ定められたことではない。それは最も一般的な慣習であつて、二人共殺してしまふ殘酷な慣習の緩和と看做される。あらゆる雙生兒神話の中に、使命成就の後其一人が他の一人の手で殺されるといふ典型的考への見出される事實は、又別の說明を要求する。此事は既に別自我の歷史で、邪魔な第二の自我を殺して除く試みを我々が見た以上自明のことである。

しかし人類の近い時代に屬する別自我の傳說では、第

二の自我の殺害は常に必ず半神人其人の死をも招くに反し、原始時代に在つては反對に雙生兒の一人の殺害は他の一人の殘存の條件であつた。とにかく原始民族はさう確信して、さうしなければ二人共必ず死ぬといふ說明で雙生兒の一人の殺害を正當化しのである。此犧牲思想は開化民族の間でも、尚多くの「棄兒」神話の中に見出され、半神人を其未來の行動の爲に救ふ名目で同時に生れた他の子供に雙生兒を象徵させ、それを棄兒することが行はれてゐる。半神人出誕神話硏究の爲に私の蒐集した資料は、次の疑問を我々に起させずには置かぬ。卽ち半神人の半神人たる一切の資質は、實際雙生と關聯してゐるのだらうか、それとも其資質の或ものは超人的力を具へた或無比の個人の屬性と見られはしないかといふ疑問が生ぜざるを得ないのである。ハリスは雙生兒崇拜の中に半神人崇拜と宗教との基礎を見やうとしてゐる人であるが、其ハリスでさへ雙生兒の屬性とされる資質の多くが雙生ならぬ半神人の中にも見られること、そして又それと反對にキリストや聖トマスの例の如く、或半神人、又は救世主は、とかく雙生兒と看做される傾向のあることを認めざるを餘儀なくされてゐる。

　もし雙生兒の問題と稍高い靈魂に對する信仰の問題との關係を考察するならば、我々は原始民族を自然の奴隸から半神人に、文明の創始者に變じたのは、一方を不死とする二元的靈魂の考へであつて、決して雙產の事實ではないことを認めざるを得ない。別自我の問題に關する硏究によつて我々の到達した此結論は、ハンス・シェルプの近著『世界文藝のお伽噺に表れた强健兒童の主想・其宗教史的意義及發展』（一九三〇年）により確乎たる支持に接した。此人は雙生兒崇拜を全く知らないのであるが、ハリスが雙生兒の屬性とする一聯の特質を神話とお伽噺の半神人に見出してゐる。例へば未だ出產せぬ存在の魔術的能力、殊に墓の彼方まで慈愛又は兇惡の力を及ぼし得る死の力に對する恐怖や、不死性と關聯ある不死身性（アキレス、ジーグフリードなど）を素因とする考へ（註十三）や、彼等半神人が自己の名を自分でつけたといふ樣なことである。

　しかし依然次の如き主張がなされるかも知れぬ。卽ち其起源に於ては半神人の思想は雙產と結付いてゐたのだが、友誼又は血緣の思想が次第に雙產の地位に代つたのである、と。此抗辨に對しては半神人思想の如き極めて普遍的な思想が、其起源を雙產の如き極めて稀有な事實に負ふ筈のあり得べからざることを指摘し得る。既に雙產現象に先立つて出產現象其ものが原始民族を驚異させてゐたに違ひない。けだし今日の我々にとつてさへ、出

産は、猶自然の神秘的奇蹟に屬してゐるものだからである。雙産を異常視する事實は、常態出産が既に考慮の對象となつてゐたと想定せしむるに足るのである。雙生兒の出生に關して原始民族のみならず、中世の民衆の與へた說明はそれを充分に證明してゐる。雙生兒崇拜を知る前に書かれた私の著作(註十四)に、私は民衆の間に見られる此種の傳說を集錄して置いたが、それは多胎出産は貞潔の破毀を俟たずには起らないことをすべて證明する傾向がある。此信念が中世の民衆文藝の中に餘り多く見られる爲に、或博識な學者の如きは、此話の夥しいのは民衆の過ちを防ぐ爲であつたといふ見解を發表した程である。民衆は女性が一人の父によつて、一度に二人又はそれ以上の子供を姙娠し得ることを信じなかつたゞけでなく、獸の樣に一度に幾腹も子供を生む女は、獸と關係を結んだに違ひないとまで出張したのである。(註十五)

雙産の場合其父を二重と推定するのは中世の迷信の特徵ではなく、それは民衆の意識中に古い昔から保持されて來たものに他ならぬ。けだし其信念は原始民族の間のみならず、古代開化民族の間にも見出されるからである。唯だ此父の二重性の形態が、民族の宗教的或ひは社會的思想に從つて變化してゐるに過ぎぬ。だから、例へばキリスト敎で極惡罪と看做された獸との親子關係は、動物擬祖的(トーテミック)宗敎の民族の間では或特權を享有したばかりか、古代民族の間では半神人たるべき豫定徵表とさへ看做されたのである。同一信念に關して斯く解釋の異る理由は、次の事實の中に覓めねばならぬ。卽ち原始民族の社會組織は父の法律的權利の上にではなく、母の自然的權利の上に成立してゐたが、其故は父が未だ子供の創造者の役割を演ぜず、母は祖先の靈によつて受胎すると信じられてゐたからである。此祖先の靈は大抵或定つた種類の動物(擬祖動物(トーテム))に托身してゐると思はれてゐたが、植物又は鑛物の形をとる場合もあつた。此靈魂に對するトーテム的信仰は、不死の欲望から生じたものであり、此欲望によつて人間は殊に自分を喚ぶ動物の中に、自己の再生可能の象徵を見たのである。

故に雙生兒は出生に當つて自分の不死の別自我、卽ち靈魂を伴つて來た人間かの如く感ぜられ、又其事實の爲に兩親との性的親子關係を含む他の一切の不死の觀念から獨立した人間となる譯である。我々の見方によると雙生兒崇拜は半神人崇拜を發生せしめたものではなく、唯だそれに具體的な表現を與へたに過ぎないが、とにかく半神人の原型を成すものは以上述べたことである。神話に現れる雙生兒は自分等の力だけを賴り、他人の力を藉りない。彼等の生命は極めて密接に繫り合ひ、一人の無

殘な死は他の一人の最期となる。此事はエジプトの兄弟神話では頗る明白で、兄弟の一方は他の一人が危機に面し死に瀕してゐることを知り（或徵表により）、彼を救ふことが自分を救ふ所以であることを知つて直ち其救助に馳向ふのである。南アメリカの神話にも同じ事があり、無敵（卽ち不死）の雙生兒は死の徵表に導かれて戰鬪に參じ、其戰鬪で彼等を世界の主人とする賞品を得るのである。（註十六）

雙生兒といふものは斯樣に全世界を敵として戰ふものらしい。母の仇を討つ時でも（ツェトスとアンフィオン）、父を尋ねる時でも（ボボル・ヴー）、又妹を守る時でも（ヂオスキュール）、彼等は實際にはもう家族といふものがなく一本立であるが、しかし彼等の力は又そのことから成つてゐる。だが神話の言葉では、此力は一方を不死の半神人とする二重の自我として表現される。そして此二重の自我は、私が今分析した半神人神話の示す樣に其出生を否定するか、又は或雙生兒物語の語る樣に少くとも其出生を異常なものにするのである。從つて雙生でない半神人が其父を否定し、母を禁忌して、自ら出生し再生し得る自己自身の創造者となつても、我々はそれと類似の特色を自生した原人の創造を語る神話に見出すから少しも驚かされぬ。茲では此問題の研究はこれで打切り、（註十七）唯だイヴがアダムの肋骨の一本で作られたといふ舊約聖書の物語に言及するに止める。此物語は人類の原始に遡る一神話、卽ち母胎內で旣に性交を遂げ、それによつて自分等が自生したのみならず人類をも創造し得たとする神聖雙生兒神話の一異說であると私は考へるのである。

茲に單なる假說として與へた此說明は、ギリシャのナルシス神話の一異說に見られる互ひに戀愛し合ふ雙生兒に再び我々を導くのである。此雙生兒問題に我々が與へた說明に從へば、それは自己創造をなし得る兩性具有の具體的表現と關聯してゐることが分る。（註十八）我々は此思想が世界の進化の原始時代の生物學的事實によつて生じたものか否かを研究する氣はない。我々に興味のあるのは、男性が彼等を創造者たらしめ得る唯一の者である不死の原則を母性から僭奪しなければならなくなつた事實の心理學的說明だけである。此僭奪は性的方面では、相共に世界と人類を創造する異性雙生兒によつて果され、精神的方面では、一切の性的生殖から獨立した自我自體の可死面と不死面を表現する同性雙生兒によつて果されるのである。斯くて雙生兒の主想(モチーフ)は別自我（雙生兒は其具體的實例に過ぎない）の問題と同じく、結局に於ては我々を自我の不死の永遠的欲望に導くのである。人

間は最初素朴にも死のない永遠の生命を信じたが、しかし實在するのは集團的不死だけであることに氣がつかざるを得なかつた。此集團的不死に對して自分を守る爲に人間は自分の別自我を作り出したが、だが其處でも結局人間は最初自分の個人的不死の象徵として否定した死を認めざるを得なかつたのである。（完）

註一　ギリシャ喜劇の不滅のメネクメは、幾世紀を通じて相變らず喜劇的場景の主題を供し續け、トリスタン・ベルナールの「ブライトンの雙生兒」に迄及んでゐる。シェクスピーアも幾度か此主題を共喜劇に用ひたが、それは「間違ひの喜劇」及「御意のまゝ」に於て最も顯著である。此二作はいづれもバンデルロの小說「雙生兒」に題材を得たのである。

二重人格の主題はロシア史上の僞デミトリに關する夥多の作品で、悲劇の形式で劇化された。最近エルンスト・ペンツオルトが、ポルチュガルの二重人格「セバスチアン」を『ポルチュガルの鬪爭』と題する興味ある一書に描寫してゐる。

註二　『キリスト教神話の雙生兒』（一九〇三年）『神聖雙生兒の崇拜』（一九〇六年）『ボーナジズ』（一九一三年）『ローマは雙生兒邑であつたか』（一九二七年）。

註三　クール・サン・テチアンヌの古器、原史遺物』（一九〇八年）同一問題に關するネツェラインのドイツ語の研究『雙生兒出產の迷信的意義』は『宗教科學文集』第五卷に收錄されてゐる。

註四　Anthropos Nov., 1911, Pp. 137 et suiv.

註五　ミリアントイス『アリアン人種のデオスキュール、アスヴィン』（一八七八年）

註六　セム系言語には自然の中一對の形式で表明されるものをすべて女性と看做す傾向がある。ヴィルヘルム・シュルツは其發見を基礎として此一對の意義を睾丸（雙生の兄弟として）にも亦移さうとしたが、しかし此思想は文化の別の期に屬するものである（カストルと獸の海狸（カストル）との關係）

註七　拙著『出產外傷』（一九二八年）參照。

註八　拙著『靈魂信念と心理學』（一九三〇年）參照。

註九　オットオ『死靈信仰の原型、亡靈』（一九二三年）。ピッケル『ホメロスに表はれた靈魂信仰』（一九二五年）。ボーメ『ホメロス史詩中の靈魂と自我』（一九二九年）。此最後の著作はアルプマンの『原始的靈魂假託』を基礎としてゐる。（譯者註。東洋の魂魄はやはり一方が可死の靈、他方が不死の靈を意味してゐる。）

註十　エーレンライヒ『一般神話學及其人種學的基礎』（一九一〇年）。同じく『南米原住民の神話と傳說』（一九〇五年）參照。ベッカアは其稍混亂した著作『古代口碑解釋の鍵としての雙生兒傳說』（一九一八年）の中で、雙生兒の此普遍的意義を明かにしてゐる。

註十一　此問題は拙著『半神人出誕神話』（一九二二年）で研究してある。

註十二　此見方は近親婚の禁忌一般の意義を明かにし得る。私は別の機會にこれを集團的恐怖を以て說明した。卽ち近親婚によつて可死人が自己自體を再生し得るに至り、集團的イデオロギイの生む不死とは獨立な個人的不死を發生せしめるといふ集團的恐怖を以て說明したのである。(『靈魂信念と心理學』參照。)又『エディポス・コンプレクス』(執筆中)を比較せよ。

註十三　ベルトールド『ギリシャ人の傳說と迷信に表れた不死身性』(一九一一年)

註十四　『ローエングリン傳說・其主想形態及解釋への一寄與』(一九一一年)百六十四頁、百七十二頁。

註十五　わが國でもかゝる出產者を「畜生腹」と呼んでゐる――譯者。

註十六　シュルツ『ポポル・ヴー序說』(一九一三年)

註十七　私は此問題を他の著作で部分的に研究して置いた。

註十八　私の見るところでは、此れと同一の見解をアンドレ・ジードが『ナルシス研究・象徵の理論』で展開してゐる。ヴィンツイスが最近中央オーストラリアの住民及其他の土民の間で確認した兩性具有の重大なる意義は、私の見るところではこれら原始民族の間で自足的兩性具有の形を取る不死觀念の演ずる大きな役割を證明するに過ぎぬと考へる。

×

後記――上に譯出したのはオットー・ランク Otto Rank の「ドン・ファン、別自我の一研究 Don Juan, Une étude sur le Double」の一節で、ロートマン Dr. S. Lautman の佛譯によつた。

私が淺學不文を省ず敢て此至難な研究の飜譯に手を出したのは、これが日本神代史の研究の一助となると考へたからである。日本書紀、古事記、古語拾遺によつて拜察するに、日本の國土を創成あそばされし伊弉諾、伊弉冉兩神は耦生(異性雙生)に在します。「天先づ成りて地後定まる」(書紀)時、「天地初發之時」(古事記)、「天地剖判之初」(拾遺)化爲りませる三柱の神は、「乾道獨り化る、所以、此の純男を成せり」と自生の男神で在したが、次で「乾坤の道相參りて成る、所以、此の男女を成す」と伊弉諾、伊弉冉兩神に至る其後に化爲りませる八柱(四代)の神は、皆耦生であらせられる。此天神七代は皆不死であらせられるが、伊弉諾、伊弉冉兩神に至つて「始めて美斗能麻具波比」を爲したまひて國土をお生みあそばされ、其結果火神御出產の折「伊弉冉尊軻遇突智の爲めに焦かれて終りましぬ。」

書紀本文及拾遺によれば、兩神御創成の國土山川草木の主たる天照大神、月讀尊、素戔嗚尊は母神御在世の折の御出生と見奉るが、書紀一書及古事記により案

するに、伊弉諾尊は伊弉冉尊を追つて黄泉に至りたまひ、共地にて御疎隔の事あり、斷然御絕緣あつて御歸來の後、筑紫の日向の橘小戸之阿波岐原にて祓除ひの御事の時、兩眼を洗ひたまひしより生りませるが天照大神と月讀尊、鼻を洗ひたまひしより生りませるが素戔嗚尊とある。此の三神は、夫々國土を分つて治す神に在すから、母神崩御後に至つて初めて國土御創成は完成したと見奉ることが出來るのである。

日本の建國神話に於ては、雙產は神業に倣ふものと見られてゐる。書紀に曰く「次に億岐洲と佐渡洲とを雙に生む、世人或は雙生むことあるは此に象りてなり。」

天照大神と素戔嗚尊との御軋轢は誰人も知ることながら、大神は又月讀尊とも御不和に在らせられた。書紀一書に曰く「時に天照大神怒りますこと甚だしうして曰く、汝は是れ惡しき神なり、相見じとのたまひて、乃ち月夜見尊と一日一夜隔て離れて住みたまふ。」葦原中國の御創建の次第は、これら御軋轢、御不和後に至つて初めて御着手あそばれたのである。

私は日本の建國神話に表れた諸事實をランクの假說によつて律しやうといふのではない。たゞそれは以て他山の石となすに足るといふのである。（譯者）

本誌前號正誤表

頁	行	誤	正
目次一	四	塚越	塚崎
一	六	塚越	平塚
二	一二	アランテイ	アランデイ
本文二〇	四	光秀	信長
三三	一〇	初變	初戀
六二	九	意氣	意義
七九	四	ただ。か	たか
八五下	三	空氣浴湯	空氣浴場
八九下	一八	面目上	面上
九〇下	一五	劣等惑	劣等感
九八上	六	憤死	情死
一二三中	一三	在の	左の
裏表紙	一二	Vague	Vogue
同	一四	Huliday	Holiday
同	一五	Hoxley	Huxley

教育者の爲の精神分析概論（アナ・フロイド）

宮田齊譯

處が、教育の方は必ず兒童から何物かを要求いたします。但し、玆で皆樣に、過去現在を通じての種々雜多な敎育の目的を一々御説明申上げてゐると、私の御話の本筋から離れて了ふことになりませう。一體、教育者と言へば、兒童が所屬する成人環境を指すのでありますが、此の教育者は決つて、兒童を自分達の氣に入る者に仕立てゝ行かうとします。從つて夫々の時代、社會的地位、社會階級、所屬の黨派等々に應じていろ〳〵異つた者に仕立てやうと致すものであります。併し乍ら、此等の互に異つた目的の凡てに共通する點があります。それは、凡ゆる教育が、兒童を成人に育て上げる事、而も彼の環境を形成してゐる成人の世界と殆んど差異の無い成人に育て上げる事を以て目的としてゐるといふ點であります。從つて教育の出發點も亦明かになるわけで、孰れの場合でも教育は、子供が成人と異つてゐる點、卽ち兒童性といふものを對象として始められるのであります。さうとすれば、初期の教育とは何ぞやといふ問に對する答は、『教育は兒童の本性、大人の言葉で言へば、つまり子供の惡戲と鬪爭するものである。』といふ事になります。

子供の惡戲、等といふ事はどんな教師でも教育者でも各々自分の觀點から眺めて、もう十分知つて居るのだから、といふ理由で此の場合いろ〳〵の例をお話する事を差し控へてはなりますまい。

公の教育の場所で兒童が演ずる惡戲は、僅かに事の眞相の微かな投影に過ぎません。子供の惡戲の特性は、乳兒の頃から約五歲位迄の間、終始その世話をして來た人々にしか解つて居りません。試にさういふ人々に尋ねると大抵は次のやうに話して呉れます。

『子供は手に負へない程向ふ見ずで、自分本位なものだ。自分の意志を遂行し、自分の望みを滿たす事にばか

り專心掛つてゐて、其の爲めに他の者が迷惑を受けやうと受けまいと一向問題にしない。子供は汚くて、感じが惡くつて、どんなに氣味の惡いものでも平氣で手摑みにするばかりでなく、口迄持つて行つたりするし、自分の身體に就いては恥しいといふ事を知らず、他人が隱さうとするものには好奇心を持ち、意地汚しで、撮食ひが大好きだ。それから、自分より弱い生物に對しては殘忍で、無暗に物品を壞したがる。身體にもいろ〱惡戲をやる。指をしやぶつたり、爪を咬んだり、鼻をほじつたり、性器を弄んだりする。しかも、かうした惡戲を非常に熱心に、夢中になつてやつたり、一旦或る願望を持つと其の滿足に向つて熱狂的に突進し、聊かの猶豫をも我慢する事が出來ない。』世の親達が語る斯様な體驗談のうちには何時も定つて二つの不滿の聲が極立つて聞えます。その一つは、一向に前の見透しがつかないこと、つまり、何か一つの癖をやつと矯正したかと思ふとまた別なのが代つて出て來るといふこと。今一つは、一體何故かういふ現象が起つて來るのか、勿論兩親が手本を示すわけではなく、他所の惡い子供達とは一緒にならないやうに十分注意してゐるにも不拘、こんな有樣なのはどうした譯か、といふ不可解な疑問であります。

處で、皆様方は、只今述べましたやうな兒童の特性の例證は要するに、客觀的な敍述といふよりも寧ろ不平を並べた公訴狀に過ぎないと仰言るかも知れません。併し抑々成人といふものは兒童の特性に對して未だ嘗つて客觀的態度をとつた事はないのであります。過去幾世紀かを通じて教育は、兒童の觀察に對して宛も、生徒の間に何か問題が起ると初めから憤激して之に臨む嚴格な教師のやうな態度で臨んで居たのであります。此の様な教師は、調査研究がすつかり濟む迄は注意して有罪の判決を差控へて置くことを學ばない限り、事の實相を闡明することも、事件の眞相を識ることも決して出來るものではありません。一體親達が數へ擧げる子供の『惡戲』なるものは、實は、いろ〱の特質(Eigentümlichkeiten)の混亂、錯維した堆積に過ぎないのですが、人はたゞ之に對して困つた〱と言ふばかりで施す術を知らない有樣です。

處で、親達ばかりでなく學問的研究も、今日迄は兒童に對して、餘り客觀的な態度をとつて來ませんでした。在來の科學は、種々の假說を基として拵らへ上げた兒童の本質の構造圖に當嵌まらないやうに思へる徵候は之を凡て抹殺否定して了ふことを以つて知識を得る手段として居たのであります。茲に精神分析は始めて兒童の本質を判斷する際に從前から用ひられて居た種々の決論や

ら、假說やら、偏見やらから自己を解放したのであります。そして其の代りに、今迄不可解とされてゐた諸々の惡戲が驚く程整然とした一つの有機的全體に整頓され、故意にする異常行爲と考へられて居たものが、宛も人體の發育に於て見るものと同じ樣な發展段階の必然的繼起である事が解つて參りました。斯くして、世の親達の二つの大きな惱みに對する解答が與へられたのであります。

外部からの影響に依ることなく、一つの惡戲が他の惡戲に急速に解消して行く現象も、此等の惡戲が決して憂ふべき偶發的な兒童の異常行爲ではなくて、運命的に制約された發展連鎖の正常な一部分であると考へられる時、最早や不可解な謎ではなくなつたのであります。

種々の現象の斯樣な體系の發見を導き出した端緒は、兒童が惡戲の對象とする身體の部位が任意に選ばれたのではなくて、先天的に決定されてゐる一定の系列に從ふものであるといふ觀察でありました。

皆樣は、前回の講演に於きまして、子供の母親に對する愛着が、母親に依つて與へられる最初の榮養と養護から起つて來ると申上げた事を御記憶なさつて居ると思ひますが、子供の惡戲も之と同じ動機に依つて、而も同じ場所から始まつて居ります。生後數週間の兒童の生活に於ては食物の攝取が最も重要な役割を演ずるので、此の時期には身體中で口と其の周圍の部分が一番大切な場所となるのであります。母親の乳首を吸つて、乳を體内に流し込むことは快感を與へますから、幼兒は、滿腹して居る時でも、此の快感を繼續しまた反覆し度いといふ願望を起します。そして間もなく、食餌の攝取とは關係なく、乳を與へて呉れる母親とすらも無關係に自分の指を吸つて此の感じを再現する事が出來るやうになるのであります。これを私共は子供が「おしやぶりをしてゐる」(das Kind "lutscht")と申しますが、其の時の幼兒の顏には、乳首を吸つてゐる時と同じやうな滿足げな表情が表はれるので、誰しもこの操作の動機が「よい氣持になる爲めだ」といふことを明瞭に了解するのであります。斯うして、最初は食物を攝る際の副産物に過ぎなかつた此のしやぶる快感は子供の大好きな、大人の嫌ふ、獨立した操作、つまり、惡戲になつて了ひます。幼兒が口に依つて快感を求める操作は單に食餌を攝ることゝ指をしやぶることゝに限られてゐるわけではありません。幼兒は自分の周圍にある凡てのものを口を通じて識らうとする樣な樣子を見せます。手の屆く限りの品物を咬む、舐る、味ふと云ふ具合で、大人達は、其の爲めに子供を清潔にして置くことが困難になり、また其の結果子供の健

康にも危險を及ぼす惧れがあるので洵に面白くないことゝ考へるわけであります。斯樣に、快感を獲る源として好んで唇を用ゐる現象は、大體生後一ヶ年の間持續します。

前に敍べました兒童に對するいろ〳〵の「苦情」を想ひ起して頂けば、その中に、丁度此の生後一ヶ年の頃から始まつて、相當の年齡迄續く惡戯、つまり撮食ひと大食とが數へられて居ることに御氣付きになる事でせう。

扨て、次に、口唇に代つて目立つ役割を演ずるやうになる身體の部位は體驗に依つて外的に決定されます。今――即ち、生後滿一ヶ年――迄は兒童を取り圍む成人の世界は彼に對して非常に寛大な態度をとり、專ら其の養護にのみ精力を集中して只或る程度給食や睡眠時間の統制と規律への習慣をつける事に意を用ひて來たわけです。が、此の頃になると兒童の生活のうちには漸次一つの新たな要素が加つてまいります。其の要素といふのは、清潔にさせる躾けであります。母親や乳母は骨を折つて子供の寢小便や其の他の身體を不潔にする傾向を矯めやうと致します。

併し、子供は中々此等の事を抑制するわけに行かないので、生後第二ヶ年は、先づ全然と申してもよい程、時には隨分な努力を拂つて此の方面の教育に捧げられる事になるのであります。

處で皆樣は、子供が清潔にすることを學ぶ迄に非常に長い年月が掛かるからと言つて、これを子供の惡戯といふ風に考へるのは當らないとお思ひになるでせう。子供の括約筋は何しろ未だ充分な發育を遂げて居ないのだから、膀胱に溜つてゐる尿を我慢して居たり、排便をキチン〳〵としたりするわけには行かないのであります。成る程清潔教育の初期には此の説明で間に合ふかも知れませんが、後になつて來ると私共は自づから是と異つた印象を受けるのであります。

よく〳〵觀察して見ると、どうも子供は身體を清潔にして置くことが出來ない譯ではない。唯自分の思ふまゝに、氣の向いた時に排便したがり、自分の身體の產物である便を斯樣に思ひのまゝにする權利を奪はれ度くないのではなからうかと考へられます。子供は自分の便に對して著しい興味を示します。便をいぢつたり、弄んだりするばかりではなく、うつかりして居ると口の中に入れたりさへしようとします。此の場合の子供の表情や其の熱心さを見れば斯樣な振舞をする動機が容易に判斷されます。つまり子供は此の爲めに快感を覺えるのです。處で、此の快感は、最早や膀胱や肛門の括約筋の强弱とは何の係はりもありません。乳兒は、乳を吞む際に副產物

として口の周圍に快感を覺えたやうに、今度は排便作用の副產物として、肛門に快感を覺えるのであります。そこで此の時期には肛門の周圍の帶域が身體中で一番重要な部分となつて參ります。榮養とは無關係に、指を舐めて、自分で口の快感を產み出さうと力めたやうに、子供は便を耐え此部分を弄んだりして同じ結果を得ようとするのであります。そして此の操作が敎育に依つて極力壓迫されると砂遊びや水いぢり、汚物いぢり、等に依つて、又後になると繪具を塗つたりすることに依つて、嘗ては非常に貴重なものであつた。此の快感のせめてもの名殘を留めようとするのであります。(未完)

リイラの初舞踏會（K・マンスフィールド作）

岩倉具榮譯

いざ舞踏會が始まつたとなると、リイラは口を利くことが出來なかつたことであらう。多分、彼女の最初の本當の相手は辻馬車であつた。彼女がシェリダンの娘たちやその兄弟と一緒に辻馬車に乘り合つたのだが、それは問題でなかつた。彼女は辻馬車の小さい一隅に凭れて自分の席を取つた。すると彼女が手を置いた肱木は見知らぬ若い男の上衣の袖の様に感じられた。かくて一行は、燈柱と家と垣根と樹木とを迎へ見送り、ワルツをおどる様にころがつて行つた。

「リイラさんは本當に之迄舞踏會に行つたことないの？　まあ、何て不思議なんでせう――」とシェリダンの娘達が聲高に云つた。

「私達のお隣りは、一番近くつて十五哩もあるのよ。」とリイラは、扇を開いたり閉ぢたりしながら、おだやかに、やさしく云つた。

おゝ、本當に、他の人達のやうに無頓着にしてゐるといふことは何てむづかしいんだらう！　彼女は微笑し過ぎない様にした。あまり氣をつかはない様にした。併し凡てのことが一つ一つあまりにも珍しくて刺戟的であつた……。メッグの月下香、ジョーズの長い琥珀の環、雪の中から咲き出でた花の様に、白い毛皮の上につき出てゐるロオラの小さい黒い頭等々々。リイラには何時迄も忘れられないものであるやうに思はれた。彼女の從兄のローリーがその新し

い手袋の包んである薄葉の紙を引はがしその束を投出すのを見てさへ、彼女はハッと思つた。彼女はそれ等の束を記念品として、思ひ出として取つておき度かつた。ローリーは前かゞみになつて、その手をロオラの膝においた。

「忘れないやうにするんだよ、ねえ」彼は云つた。「何時もの通り三番と九番だよ、分つた？」

あゝ、男の兄弟があるつてことは何て素晴らしいんだらう！　リイラは亢奮して、若しそんな余裕があつたら、若しもそれが不可能でなかつたら、自分が獨り兒で、男兄弟から「分つた？」なんて云つて貰つたことのないのを泣かずにはゐられなかつたらうと感じた。その時メッグがジョーズに、「今晩程あなたの髮がうまく結へたのを、わたし見たことないわ」と云つたが、女同胞としてこんな云ひ方をするものはなからうと思つた。

併し、勿論、そんな時間の余裕はなかつた。彼等はもう練習場に着いてゐた。練習場の前にも後ろにも辻馬車が一杯であつた。道の何れかの側は動く扇形の光りで輝いてゐた。そして舗道の上には樂しげな二人連れ達が空中を浮んで來る樣に思はれた。小さい繻子の靴は番ひの小鳥の樣に互ひに追ひかけ合つてゐた。

「私につかまつてゐらつしやいよ、リイラさん、はぐれてよ」とロオラは云つた。

「さア、女の連中はみんな僕についておいで。あそこまで驅けて行かう。」ローリーは云つた。

リイラはロオラの桃色の天鵞絨の外套に二本の指を當てた。そして彼女等はまるで持上げられるやうにして、大きな金色の提燈の前をよぎり、廊下をずつと運ばれるやうに走り、「婦人室」と記された小さい部屋に押し込まれた。こゝには人々が大勢込み合つてゐて、彼等の身につけた物を脫ぐ場所もなかつた。その騷ぎは耳を聾するばかりであつた。何れかの側の二つの椅子には外套や肩掛が堆高く積上げられてゐた。白いエプロンをつけた二人の年取った女が、腕一杯にそれ等の脫ぎ捨てたものを抱へては何度も何度もあちへ行つたりこちへ行つたりして運んでゐた。そしてみんなは室のずつと端の方にある小さな化粧卓と鏡の所へ行かうとして押し合ひへし合ひしてゐた。

大きなふるへる瓦斯の光りが婦人室を照してゐた。もう待て暫しはなかつた。もうダンスは始まつてゐた。戸が再び開かれて練習室から突然音が聞えた時、それは殆ど天井に迄跳ね上つた。

浅黒い娘達、綺麗な娘達は、髪をなで、リボンを結び直し、胸衣の前のあたりにハンカチーフを押し込み、大理石の様に白い手袋を、きつちりさせてゐた。そして、彼等はみんな笑つてゐたので、リイラにはみんなが良い人に思はれた。

「見えなくなつたヘアピンがないでせうか」とある聲が叫んだ。「をかしなことだわね！　見えなくなつたヘアピンなんか見えつこないわ。」

「私の背中にお白粉つけて、あそこに愛人（いいひと）がゐるのよ」と他の誰かゞ叫んだ。

「でも私、針と木綿糸がなくちや困るの。私、ひだのある縁飾を隨分長く破いちやつたの、」と三番目の者が泣き聲を出した。

その時、「プログラムを巡々にお配り下さい。巡々にお渡し下さい！」といふ聲がして、プログラム入りの麥わらバスケットは腕から腕へとヒョイ／＼と渡された。桃色の鉛筆と綿毛の總のついた、愛らしくて小さい、桃色と銀色のプログラム。バスケットからその一つを取つた時、リイラの指はふるへた。「私も一つ貰つていゝのね？」と彼女は誰かに訊かうと思つたが、その間に次の文字が目に這入つた。「ワルツ3、二人、カヌーの中の二人づれ、二人づれ。ポルカ4、羽を飛ばして。」その時、メッグは叫んだ。「用意はいゝ？　リイラ」と。そして彼等は廊下の人ごみをつき抜けて練習室の大きな二重戸の方へ押し進んで行つた。

ダンスは未だ始まつてゐなかつたが、樂隊は調音を止めた。すると人々の騒ぎが大變大きかつたので、演奏が始まつても到底聞えさうにもない様に思はれた。メッグにしつかりと寄り添つてゐるリイラは、メッグの肩越しに眺めてゐたが、天井に張られた小さなふるへてゐる色とりどりの旗さへもが何かお喋舌りをしてゐる様に感じられた。彼女は全く恥づかしいのを忘れて了つてゐた。着物を着る途中で彼女は、一方の靴はまだ穿かず一方の靴は既にはき、ベッドに腰をかけて、從兄弟に電話を掛けてどうしても行けないからと斷つて貰ふ様にお母さんに頼んだのであつたが、そんなことも忘れてしまつてゐた。そして月明の中でふくろふの雛が「モア・ポーク（豚肉をもつと）」と鳴いてゐ

るのに耳を傾けつゝ、彼等の淋しい田舍家のベランダに坐つてゐ度いといふ望みをはげしく抱いたのであつたが、そんな望みも今は既に忘れられて、一人で堪えるには六づかしい程の甘いはげしい喜びに變つてゐた。彼女は扇をしつかり握つて、光り輝く金色の床、つつじ、提燈、赤いカーペットが敷かれて鍍金した椅子と樂隊とが一角にある一方の舞臺を見つめ乍ら、「何て美しいんだらう。只もう何て美しいんだらう！」と息を殺して考へるのであつた。

　少女達はみんな戸の一方の側に集つて立ち、男達は他の側にそして黒い着物を着た附添の婦人は、何だか痴呆的に薄笑ひをしながら、みがき立てた床の上を舞臺の方へ注意深く小股に歩いて行つた。

「この人は田舍の私の小さい從妹のリイラです。どうぞよろしくね。相手を見付けて上げて下さいね。この人は私が面倒見てあげて居るのです。」メッグはさう云つて、次から次へと少女の間に觸れ歩いた。

見知らぬいろいろの顏がリイラを見てほゝゑんだ——やさしく、ほのかに。初めての人のいろいろの聲が答へた。

「えゝ、モチ、承知だわ。」けれどもリイラは、少女達が本氣で彼女を見てゐないやうに感じた。彼女等は男達の方を見てゐた。どうして男達は始めないのだらう。彼等は何を待つてゐるのだらう。あそこに彼等は立ち、手袋をきつちりさせ、光澤のある髮を撫でつけ、お互同志でニコニコしてゐた。すると、全く突然、まるで自分達のすべきことを今丁度決心したのかの樣に、男達は前土間をすべつて來た。少女達の間に樂しさうなさゝやきが聞えた。丈の高い、綺麗な男がメッグの所にとんで來て、彼女のプログラムを掴み、何かつぶやいた、メッグは彼をリイラの方に引渡した。「一緒におどつて下さいますか。」彼はヒョイと頭を下げてにつこりした。そこへ眼鏡をかけた淺黑い男が來た。それから從兄のローリが友達と來た。又、ロオラはネクタイの曲つた、少しそばかすのある男と一緒に來た。次には全くの老人——肥つて、頭に大きな禿のある——が彼女のプログラムを取つてつぶやいた、「見せて下さい、見せて下さい！」そして彼は名前を書き込んで黒く見えた彼のプログラムと彼女のプログラムとを長い間比べてゐた。比べて見て老人は大變困つてゐる樣子なので、リイラは恥づかしくなつた。「あら、困りますわ」彼女は熱心に云つた。けれども肥つた男は答へないで何かを書いて、もう一度彼女をチラと見た。「この明るい小さな顏は見覺えがあ

るやうだが。」彼はやさしく云つた。「前から知つてゐた顏だらうかな、」その瞬間樂隊が演奏し始めたので、肥つた男は行つてしまつた。光り輝く床の上を流れる如く襲ひ來り、人の群を一組づつに分ち、彼等を散らし、速かに逆りつゝ湧き出た大きな音樂の波に、彼は運び去られた。

リイラは寄宿學校でダンスを習つたのであつた。毎土曜日の午後、寄宿生達は小さな波形鐵板のミッション・ホールに急いで行つた。そのホールでは(ロンドンの)エクルズ孃が、その「選ばれた」組を受持つてゐた。けれどもその埃臭いホール——壁にキャラコの織物が掛けてあり、褐色の天鵝絨の縁なし帽を冠つた哀れなビクビクした小さい女が兎の樣な耳を持つて冷いピアノをゴツ〳〵たゝき、エクルズ孃はその長い白い杖で少女達の足をつゝついた——とこゝのホールとの違ひが余りにひどかつたので、リイラは、若しも相手が來ないでたゞ驚くべき音樂に聽き入り、他の人々が金色の床の上をすべるのを見るだけであつたならば、彼女は少くとも死にさうになるか、氣絶するか、腕をあげて、星が見える暗い窓から逃げ出したでもあらう。

「御一緒に、如何です——」誰かゞお辭儀をし、につこりして、腕を彼女に差出した。彼女は結局、死んではゐられなかつた。その男の手が彼女の腰を押へ、そして彼女は池に投げ込まれる花の樣に流れて行つた。

「本當にいゝ床ぢやありませんか」との聲が、彼女の耳近くかすかに、ゆつくりと聞こゑた。

「大變滑らかで、素的で御座いますね。」リイラは云つた。

「何と仰言いました?」かすかな聲が面喰つたやうに云つた。リイラはもう一度同じことを云つた。すると一寸間をおいてその聲は答へた、「いや全くです!」と、彼女の身體は、また振り廻はされた。

彼は相手の身體をあやつることが如何にもうまかつた。少女達と踊るのと男の人と踊るのとではその點が大きな違ひであると、リイラは心でうなづいた。少女達はお互ひにぶつかつて、お互ひの足を踏んだ。紳士役となつた少女はいつものやうに相手を掴むのである。

つゝじはもう別々の花ではなくなつた。それは吹き流れる桃色や白の旗の樣であつた。

「先週ベルさんの所へ行きましたか」あの聲は再び聞えた。それは疲れてる樣に聞こえた。

リイラは彼に踊を止めませうかと訊くべきかどうか、迷つた。

「いゝえ、今日は私の初舞踏ですの」と彼女は云つた。

彼女の相手は一寸喘ぐやうな笑ひをした。「まさか、そんな――」と彼は受けつけなかつた。

「いゝえ、本當に初めてのダンスなんですのよ。」リイラは一所懸命に云つた。誰かと話すことの出來るのが氣を樂にするのであつた。「私は今の今まで、ずつと田舍に住んでゐたんで御座いますの……」

その時音樂は止まつた。で、彼等二人は壁の前の二脚の椅子に坐りに行つた。リイラは桃色の繻子の脚をつゝましく隱して、扇を使つた。その間に彼女は他の幾組もの男女があちこちの扉口を拔けて通つたり見えなくなつたりするのを幸福さうに眺めてゐた。

「お樂しみね、リイラさん？」とジョーズが、金髮の頭でうなづきながら訊いた。

ロオラは行き過ぎてほんの一寸ばかりめくばせした。それを見てリイラは自分が本當に大きくなつたのかどうか、一瞬疑はしく思はれた。確かに彼女の相手は餘り多く口を利かなかつた。彼は咳をして、ハンカチーフを押込み、チヨツキを引張り下し、袖から糸くづを取り去つた。併しそれは何でもないことであつた。忽ちにして樂隊が始まつた。そして彼女の二番目の相手が天井からとび出して來る樣に思はれた。

「床は惡くない。」今度の聲もさう云つた。誰でもいつも床のことから云ひ始めるのだらうか。すると又、「木曜日にニーヴさんの所へ行きましたか。」と訊く。で、もう一度リイラは說明をする。彼女の相手達がそんなこと以上興味を持たなかつたのは一寸奇妙であつた。何故なら彼女にとつては初めての舞踏會でぞく〳〵するやうな思ひがしてゐたからだ。彼女は凡ゆる事の門出にゐるに過ぎなかつた。今迄夜とはどんなものか一寸も知らなかつた樣に思はれた。今迄夜は暗くて、靜かで、極めて屢々美しかつた――さう、屢々美しかつた――併し何だか悲しかつた。嚴肅だつた。併し今や決してもうそんな風ではないやうに思はれた。――夜はまぶしい程明るく開いたのであつた。

「氷を食べませんか」と相手が云つた。さうして彼等は扉口を出て、廊下を通り、食堂に行つた。彼女の頬は燃えて、恐ろしく咽喉が渇いてゐた。小さなガラス皿の上で氷は如何にもおいしさうに見えてゐた。そしてひえたスプーンも、何にも冷たさうであつた！　氷もやはり……。そして彼等がホールに歸つて來た時、肥つた男が扉の所で彼女を待つてゐた。彼が如何にも年を取つてゐるのを見て、リイラは二度喫驚した。彼はお父さん連やお母さん連と共に舞臺の上にゐるべきであつた。そしてリイラの相手達と比べて見ると、彼は如何にもみすぼらしく見えた。彼のチョッキは皺くちやになつてゐて、手袋のボタンが取れ、上衣はまるでフランス・チョークで汚れてゐる樣に見えた。

「いらつしやい、お孃さん」と、その肥つた男が云つた。彼は厚かましく彼女を捕へた。そして二人は大變おだやかに歩き去り、ダンスをしてゐるといふよりも歩いてゐる樣であつた。併し彼は床については一言も云はなかつた。

「初めてのダンスぢやないんですか」彼はさゝやいた。

「どうして御分りになりましたの？」

「それはね」と肥つた男は云つた。「年の功ですよ！」彼は下手な一組の側を行きすぎて彼女をあやつつた時にかすかにぜい〳〵云つた。「何しろ今迄卅年間もかういふことをやつて來たのですからね。」

「卅年ですつて？」とリイラは叫んだ。では、彼女の生れる十二年前からだ！

「殆ど考へられないことですか、さうでせう？」と肥つた男は陰氣に云つた。リイラは彼の禿げた頭を見て、本當に彼が氣の毒になつた。

「今だにずつとしてゐらつしやるのは素的だと思ひますわ。」彼女は親しげに云つた。

「親切なお孃さん。」肥つた男は云つた。そして彼はもう少し近くに彼女を引寄せてウォルツの一節を唸つた。「勿論」彼は云つた、「何でもかう云つた事をそれ程長く續かせることは出來ませんよ。どうでも出來ませんよ」肥つた男は云つた。「さうなるずつと前に大抵の人は綺麗な黑い天鵞絨かなんかを着込んで、あそこの舞臺の上に坐つて眺めてゐるでせう。そしてこの可愛いゝ腕が肥つた小さい腕に變つて、別の種類の扇で、黑い骨つぽい扇で拍子なんか

取つてゐるでせうよ。」肥つた男はふるへてゐる樣だつた。「そしてあなたはあそこにゐる哀れな年寄り達の樣にニヤニヤしてあなたの隣りの年上の婦人に向ひ、あなたの娘の方を指してあの娘を恐ろしい男がクラブの舞踏會で接吻しようとしたことを話すでせう。そしてあなたの心がづき〳〵痛むんでせう」――肥つた男は彼女をもつと近く締めつけた、如何にも彼が本當にその哀れな老いた心を氣の毒がつてゐる樣に――。「何故なら、誰ももうあなたに接吻しようとはしないからです。そしてあなたはこのみがいた床が歩くのにどんなに不愉快で、如何にも危險だと云ふでせう。えゝ、トゥンクルトー孃さん?」肥つた男はやさしく云つた。

リイラは輕くちよつと笑つたが、笑ひ事とは思はなかつた。それはみんな本當だつたのか――本當であり得たのか。それは、恐ろしい事實の樣に聞えた。この初舞踏會は結局、彼女の最後の舞踏會の初まりに過ぎなかつたのか。その時、音樂は變る樣に思はれた。それは悲しく、悲しく響いた。その音は大きな溜息に高まつた。おゝ、何とす早く樣子が變つたことか！ 何故、幸福は永久に續かなかつたのだらう？ 永久とは、餘りにも長い一瞬間ではなかつたか。

「私、止さうと思ひます。」彼女は息を殺して云つた。肥つた男は彼女を扉の方へ連れて行つた。

「いゝえ」彼女は云つた。「私、外に行かうと云ふのではありません。私は腰掛けようと云ふのではありません。私はこのまゝこゝに立つてゐたいのです。ありがたう御座いました。」彼女は壁に寄りかゝり、足をコトコトいはせ、手袋を引張り、微笑んでみようとした。併し彼女の心の奥深くでは小さな少女が涎掛を頭にかぶつてすゝり泣くのであつた。何故彼は凡てを駄目にしたのだらうか？

「ねえ、お孃さん」肥つた男は云つた。「ほんの冗談を云つたんですよ。本氣にとらないでね、お孃さん。」

「私つたら！」リイラは、小さい黒い頭を振り、下唇を吸ひ乍ら云つた……。

もう一度幾組もの男女がおどり出した。いくつもの扉は開いたり閉つたりした。今や新しい音樂が樂長によつて演奏された。けれどもリイラはもうおどり度くなかつた。彼女は家にゐて、あの雛のふくろふに耳を傾けつゝ坐つてゐ

度かつた。彼女が暗い窓を通して星を見つめた時、それは翼の様な長い光りを持つてゐた……。

併し、すぐにやはらかい、とける様な、恍惚りさせるやうな調べが始まつた。するとちゞれ髪の若い男が彼女の前でお辭儀した。彼女はメッグが見つかる迄、禮儀上、おどらなければならないと思つた。併し一つの瞬間に、一つの廻轉に、彼女の足は滑り、甚だぎごちなく彼女は眞中に歩いて行つた、極めて傲然とリイラは男の袖に手をのせた。併し一つの瞬間に、一つの廻轉に、彼女の足は滑り、滑つた。光線、つゝじ、着物、桂色の顏、天鵞絨の椅子、凡ては一つの美しい飛び翔ける車輪となつた。そしてリイラの次の相手が彼女を例の肥つた男の腕にドンと引渡し、彼が「御免なさい」と云つた時に、リイラは前よりも輝かしく彼にほゝゑみかけた。彼女は再び彼をそれと認めさへもしなかつた。（完）

讀後に——事の始めにあたつて事の終りを愁へ、歡樂未だ極まらざるにいと哀情を覺ゆることの早きはマンスフィールドが病的神經の働きの常とは云へ、我々は既に『蜜月』（岩倉譯『理想の家族』の内）に於いて類似の主題に接したが、こゝでもまたその異なれる表現を見ることゝとなつた。華麗の内に愁傷をたゝへて、作者獨自の文藝美を味はゝしめる。（R）

文藝學と精神分析（ムッシュク）（1）

武田忠哉譯

この約二十年間、文藝學の研究領域の題材に關する論文とスケールの大きい書物が、たえず引きつづいて醫學者の側から發表されてゐる。しかし、現代の文藝學は、この事實に對してあまり多くの注意を拂はない。それにもかかわらず、一方、ジークムント・フロイドによつて創始された精神分析の伸展と結びつきながら、いまやつぎのやうな現状が持ち來らされるにいたつた。すなはち、ペンをもつ醫者の一派が文藝學の資料に對して頑強に一つの要求を主張した結果、すでに今日では多くの出版物によつて、この要求の性質と根據が追究され得るのである。

しかしながら、ここでは、精神分析の主要命題について討議を開始すべき場合ではない。むしろ、この學説が文學史家の研究領域に對して持つ地位を書き改め、もしこれらの二つの觀點が竝立し得るならばそこからいくつかの結論を導き出すこと、われわれはそれだけのテストによつて滿足を感じるのである。

精神分析の文學的・藝術學的關心は直接にそのスターターにまで還元されるのである。例へば、フロイドの初期の論文の一つに、「ヴィルヘルム・イェンゼンの『グラディーヴ』における妄覺と夢」（一九〇七）といふ研究が數へられる。これは、なほ現存する一人の文學者の作品において、夢の生活の見解――（精神分析によつて代表される見解と同一の）――を證明しようとする試みに外ならない。さらに、フロイドは、同じ時期に屬する、より大きいスケールをもつ書物、「機智。それの、無意識的なものに對する關係」（一九〇五）において、美學的・體系的論文の土地へ歩み入るにいたつた。

さらに、彼の「夢の解釋」（初版一九〇〇年）には豐富な文學史的資料が見いだされるが、特にそれは「エディ

ボス」（ソフォクレス）と「ハムレット」の説明においてその頂點へ到達した。その後、この説明は精神分析の構成にとつて決定的な役割を示したのである。

　フロイドの著書の多くの部分から、文學——特に、シェークスピア——に對する一つの深い尊敬が明かに現れ、これらの著書においては最近にいたるまで絶えず新しい文藝學のテーマーが取上げられてゐる。例へば、「不氣味なもの」（一九一九）といふ論文では、E・T・A・ホッフマンの姿が、そして、「『詩と眞實』における小兒時代の一つの思ひ出」（一九一七）といふ評論においては、小兒のゲーテが陶器を投げつけた有名なエピソードが、いづれも最も重要な結果を含む新しい解釋を加へられてゐるのである。*

*フロイドによれば、兄弟は父に對して、すなはち、Urvater の暴威に反抗して立つときにのみタイ・アップするが、本來、彼等は競爭者として不和であり、敵として規定されてゐるのである。小兒ゲーテが陶器を投げつけたのは、弟の出現に對する嫉妬から動機を導かれたものと解釋することが出來る。最初、この見地は必ずしも成立し得なかつたが、多くの精神分析的實驗の結果、やうやくフロイドはこの解釋の確信を持つにいたつたのである。

フロイドの最も著名な學徒たちは、純文學の説明に對して同じやうな一つの要求を示してゐる。

　例へば、アルフレート・アードラー*は、いくつかの文學作品によつて彼自身の認識へ導かれた。彼は、それらの作品における「個人心理學の實際と理論」（一八七〇）といふ彼の論文において、メールヒェン・聖書・シェークスピア・ゲーテに對して最高のシートを規定したのである。文學者の創作——（ここでは現にかやうに呼ばれてゐる）——、それが新しい研究方法によつて理解されるであらう範圍、それらが、果してアードラーの個人心理學が正しいコースにあるかどうかを判定する照尺になるやうに思はれる。さらに、この場合には、ドストイェフスキーに對する觀察がこの教科書の一つの重要な章を形づくつてゐるのである。

*（一八七〇——）ヴィーン。心理學・精神病・個人心理學を專攻。神經醫。

天才的なヴィルヘルム・シュテーケル*は、後に、粗野かつ無内省的であるとしてフロイドから拒否されるにいたつた。彼は一九一二年「文學者の夢」を發表し、その際に、ケラーとヘッベルをかつて例のない夢想者として推奨した。

　この「文學者・神經病者・犯罪者における無意識的衝動力の比較研究」は、結局、皮相的に綴り合されたもの

にすぎなかつた。しかしながら、それの結果は一つの他の論文の題名の下に、同じ彼のペンによつて綜括され、「文學と神經病」(一九〇九)と名づけられた。

彼は、一文學者をその夢によつて測量かつ認識する」ことに對して責任を負ふ。そして、彼の蒐集によるこれらの記錄をただ一見するならば、そこには、明かに何か深く掘り下げる要素の內在が理解されるのである。

このことは私が知つてゐる最も印象的な一つの章においては一層よく適用される。すなはち、「衝動と感動の生活における妨碍」シーリース第五卷「性慾心理的嬰兒・症」(一九二一)に收められた論文「ジャン・ジャック・ルッソー」。一人の露出症患者の分析。」それによつて、この著者は文藝學の領域へファウルしたのであつた。

シュテーケルもやはり精神分析學者が文學の確實な知識を持つことを極度に重要視した。何故なら、多くのトラウマー**は書物から出發し、また多くの書物が精神的發展に對して一つの決定的影響を作用してゐるやうに思はれるからである。

*(一八六八――)精神分析。性慾學。

** 外傷。精神的負傷。ショック。

カール・グスタフ・ユング*。彼は他の一つのパースペクティヴから、文學者に對するかやうな賞讚を聲援してゐる。彼の「心理學的タイプ」(一九二一)においては、集合的無意識的なものを讀み取る彼等の才能が認められるにいたつた。

「彼等はその時代の優秀な人間として、地下に動く不思議な潮流を推測する。そして、それは個人の能力にしたがつて、多かれ少なかれ言語的象徵によつて表現されるのである。

彼等はかやうな眞の豫言者として、無意識において起るもの、おそらく舊約聖書の用語において神の意志であるもの、それによれば將來不可避的に一般現象として生じるであらうところのもの、それらのルポルタージュを與へるのである。」

この書物は、シラーの哲學的文獻――特に、「美的敎育についての手紙」――、シュピッテラー**の處女作「プロメートイスとエピメートイス」(一八八〇)、これらに關する厖大な根本的議論を包含する。さらに、同じユングの「リビードーの變化と象徵」(一九一二)には「ファウスト」の解釋が加へられてゐる。

しかしながら、それ以前の他の場合にも、このシュピッテラーは――「ホーマーの末孫」として――數人の精神分析學者によつて彼等の研究のために豫約されたのであつた。彼の最も個性的な作品「イマーゴー」(小說)

(一九〇六)は、彼等を全く魅惑したに相異ない。かうして、それ以來、この書物の標題は、一つの精神分析學的概念、並びに、一つの雜誌の名にまで高められるにいたつた。すなはち、この雜誌は、一九一二年、精神分析を實際に自然科學と精神科學へ適用し、さらにフロイドの言葉によれば、アカデミーの個々の科から新しい研究才能を誘ひいだす意圖の下に創刊されたのであつた。

*(一八七五——)。精神病と心理學を專攻。神經醫。フロイドの精神分析から離れて、彼自身の分析心理學のコースを開拓し、優れた藝術起原論を持つてゐる。

**(一八四五——一九二五)。詩と短篇小說。ノーベル賞金(一九二〇)。彼の散文詩「プロメートイスとエピメートイス」に關してはつぎの一つの判定が與へられてゐる。

「この、初期に現れた作品は、かなり漠然とした、しかしながら、ゆたかな詩的理念を持つてゐた。それはニーチェの『ツァラトゥストラー』の言葉と近似してゐるが、彼に從屬したものではない。」(クルト・マルテンス)

最後に、フロイド學徒の中では、オットー・ランク*がすでに早くから專門の文藝學者になつた。彼は一種の偏愛をもつて——しかしながら、排他的ではなしに——、ドイツ文學史の資料を研究する。彼の今までに最も大きい書物、「文學と傳說に現れた近親姦のモティーフ。文學創作に關する心理學概說」は、一九一二年に初版され、われわれの觀察に對して最も多くの收穫を約束するものである。

彼の序文はつぎのやうに說き起されてゐる。

「われわれはこの書物において、一つの狹く限られた資料によつてつぎのやうな試みを行ひたいと思ふ。それは、全く新しい根柢の上に、斬新な觀點から、藝術品の最も內的な構造、文學的創作の條件と過程、それらを一瞥することに外ならない。」

この書物においては、世界文學の作品と傳記から選びいだされたおどろくべく多面的な資料によつて、「エディポス葛藤は無數の文學的ファンタジーの證言の根柢に橫つてゐる」といふ證明が試みられてゐる。——このエディポス葛藤は、母と結婚し得るために、父を殺害するといふ、息子の欲求を意味するのである——。ここでは他のテーマーと並んで、ゲーテ・シラー・グリルパルツァー・バイロン・運命劇が詳しく論じられてゐる。

これらの書物は、精神分析による文學考察にとつて標準的な存在になつた。最初それらが發行されてから、多數の、同じやうな方向をもつ論文が現れるにいたつた。

シェークスピアとシラーは、明かにこの新しい研究方

法のための優秀な資料である。さらに、「綠のハインリッヒ」の夢に關するオットカー・フィッシャー**の論文には、早くもまたゴットフリート・ケラーに對してこの側面から一つの關心が表明され、その後、この關心はなほしばしば主張されなければならなかつた。

同じやうに、つぎの一聯の人々が、詳細な「性格病理學」***、あるひは、より多く附隨的なノートとメモにおいて、かやうな、精神分析學的な取扱を受けたのである。

トルストーイ、ドストイェフスキー、クライスト、ヘッベル、ゴットヘルフ、オットー・ルートヴィッヒ、コンラート・フェルディナント・マイヤー、リッヒアルト・ヴーグナー、フロベール、アナトール・フランス、ストリンベリ、イプセン、ハムズン、ヴェルハーレン、ミルトン、グリメルスハウゼン、ハルトマン・フォン・アウエ、ヴルター・フォン・デァ・フォーゲルヴァイデ。

* 現存の、フロイドの弟子。聰明な精神分析學者。傳說の研究に詳しく、しばしばフロイドに資料を提供した。本誌本號所載『雙生兒崇拜』の原著者。

** （一八八三——）チェック大學。ドイツ文學史敎授。

*** Pathographie「醫師パウル・モェービウス（一八五三——一九〇七）によつて生みいだされた術語。一般に病的な症候が、その患者の性格と世界觀に對してどのやうな意味をもつかを考究する醫學の一部門。」（マイヤー）「一人の人間の生長と行爲を、それらが病的な影響に基づくかぎりにおいて吟味すること。」（フリッツ・ギーセ「心理學辭典」）

附記——

Walter Muschg: Psychoanalyse und Literaturwissenschaft. (Junker und Duennhaupt Verlag Berlin 193?)

これは、ツューリッヒ大學講師ヴルター・ムッシュクの、同大學における就任講演である。「畏敬の念をもつてエーミール・エルマティンガー敎授に捧ぐ」といふデディケーションの言葉が示されてゐる。

これは恐らくすぐれた文藝學者によつて書かれた、最初の精神分析學に關する勞作である。同じテーマーを取扱つたものとして、エーヴルト・フォールハルト、アードルフ・フォン・グロールマンの研究があるが、取材の把握の正確さにおいて、ムッシュクに及ばないやうに思はれる。

ここでは、この文藝學者は、必要なかぎりの、精神分析學の知識を根柢に用意しつつ、この學に對する一つの文藝學的照明を試み、絕えず深い理解の下に二つの學が比較されてゐるのである。

その他、ムッシュクによって、「文學的性格」(アルブレヒト・シェッファー「ヘーリアント」の研究)が發表され、さらに、エルマティンガー編纂「文藝學の哲學」には、彼の「文學史における作家の肖像」が採錄されてゐる。

譯稿は、かつて外山卯三郎氏編輯のクォータリー特輯「文藝學研究」に發表された拙譯を、改めてテクストに卽して吟味し推敲されたものである。一般に、精神分析學の術語的表現については、可及的に、東京精神分析學研究所による制定にミートする心組みである。

著述・論文・學者の年代は、ほとんどすべて譯者によって挿入されたものである。もしこれによって、多かれ少なかれ精神分析學の史的なパノラーマーが明かにされる契機になれば幸甚といはねばならない。

この試みについては、東大獨逸文學科講師エルヴィーン・ヤーン先生、ならびに、本誌の大槻憲二氏に負ふところきはめて多い。ここに記して、深く兩氏の御厚意を謝する次第である。

(譯　者)

岩倉譯『理想の家族』正誤表

頁	行	誤	正
目次一	六	ルフト鑛泉場	空氣浴場
本文三	一	同	同
一七	三	あつだ。	あつた。
五一	八	二入	二人
八三	一一	早く早く急いで	停めて
一六六	二	ないことを	ないこさは
一九九	一四	開かんと	聞かんと
二一〇	九	そんなとは	そんな事は
二一八	六	若しい	苦しい
同	六	兄	弟
同	一一	同	同
二一九	三	同	同
同	四	同	同
二二二	五	同	同
二三八	一	ルフト鑛泉場	空氣浴場

精神分析醫家の立場

—その惱みと强味—

木村廉吉

從來の醫學は、解剖學、組織學などの形態學 Morpho-logie 及び、生理學、藥理學、醫化學等、理化學 Plyriko-Chemie 及び兩者の何れかに屬する研究方法により、心理學的要素はわづかに生理學に於て實驗心理學的の研究が幾分見られる以外、ほとんど用ひられるところが無かつた。そして精神病學もその醫學の一分科として同樣の建て前によつて研究され、そのまゝ他の科目に追隨して來たかの觀がある。

もとより精神分析學以前に心理學的の研究方法が全然無かつたわけではないが、兎も角この學問は從來とかなり異色ある立場をハツキリ呈示したが爲に、冷靜に考へれば從來の肉體的機械的の醫學の研究方法と兩立しないわけではなくたゞ精神々經病學を獨自の立場から究めんとの企てにすぎぬにもかゝはらず、從來の醫學に倚存し切つて概觀する力を失つた眼からは冷視された事は又やむを得なかつた次第である。そこで研究の上からも他の方面とはほとんど步調を揃へてゆく事が出來ず、綜合醫學の異分子として扱はれ、又實際の醫業としても未だその公然の存立を主張要求し難い樣な狀態になつて、そこに此の學に依るものが常に心を痛め又緊張してゆかねばならぬ所以がある。もとより精神分析學が受けた冷遇の原因としては、創始者のフロイドがユダヤ人であると云ふ樣な外聞的な偶然事情も手傳つてゐないわけではないが、何と云つても物的科學に對立する心的科學である事が前者に賴るものに或る嫌惡と脅威とを感ぜしめる事であり、中には理解し得ぬものを自分の心からはね除け樣と云ふ樣な動機も全然見逃すわけにはゆかぬ。

しかし又一方その惱みの裏がすなはち强味であつて、

從來ヒステリーその他の機能性神經症と稱せられたものが、たゞ單に顯微鏡や試驗管で證明し得ぬ微細な神經系統の變化によつて起るとのみ推定され、それ以上の原因は遺傳或は生來の體質によると片つけられてゐたものに對して、精神分析學は合理的な說明や解釋を下し得る樣になり從つて治療の上に一つの飛躍を示し、又ノイローゼ以外の躁欝症、偏執病、精神乖離症等の研究にも多くの寄與をなしたのみならず、又他の器質的精神病に於ても亦その心理的症候は精神分析學の知識を俟たねば充分闡明し難い事は心身相關の點から考へて、當然の事であり、その病氣の處置の上にも精神分析學の効用は甚だ多いわけである。

又文化が複雜高等化するに從つて起る種々の社會問題に對して、神經病は從來の醫學の仲介を經ずに直接に心理學的に究明しなければならぬ場合多く、かやうな方面でも教育や豫防等の精神衛生の上に精神分析學が應用さるべき廣い分野がある事は旣によく知られてゐる。

更に病氣そのものと直接的の關係は無くとも、病者の取扱や親近者との接衝の上に於て精神分析學的の訓練によつてその心情の機微を察して善處すべき場合多く、この事は精神病醫のみならず又他の分科の專門醫にも大切な事であつて、古來名醫と稱せられてゐる人は言はず語らずに精神分析同樣の術を用ひてゐるわけであらうが、更に深く又組織的に精神分析理論を體得してゐれば一層自信を持つて診療の途を進む事が出來るわけである。

かくて從來の醫學がすべて形なり色なり音なり、感覺的に實驗し證明し得る方式により、抽象的要素を何か不確かなものとして排除して知らず知らず精神作用に對してまでも餘りに機械的な考へに陷つたのに對して、精神分析學は新鮮の氣を吹込むべき意義を持つてゐるが、たゞ餘りにその理論に囚はれて奇矯に流れたり從來の常識や實際を無視して脫線する事は、單にその學問に對す反感を挑發するばかりでなく、又自身誤りに陷る危險がある事を忘れてはならぬ。

（昭和十二年一月）

故榊保三郎先生の追憶

諸岡　存

故九州帝國大學教授榊保三郎先生は、世間では、スタイナッハの若返り法で、一時知らぬ人は無い程に迄騷がれた、有名な精神病學の泰斗であり、わが國に精神分析輸入の先驅者であり、編輯者の求めに應じて、いさゝか故人の思ひ出を語つて見る。

それは歐州大戰直後、醫學も一般に大革命を起して、其麼方面に新しい問題を投げかけた時の事である。當時先生は、九州大學に於て活動の眞最中であつた。當時の社會の戰捷氣分がやがて、世間の景氣をあふつて、更に當時の最尖端を走つた若返り法に對して、物珍らしげな觀察と、最も誇大なる宣傳を敢てしたのである。

併し此事は唯獨り榊教授一個人のみに對しての現象でなくして、謂はゞ九州大學の全體に於て、此れに似た現象が幾らも起つたのである。殊に當時世間から最も花形教授と目された稻田、三宅、住田の諸教授の如きも大した人氣で、道の遠近、海の內外を問はず、患者が押し寄せて來たものである。九大はまさに其當時が黃金時代であつたと思ふ。

これは一つには福岡といふ土地が炭抗地であつて、其頃戰後の景氣が最隆盛であつた事と、他方、此地は、川上音次郎や、桃中軒雲右エ門等いふ所謂大衆藝術家の出生地で、土地共者が博多仁輪加式の空騷ぎを好む處であつたからでもある。戰後の景氣に乘つて、大して入院の必要もない病人迄が、ワンサ／＼と大學病院に押寄せて入院するといふ有樣で、入院は金持の誇りの如く心得てゐたものらしい。

抑々博多は、何といつても、輕薄な土地で、芝居じみた所があるから、學問の價値等判る筈がないが、唯最初の學長大森博士が、自然的の喜劇役者的タイプで、非常に町の人望を得たのである。町民は大森博士を神の如く

に崇拜した。其の遺德で三宅敎授等も當時容易でなかつた開腹術の材料も數多得られるし、內臟外科は日本一とか世界一とかいふ評判で患者は西から東から雲集したものである。大森博士の直弟子たる住田敎授の如きも、其の手術數が當時日本一を示してゐる位である。氏は極端とも思へる程の實際家で、勤勉努力で押し通し、忌憚なく其の所信をやつてのけるので、これに對する反對論者が多數あつたにはあつたが、その技術と宣傳力とは、整形外科の部門を非常に擴張した。とは言へ、それがやがて九大の彼の大騷擾事件を惹き起す起因ともなつたのである。

其頃、稻田敎授の如き、ワイルス病で名聲を中外に馳せ、弟子達は次から次と學位を得てまさに博士洪水の基を造つた。何しろ當時新しい大學で、努力と實力で東京や京都に對抗しやうといふ立てまへであつた。其の努力は報いられて、一時は恐ろしい發展を見た。而しこの俄かの發展がやがて又、世間のヤキモチをそゝつて、大反動を起す原因ともなつたのである。

第一、福岡には他の諸官廳がある。その重要椅子に納まつて權勢をかざしてゐる役人がゐる。併し如何なる地位の地方役人と雖も、其の地位や官位は却々大學敎授に及ばない。そして彼等大學敎授のみが、市民にもてはやされる事は、他の官廳の役人達には如何にも不快であり、壓迫の感を受けしめた。同じ官吏であり乍ら、大學敎授丈けが儲けるとは不都合であるといふのが、抑々の彼等非難のはじめである。或新聞が一寸書いた事が導火線となつた。群衆心理位恐ろしいものはない。一寸の非難の矛先が向いて來ると、大衆は其の是非善惡も判らずに、附和雷同的に、これを罵詈讒謗する。そして些細な事迄數へあげで辛辣に敎授の身邊に迫つて行つた。

警察の探索等も頗る大がかりで、朝鮮から滿洲迄かけて、それ等敎授の診療をうけた患者の身元を調べるといふやうな、實に滑稽極まる罪人搜しの仕掛であつた。そしてそれはやがて、大疑獄となり、數回に亙る大學の怪火となり、怪文書が飛ぶといふ工合で、風評は風評を產み、猜疑は猜疑を深めて、何れを眞とも決しがたき、實に收拾に困難なる事態に迄立ち到つた。市民大會がある。敎授宅には警我の巡査が立つといふ工合で不安此上もない。此騷風に福岡市は勿論、滿洲かけての大掛りな騷擾事件であつたに拘らず、歸する所は、何等の得る處もなく、多數の犧牲者を出し、多勢の人々に多大の迷惑をかけた計りで終局を遂げた。

榊先生は、實にその犧牲者の一人であつた。今から考へると、これ位馬鹿々々しい事件はない。群衆心理の齎

す最悪現象の好適例である。

榊教授は人も知る如く、故加藤弘之先生の愛婿である。加藤弘之先生は、今日流行つて居る告別式の開始者で、極端な進化論者、唯物論者である。死後靈魂等は全然承知しないといつたやうな、當時としては餘程、新進的の碩學であつた。其の立場をそつくり榊教授が請け繼がれた。つまり加藤先生の思想の繼承者が榊先生であつたのである。

加藤先生が、榊教授を如何に愛されたかは、筆者が熟知するところである。自分は學生時代から個人的に色々な事で先生に御世話になつたし、教室に這入つて十數年間、ひたすら、先生の膝下で働いて來た。加藤先生の在世中は、そのお蔭で、榊教授の主張も教授會等でも通らぬ事はない程であつた。

先生の歸朝當時、九州大學には勿論未だ精神病教室は無く、内科の一部を借用した憐れなものであつた。歸朝早々、先生は、大いに其の專屬病院の必要を主張された。曰く『代用病院の患者では、眞の學用患者としての能力を發揮する事が出來ない。かつ官廳の干渉を受けては、入退院も自由にならず、治療や研究も充分出來ない。是非この際、自分獨自の附屬病棟を必要とする。』といふのであつた。

當時豫算も不自由がちな大學であつたに拘らず、時の文部次官岡田良平氏の斡旋によつて、遂に教室直屬の精神病院が出來た。勿論そのかげに加藤先生の力の働いてゐた事は言を俟たない。これは實に日本最初の大學附屬精神病院であつて、精神病學界に於ける大切な功績の一つである。

當時東京大學では未だ巣鴨の府立病院を代用としてゐたし、京都大學でも、九州に出來た暫くあとに出來たものである。榊先生は謂はゞ、大の「新しがり屋」であつた。これが最初の新しい事業の一つである。精神分析術の輸入もその新しがりの一つといつてもよい。（續く）

（**編輯者附記**）卷頭の榊博士小照を參照ありたし、如何にも才子らしい美男である。氏は興味と才分の極めて多方面な人で、寫眞背景をなす繪畫は同氏筆になる油繪で母堂の肖像畫である。またヴアイオリンにも得意であつたと云ふ。著書には『性慾研究と精神分析學』、『變り者（通俗精神病的性格論及其養生）』などがある。

芭蕉の戀愛と「白」憧憬

倉橋久雄

芭蕉については既に本誌上でも種々究明されてゐる所であるが、なほいささか私見を述べて芭蕉研究の一端としたい。

一、如何なる對象に纏綿したか

芭蕉の母コムプレクスは如何なる場所で、如何なる情景の下に、どんな風にいたぶられたであらうか？　そしてその特質は何であつたか。材をなるべく女人關係に限つて——と云ふと語弊があるかも知れぬが——私なりに整理しつゝ探つて見ようと思ふ。

（一）江の縱横一里ばかり俤松島にかよひて又異なり、松島は笑ふが如く象潟はうらむが如し、寂しさに悲しみをくはえて地勢魂をなやますに似たり。（『奥の細道』）

（二）麓に大手の跡など人の教ふるにまかせて涙を落し、またかたはらの古寺に一家の石碑を殘す中にも二人の嫁がしるし先哀也、されどもかひがひしき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ（『奥の細道』）

（一）「象瀉や雨に西施がねぶの花」　これはこの時の句であるが、象瀉の風景を西施が寢てゐるやうだと感じてそれをねぶの花にかけてゐる。西施は雨にぬれたねぶの花でもあり、同じく雨にけむる象瀉の風景でもあるのだ。西施とは御存知の、越のため呉の國を滅すべく獻じられたといふ支那の美女の事である。母なる國土の名に於て、惡父のため敵將に身をゆだねたその時その場合の西施を、象瀉にねぶの花に同一化してこれをうらむが如しと受取つてゐる。殊に寢てゐると云ふ意味を相手の意に從つてゐると云ふ風にとるとするならば、松島を笑ふが如しと容易にデジャボウを起してゐるのに比してコムプレクス的で面白いと思ふ。

（二）飯坂の庄司、佐藤繼信、忠信の跡をたづね、彼等の死後嫁女たちが能く舅姑に仕へて貞烈の名を殘した事によせて、芭蕉は彼女等の裏にある寂しさを想つてゐるやうだ。

（三）　月さびて明智が妻の咄せむ

前書に「伊勢の國又玄が宅へとゞめられ侍る比その妻男の心にひとしくもの毎にまめやかに見へければ旅の心をやすくし侍りぬ、彼日向守の妻が髪を切つて席をまうけられし心ばせ今更申出でて」とある。

（四）行衞しらぬ旅路のうさあまり覺束なう悲しく侍れば見えかくれにも御跡をしたひ侍ん衣の上の御情に大悲のめくみをたれて結縁せさせ給へと泪を落す、不便の事には侍れとも我々は所々にとゝまる方おほし只人の行にまかせて行へし神明の加護かならす恙なかるへしと云捨て出つゝ哀さしはらくやまさりけらし

一つ家に遊女もねたり萩と月

（『奥の細道』）

（三）明智の妻の傳説については、筆者淺學にして不詳。芭蕉は「義仲の寢覺の山の月悲し」と義仲と同一化し、死後粟津の義仲寺に葬られたる所を見ると或ひは明智にもとも思はれるが……これは判然しない。

（四）結びの「哀れさしばらくやまざりけらし」とこの句との距離が、例へば月と萩の如くあり過ぎて、反つて芭蕉の正體が噓が明かになつてゐるやに思はれる。遊女と一つ家に寢て物珍らしいと云つた意が句外にあるやうだ。『正語抄』に「傾城の美しき、僞りがちなるより、賤の女のわりなき契には、越した事がない」と云つたとあるが（萩原羅月氏「芭蕉の住む自然」『文學』三ノ八）、芭蕉は遊女に興味をもつにはあまりにナルチスティッシュであり過ぎたのでもあらうか？

（五）見どころのあれや野分の後の菊

（六）山中や菊は手折らじ湯の匂ひ

眞蹟に「北海の磯つたひして加州やまなかの涌湯に浴す里人の曰このところは扶桑三の名湯の其一なりとまたことに浴する事しば〳〵なれば皮肉うるほひ筋骨に通りて心神ゆるく偏に顔色をとゞむるこゝちす、彼桃原も舟をうしなひ慈童が菊の技折もしらず」と前書あり。

（五）野分の後の菊（蹂躙された後の女？）に見どころありとした芭蕉の心情に興趣がある。

（六）「溫泉は羊水に相當し、その溫味は無意識の底に陷されてゐる胎内生活の快適を再經驗せしむるものでなければならない」とは大槻氏が「デジャキウの藝術」（『精神分析雜稿』）で言はれてゐる所であるが、扶桑三の

名湯の其一とも云はれるほどの温泉に浴したら成程菊は手打らずとも濟むことであらう。殊に野分の後の菊に見どころを見出したりするよりは安全だ。……菊は女人の象徴である事は『炭俵集』に於ける芭蕉の附句にもうかがはれる。「御頭へ菊もらはるゝめいわくさ」(野坡)この菊をすぐ娘と解して「娘を堅う人にあはせぬ」(芭蕉)と附句してゐる。然しあながち處女の象徴のみでなかつた事は「白菊の目にたてゝ見る塵もなし」によつてもわかる。(このこと後述。)

(七) 芭蕉が主家を亡命した事についてはまづ四つの說がある。(野田別天樓氏「芭蕉と女性」『俳句研究』三ノ一)

(イ) 蟬吟死後家督爭ひが起り、芭蕉はその未亡人を助けて遺孤良長を護つた爲に、敵黨から忌まれ、未亡人との醜聞を傳へられた。(芭蕉年譜によれば、この時芭蕉二十三歲、夫人二十歲)

(ロ) 阿嫂との濡衣

(ハ) 芭蕉十九歲の時蟬吟の侍女と通じた。

(ニ) 芭蕉が蟬吟の花見の供をして袴を損じた時、芭蕉の親戚なる侍女某が繕つて居たのを同僚が怪んで蟬吟に告げ、そのために侍女は入水して死んだ。

(七) 右の內(ハ)と(ニ)は同じものであるとしても、これ等には分析的に云つて共通點がある事は直ぐわかると思ふ。いづれも禁斷されたる戀愛であると云ふ點で……。かうした「噂」の煙をたてられた芭蕉には、その火があつたやうに思へる。芭蕉は弟子達に「云ひ切るな、云ひ切るな」と常に敎へてゐたさうだが、その句に對する態度が芭蕉その人でもあつたと思ふ。イブセンも「すつかり自己を語らうとする人は話せない」と言つたさうであるが、それらの言葉に深みのあるなしは別としてさうした結果、芭蕉については對女人關係の不鮮明を來たす事になつた。もつともそこに「俳聖」芭蕉の名は生れはしたのだらうが……。

(八) 尼壽貞が身まかりけるをきゝて

數ならぬ身となおもひそ玉まつり

(九) 園女亭にて

しら菊の目にたてゝ見る塵もなし

(八) 壽貞尼は野坡門人たる風律の『小ばなし』に、野坡の談ずるところとして「壽貞は翁の若き頃の妾にしてとく尼になりしなり」とある。また次郞兵衞物語には「次郞兵衞が母であり、芭蕉の乳母であつた」と。とにかく壽貞は芭蕉が最後の旅に歸鄕した時、江戸の芭蕉庵で留守居をしてゐたらしい。杉風への書簡にも「折々深川へ御なぐさみに御出あれかしと存候。され共壽貞病人之事に候へば、しかぐ〵茶をまいる事も得致すまじく

候」とある。この壽貞尼の病勢も漸く募つて芭蕉庵で病死した時、右の句があつたのだ。

（九）園女は伊勢山田の醫師なる斯波一有の妻であると云ふ。夫の死後大阪に出て暫く暮し、その後江戸で眼科の醫者となつた。一説に夫一有は渭川と號して生存してゐたとも云はれる。その自著『菊の塵』に自序して「わが此道に入りしは元祿二年の冬なり。あけの年の如月かの翁こゝの人曾良などひきゐきたられしにしか〴〵とつげたりければ、翁よろこびていかならむことをもつどりてよとおほせたるに『花までは時雨て殘れ檜笠』といひ出てければやがて脇の句附てたうべてさらに『のうれんの奥物ゆかし北の梅』といふ發句をさへきこへられしぞかし」と言つてゐる。筆者按ずるに、この句も「白菊の目にたてゝ見る塵もなし」と同じく園女の美をたゝえたるものであらうと思ふのだが、北の梅といふのは、きびしく凛然としてゐると云ふ以外に北の方と云ふ言葉を聯想させるのみか、暖簾の奥などあるのを見ると、どうやら當時有夫の婦人らしくも思はれる。なほこの句芭蕉翁發句集には「奥ものふかし」とあると。後、芭蕉は大阪に移つた園女の亭で彼女の勸めた茸を多食したのが因となり病死した。これを眞實とすれば、芭蕉の園女に對しての愛着は餘程根深かかつたものと思はれる。園女と芭蕉の年齢の差はどれほどであつたか知ることを得ないが、芭蕉は園女に娘コムプレクスを持つてゐたのではあるまいか。芭蕉『行脚の掟』に「女性の俳友にしたしむべからず、師にも弟子にもいらぬことなり。此道に親炙せば人をもて傳ふべし。惣じて男女の道は嗣を立てるのみなり。流蕩すれば心敬一ならず」と云つたことも、彼が身をもつて購つた眞實の裏付けがあつての言葉ではないだらうか？なほ『閉關の説』に曰「色は君子の惡むところにして佛も五戒のはじめに置くといへども、流石に捨てがたき情のあやにくに哀なるかたがたも多かるべし。人しれぬくらふの山の梅の下ぶしに思ひの外の匂ひにしみて忍ぶの岡の人目の關もる人なくばいかなる過ちをか仕出でてん」と。『嵯峨日記』に「我夢は聖人君子の夢にあらず、終日妄想散亂の氣夜陰に夢又しかり」と。嗣を立てるの外に男女の道を戒めた芭蕉の心情には何が潛んでゐたのであらう。たとへそれが昇華の道を助け、よき句作をなしたとは云へ、『嵯峨日記』の痛苦さもそれに由來したのではなかつたか。『虚栗集』に「曉の寢言を母にさまされて」（嵐雪）に附句して「ついに發心ならずなりけり」（芭蕉）とあるが、此の間の事情を語るものではないだらうか。「行末は誰肌ふれん紅の花」、「梅の香にのつと日の出る山路かな」、「痩せながら

わりなき菊のつぼみ哉」等も分析に價する句ではないだらうか、芭蕉は「憤る第三者」を必要とする型の戀愛者でもあつたらうが、また一面、父と同一化してもゐたらしい。西施のねぶの花などその例であるやうに思へる。

二、錯綜する相反心理

『甲子紀行』に

「不盡川のほとりに三はかりなる捨子のあはれに泣あり、此川の早瀬にかけて浮世の波をしのくにたえす、露はかりの命まつ間を捨置けん小萩かもとの秋の風、こよひやちるらんあすやしほれんと袂よりくひ物なけて通るに

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにそや汝、父に悄まれたるか、母にうとまれたるか、父は汝を憎むにあらし、母は汝をうとむにあらし、只これ天にして汝か性のつたなきをなけ。」

何といふ冷酷な言葉であらうか。芭蕉はこの捨子に恐らくは幼時期の自分を同一化したのではなからうか。だが併し、此處ではそれを一應投出して自身父母に同一化し捨子を客觀化することによつて悲慘なりし追想をさけてゐるもののやうだ。『汝の性のつたなきをなけ」との言葉は捨子のみでなく芭蕉自身にも與へられたものなので

あらう。でなければ、これほど強い語調は出ないものと思はれる。勿論、現實問題として、捨子を拾つた所で困るに相違ない。と云つて「こよひやちるらんあすやしほれん」などと捨子の死を願望するやうなことを云ふにもあたるまい。この條の前に「露しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き」と云ふエディポス的な句がある。「猿を聞く人」とは、現實に猿の聲（或は猿の如き赤兒の聲）を聞いたと云ふ以外に「去るの心を聞いた」意味もあるのであらう。また別にこの句の推稿前のものと思はれるのに「猿を聞く世」と云ふのがあるが、これは浮世の狡智を意味したのであらうが、芭蕉自身も現實社會面に於て大いに猿に學ぶ所はあつたのだらうと思ふ。外に猿の句「猿引は猿の小袖をきぬた哉」、「澁柿や一口はくらふ猿のつら」れは鳥の句にも云へよう。「ひごろにくき鳥も雪の朝哉」「何に此師走の市に行鳥」、「旅がらす古巣はむめに成りにけり」、「枯枝に鳥とまりけり秋の暮」。芭蕉また曰「春雨の柳は全體連句也、田螺捕る鳥は全く俳諧なり」と。墨染の衣に鳥の黒さを通はせて「僧に似て塵あり、俗に似て髮なし」と『奥の細道』の行脚に終始した芭蕉の心にその鳥の黒さが滲み込んでゐなかつたと云へるだらう

か？ 芭蕉にはなほも「這出よかし屋が下の蟾の聲」、「蜘蛛何と音をなんと鳴秋の風」などある。

猿に鳥に蟾に蜘蛛に同一化した芭蕉はそれだからこそ「白」への感情移入をしたのではなかつたか？ 俊惠が『無明秘抄』で「白き色のことなるにほひもなけれども、衆色にすぐれたるごとし」とは芭蕉も同感する所であらう。その「白」を菊に求めては「菊の香や奈良にはふるき佛達」、「朝茶のむ僧靜也菊の花」（白とは明記してないがいづれも佛と緣があるので推定して出した。）前述の「しら菊の目にたてゝ見る塵もなし」があり、月には「月影や四門四宗も只一つ」、「三井寺の門たゝかばやけふの月」、「月白き師走は子路が寢覺哉」となり、雪では「馬をさへながむる雪の朝哉」、「夜着は重く呉天に雪を見るあらん」 他に、「葱白く洗ひたてたるさむさ哉」、「其にほひ桃より白し水仙花」、「水仙や白き障子のとも移り」、「海くれて鴨の聲ほのかに白し」、「石山の石より白し秋の風」、「ひとり尼わら家すげなし白つゝし」、「夕顔の白く夜の後架に帋燭とりて」等にもなるのである。白は俳句では秋の色であるさうだが（荻原井泉水氏による）、分析的には純潔、高貴、死などの象徴である。芭蕉に何故かうした退行願望があつたか。これを知ることは結局この二つの傾向の句の間隙を埋めることを意味する譯なのだから、淺學韮才ではあるが、少し試みて見たい。

『芳野紀行』に於て芭蕉は「無能無藝にして只此の一筋につながる」と云つてゐる。然しこの言葉にたとへ刹那の眞實があつたとしても、つまる所は芭蕉のナルチスムス的な言ひ方で、死の床にあつて「俳偕は世に三合は出たり，七合は殘りたり」（『一葉集遺語』）「後世何ものか出ていかなるあたらしみをや探り出すべし。我只來者を恐る（『一葉集遺語』）と（山本善太郎氏「書翰より見たる芭蕉」『文學』四ノ九）云つた事と結局同じ事なのではなからうか。この自信が「此の道や行人なしに秋の暮」の所思をなさしめたのであらう。芭蕉は弟子達を愛してはゐたとしても、弟子達からは「新しみ」は出まいとも思つてゐたらう。「老若をわすれて閑にならんこそ老の樂とは云ふべけれ、人來れば無用の辯あり。出ては他の家業をさまぐるもうし」或は「あら物ぐさの翁や。日頃は人のとひ來るもうるさく、人にもまみえじ、人をもまねかじとあまたゝび誓ふなれど、月の夜雪の朝のみ友の慕はるゝもわりなしや。」（『閉居の箴』）（岩田九郎氏「芭蕉俳文の一考察」『俳句研究』三ノ一）これ等はあながち弟子達のことのみ云つたわけでもあるまいが、「即ち人間は敵愾心を統御すればする程、自我に對する理想我の態度は益

峻烈となる」（矢部八重吉氏譯『自我とエス』）からして見れば「あさがほに我は食くふ男哉」に現はれた自己嫌忌も受取れると思ふ。芭蕉は相當自我が強く、現實的にも「蕉門二千」を統率しその繁榮を來たしてゐる。『奥の細道』以外の旅は殆ど門下から門下への旅を旅してゐたらしく思へる。そしてそれ自らが寂びを侘びを娛しみ歎んだ環境を作つてくれたであらうと思へる。これは單に芭蕉の現實把握力のみではなく、彼が藝術家としての存在に最も大なる力があつたであらう事云ふをまたない。門下の正秀が師の遺語として記述したものの中に「斯中たるとて人にはかたり給ふべからず、勿論他門の人には無用の事也」など戒めてゐる所を見ると宗教的雰圍氣も助成されてゐたらしい。これが芭蕉をして遂に古人と同じ旅に死なしめなかつた理由の一つでもあるだらう。弟子達の厚情の中に（たとへ芥川龍之介の『枯野抄』に多分の眞實をみとめるとしても）形だけはやすらかな往生を遂げしめたとも云へるだらう。「夢は枯野をかけめぐつたとしても……。

最後に月へのアンビバレントな句を擧げてこの稿を終らう。「桐の木高く月さゆる也」（野坡）、附句「門しめてだまつて寢たる面白さ」（芭蕉）「木曾の痩もまだ直らぬに後の月」、「そのまゝよ月もたのまじ伊吹やま。」（終）

夢の自己分析

久下貞夫

夢（昭和十一年十一月二日）「臺所で父の土産物を頒けてもらつてゐる。切手蒐集帳である。大きい方を私に、小さい方を弟（何れの弟であつたがはつきりしない）に。ところが弟は大きい方をくれとせがむ。母が、この子は未だ無分別だからやれといふ。嫌であるが、やらねばならない、齒痒い。私は學校へ行く。途中父と弟がついて來る。父が弟に、こいつは仕方のない奴だと憎々しげに言ふ。早く行かねば學校に遲刻する。小使が迎へに

來て、七の番號の靴箱札をくれながら――一〇三七（一三〇七であつたがどうか思ひ出せない）ですがこれは假の札です――と言ふ。靴箱へ走つて行く、ベルが鳴つて居る、心が急く。靴箱の七にも三七にも人の靴が入つてある、自分の箱がない。

眼が醒めたので、朝になればこの夢は書きとめて分析しなければならないと思つて、夢を心の中で反覆してゐた。そして學校當時を回顧してゐると、次の樣な嘗ての或る出來事（それは些細な事ではあるが私にとつては非常に重大な出來事）を思ひ浮べた。それは斯うである。

中等學校時代の事である。何かの祝日で提燈行列に參加した歸路、學友七、八人と百貨店で食事をした。一人がライスカレーを注文しようと云つた。私は江戸ずしと云つた。皆がライスカレーに贊成した。私にライスカレーにしろと勸められたが、我を通して、すしにした。この事があつて後、そのグループから私は長い間除者にされた。この事件は餘程心にこたへたとみえて時々思ひ出すが、悲しい、苦い思ひ出である。

引續いて、寢床の中で、次の事を思ひ浮べた。少年時代の家庭の食事に就てゞある。弟等（兄と私にとつては異母弟に當る）は好まぬ副食物は遠慮なく嫌ひだと言つて食はない。すると母は――兄ちやんを御覽、何でも食べるだらう、何でも食べないと丈夫になれない。――と言つて叱り乍らも、何か他の副食物を與へられた。併し兄や私の場合はさうはゆかなかつた。嫌な場合でも嫌とは云へなかつた。嫌と言つて母から何か皮肉を言はれるのを極度に恐れて何でも食べた。そんな場合いつも父は默つてゐた。私は常に弟達に嫉妬を感じ、繼子の悲哀をつくづく味つた。

夢に關して何故二つの事件を思ひ出したか？　これは同じコンプレクスから發してゐるのであらうと思ふ。

二つの事件は既に夢の聯想であるが、他に最近出來事の聯想がある。

十月下旬に弟が除隊して家は忙殺されてゐるらしい。（私は未だ病氣療養中で家から離れた處に住んでゐる。）先達て母に蒲團を作つてもらふ樣賴んでおいたが、仲々持つて來ない。それを私は、內心大いに不滿に思つてゐる。この聯想は夢の最初の部分と同じ弟コンプレクスにもとづいてゐるらしい。夢の切手蒐集帳と蒲團とは非常にかけ離れてゐる樣だが、切手を蒐集してゐる私にとつては極めて大切な物だし、蒲團とて病中の私には大切な物であるから、無意識にあつては同じ價値を有するとみていゝのではなからうか。

×

分析してゐる内に、もつと深い意味のあるのに思ひ至つた。私の切手蒐集癖は未だ分析されてゐないが、一般的解釋としては、唯一最大價値のもの丶代償としてより小價値なるものを無數に集めるのだといふことになつてゐるが、この無意識の公式的解釋に依れば、切手蒐集帳は母の代償といふことになる。ところで蒐集帳が私のと弟のと二つあるのは理窟に合はない。それとも實母と繼母との二つを意味するのであらうか。つく〲夢を思ひかへしてみるに、蒐集帳二つ私と弟に頒けてくれたのは私に丈くれたのであつてどうやら覺醒時に歪めたのではないかとも思はれて、夢は頗るたよりない。兎に角、母の代償と解釋がつけば、夢の前半は最幼時の一つの典型的な弟コンプレクスといふ事になるらしい。

尙夢の願望充足は父が弟に憎らしげに叱つてくれるところにあるのではないだらうか。此の今も尙その大部分が昇華されずにある弟コンプレクスは、少年時代にその感情の葛藤に惱まされ處理し得ず、その恨みを（例へば家庭食事時の恨みを）學友を弟と見立て丶、江戸ずし事件の如く、晴したのであらう。あの場合、決して江戸ずしを食はねばならない理由は無かつた。

かうした嫉妬的な弟（カイン）コンプレクスは、幼時のナルチスムスを陰性の劣等感へと根深く反應形成されていつて、好ましからぬ性格となつてゐるのである。それが四年來病氣療養中といふ幼時退行には好條件が伴つて一層意識にのさばつてゐると言ひ得る。

思へば、この根深いナルチスムスの爲め、私は何と惱んで來たことであらうか。友達との交際關係を打毀すも一際ならずあつた。つまらぬ事を云つてしまつてから、あ丶又ナルチスムスであるとどうやら知りつ丶もどうしても言はずにおけず後になつて後悔する。何とリビドーの不經濟な消費ではないか、二重のリビドーの消費をしてゐるのである。

×

夢の後半の部分、即ち遲刻不安（？）强迫的なるは何と解釋すべきか？　前半とどんな關係にあるのであらうか。病氣療養中の私はどん〲後輩に追越される。それを齒がゆく思つてゐるのが原因だらうか。又、禁制されてゐる端的な性的慾望に原因するのだらうか。或ひは又その兩方を意味するのだらうか。この種の夢は時々見るが、分析出來ない。夢の數字は何か意味がなければならない。又、假の靴箱札とは何か？　先輩の御指導を給はらば幸である。（昭和一一、一一、七、）

不良少年教化者への公開狀

高橋鐵

不良少年は、最近、年々增加するといふ。昭和十年に日本少年補導會でまとめた統計によると、少年（滿十八歲以下七歲迄）總數の中で、百人に一人は不良少年化するらしい。しかも、現代の犯罪者中七割は、少年時代に「不良」として當局を煩はした者だといふ。

この狀態から推すと、第二の國民の時代には、なんと恐るべき犯罪者の數になるであらう。國は、犯罪者で滿員になる！

一體、この犯罪者の卵たる不良少年は、現在に於て、どういふ風に觀られ、どういふ風に「教化」されてゐるだらうか。これが問題の子供以上に、問題である。

まづ、彼等がどうして「不良」になつたかといふ問題を、現在の教化者は如何に考えてゐるか、私は種々の發表を通覽して、檢討しやう。

云ふまでもなく、近來は、爲政者の好むと好まざるとを問はず、環境が彼等をさうさせたのだといふ觀方をとる人が多くなつた。なんでもかんでも、遺傳のせゐだ（例へば、「父親が酒飲みだつたからだ」）等といふ人はおそらく無からう。けれども、未だに、廣い意味で、素質の不良で片付ける、ロムブロゾーの亞流も見受けられる。未成年者犯罪の原因は主に慾望の過多である等といふ茫漠たる說もこの中に屬してゐる。又、これと同樣、一見實證的にみえる「情緒性動搖」說（反社會性少年は比較的に、情緒性動搖度が高い。――氣持にムラがあると云ふ實驗的心理學說）なども、もう一層、無意識心理面に及ぼす後天性を分析してみなければ、教化の可能性にまで斷定することを許されぬ。

彼等に及ぼした諸原因の中、「兩親乃至片親」がないことは大概の統計に現れてゐる。

服業治產會で昨十一年に得たところでは、七百一名中

兩親のある者は二百七十七名しかゐなかつた。昭和十年度の少年教護法にふれた三千百四十一名中、親を缺いた者が八割である。同じく浪花少年院で調べた六百六十四名中では、三分の二の多數が親を缺いてゐる。

親がゐるにはゐても、子供をかまつてやれぬ親だつたといふ結論によつて、東京府兒童研究所では、昭和十年に、彼等の母親の半數は職業をもつてゐたと發表してゐる。

以上の數字によつても・親が不良少年にとつて（否、どんな子供に對しても）最も重要な役割をもつてゐる事は明白であらう。では、現在の教化者たちは、これらの不幸な子を如何に「教化」しやうとしてゐるだらうか。

教化者の意見によれば、親のないことは愛に餓えてゐることである。だから、服業治產會の考査員などは全部宗教家である。佛の愛で救ふと云ふのだらう。

なるほど、愛の飢饉、（愛を注いでくれる親がないことは）社會人としての子供を無責任にするに相違ない。愛の原型さえ知らさぬことに相違ない。けれども、教化者は、そのやうな受動的心因のみでなく、親に對する能動的心理（性格形成に及ぼす意義）をも考慮すべきであらう。

受身の愛が足りぬ丈けで少年が不良化するのだつたなら、萬物に平等の愛をもつ神佛を「妄想」させるだけで救へるかも知れぬ。しかし、彼等に對して生きてゐる神佛（具象化された愛）が、親以外に、あり得るだらうか。まして職業宗教家が、失禮ながら抑壓以外の心的加工を如何にしてなし得るであらうか。

親は、もつと深い意義をもつてゐる。それについて精神分析學は經驗的にいろ／＼の關聯を教えてゐる。（私はこゝに總括的な「意義」を擧げておかう」

親が（殊に、同性親が）ないと、子供は超自我（無意識的の良心）の模型がない爲、超自我を刻み上げることさえ困難になる。そこで教化者たちが、よき親代償になることが必要である。

叉エディポス的な愛の訓練のコースを失つたことになる。それから、その爲に、罪障感・劣等感が絶えず親なき子を脅かすことも看過出來ない。彼等に妙な恐怖心が強いのは、多くの研究家も報告してゐるが、少年審判所保護司太田秀穗氏の考査によると、不良少年の七割以上は幽靈をひどく怖がつてゐる。いや、殆んど全部が臆病で、夜道を恐れる。高所を恐れる。目上の相手に激しい恐怖心をもつてゐる。――これを分析すると、必ずや、彼等が、罪障感乃至劣等感（從つて、願望としての贖罪慾、反動としての超過補償からくる兇暴性）に惱まされ

てゐるのを見出し得るであらう。

その次に、親のない子は、元來、リビドー纒綿の（愛を能動的に向けるところ）の對象を喪つてゐる。そこで彼等のリビドーはどこへ行く？　いはゆる「惡」へ行くのだ。折も折（思春期前後）、擴大して行く自我と性の第二次開花とに總てをゆだねて、衝動を行爲に移して行く！

それに加へ、親に向けらるべきエディポス的拮抗は、早くも他の第三者や社會に轉じられて「與太者」としての惡を誇るやうにすらなる。喫煙や性的悖德を彼等の中三分の二がおかしてゐるといふ、その無意識動機も、實は大人との闘ひであり、願望充足的な抗議である。嘗て、大阪府中等學校校外教護聯盟といふのが、學生の抜(エス)遊び(ケーブ)を調べたところ、百九十八名中三十七名が課目忌避であり、十七名が自由な勉强の爲であつた。この事實こそは、ヤコブスゾーンの說の如く、父代償たる教師・學校・課業等をサディスティックな壓迫と感じる少年達の、歪んだ拮抗から起るのであらう。

では、親がゐて、しかもなほ、不良化するのは、皆、「犯罪定型」にはまつた不良素質の少年達だらうか。勿論、先天的に惡の素因をもつ者も、あるにはあるであらう、けれども、私は、それ以上に、現代社會に於ける親の權威の失墜と物質文化に逆比例して增す民衆の貧困化を重要視すべきものと思ふ。

嘗て、ドイツで、戶主の失業した家庭の兒童が急に學業成績の低下する事實を詳細に調べ上げたことがある。又、昭和十年度に、イギリス政府統計局でも、未成年者の犯罪が失業者增加と全く正比例すると發表してゐる。大多數の親はあつてもないも同樣に、家族の長たる權威を失墜しつゝある。これはブルヂョア家庭に於ても、結局、家族制度の徐々たる崩壞と、共に親子の離反が激化してゐるから、同じ結果をみる。貧家と富家とから不良少年群が雪崩出る事實はこれを裏書してゐるのだ。

かうして、諸々の社會惡を絕頂に達せしめた資本主義經濟機構は、少年達から超自我を奪つた。しかも、彼等少年達は、燃えあがる欲望充足物を眼外にみせつけられたまゝ、(且、リビドー方向を昇華する道も與えられずに)野へ放たれる。走つて行けば、罪障感・劣等感の穴に陷る。それを補ふのは虛榮の市と蠻行の闇である。犯罪の斷崖である。こゝに、與太者が生れズベ公の花が咲く。「滿州馬賊の唄」がはやり、映畫の惡影響と稱するモンスターが橫行する。

彼等を審く人よ、又、教化せんとする人よ。貴下等は、一體、いつまで、眼を掩つてゐられるのだらうか。

まやかしの神を與えて、脅迫の宗教を押し付けて、一時的な職業に注意を奪つて、快樂を禁斷して、罪の烙印をおして、それで救へるなら、人間の心理なんて單純なものだ。

いや、先づ舊來の犯罪心理學（人間心理の意識面を傍觀したゞけで、それ以上、深い根がありさうなものは遺傳、內分泌異常、本能、衝動などで誤魔化した宿命論的幽靈塔）は既に破産してゐることに氣付き給へ。

そして、貴下等自身が、健全な超自我をもち、超自我の模型になるべきである。それから、彼等のいぢけた無意識病根に、科學的な自信を與えるべきである。或ひは甘美な罰のサデズム手段を工夫すべきである。又、彼等のどうしてよいか分らないリビドー（及びその一具現たるヒロイズム――慘忍・破壞・喫煙・飲酒・喧嘩・文身殺傷・軟派行爲など）を高いものへ昇華させるやうに努むべきである。無意味な超過補償の愚をよりよく解放さすべきである。家族心理の闇を精神分析によつて警戒し、照らすべきである。と共に、社會悪の罪を、まづ、究明すべきである。これが再出發の指針である。

『阿部定の精神分析的診斷』正誤表

頁	行	誤	正
表紙	三	SOLOME	SALOME
目次四	九	ピアツトン	ピアヅリの
同	一〇	肖象	肖像
本文一八	七	さざ	さだ
一九	八	この事	この書
二六	六	當人	常人
同	七	通當	通常
三四	五	絶えねば	絶えなば
三七	六	ルビ	べに
四四	四	イサベラ	イサドラ
五一	六	昭昭	昭和
七三	五	×性	性器
八二	四	サデスティック	サディスティック
同	七	僕は	私は

時評

時言數題

大槻憲二

一、漢方醫學の復興に就いて

最近漢方醫學の復興は盛んな勢にあるらしく、拓植大學でもこの四月から「漢方醫學講座」を附屬せしめることになつたと、新聞紙は報道してゐる。西洋醫學と漢方醫學との共通點と相違點とに就いては、私は何等特殊の知識を持たないが、西洋醫學の壓倒的勢力の下に漢方醫學が不當に虐待せられたと云ふやうな傾向は、公平に見て、なかつたとは云へないであらう。併し漢方醫學が近世頭初に於いて西洋醫學のために壓倒せられたことが、單なる西洋崇拜の迷夢のためであつたと云ふ風に考へるならば、それは偏見であつて、漢方醫學の缺陥に就いては冷靜な認識眼を我等は失ひたくないと思つてゐる。

併しながら今や、西洋醫學の缺陥にも我等は氣付いて來たのだ。その聲は單に東洋からばかり發してゐるのではなく、西洋からも聞こえて來てゐるのだ。本誌本號にその肖像を掲げ、その通信を紹介しておいた、フランスの分析學者アランディ博士の如きも、西洋醫學思想に對して嚴正な批評を加へてゐる人であつて、その點に於いて分析學と漢方醫學とは一脈の共鳴點を持つ

ABHUB　アブフウブ

他の學問がアブフウブ(屑)として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

寢覺の床

不老泉院主

寢覺の床とは木曾川の美景の名であることは、日本人として誰しも知らぬものはあるまいが、併しその何の意味なるかを知つてゐるものは恐らく一人もあるまい。一體、誰が何時つけた名であらうか。それは老生も知らないが、その意味だけは分析の力によつて了解することが出來る。寢覺の床は碧く清い溪流であつて、兩岸は四角い巨岩を以て自然の護岸工事のやうになつてゐる。水の碧と岩の

ものであらう。

けれども、今日に於いて漢方醫學が西洋醫學に對抗するとなれば、それはあくまでも西洋醫學の長を取り入れその短を補つたもの、つまり辨證法的止揚の實現せられたものでなければならない筈である。近來流行の日本主義とやらの感情的な、ナルチスティッシュな潮流に乘つた、單なる反動的な、非科學的な、態度や主張であつてはならないと思ふ。その點、吾人ともに相互に警戒するところなければならないであらう。

二、蘆原將軍の死

松澤病院の主と呼ばれ、精神病界の人氣王であつた蘆原將軍こと、廬原金次郎がこの二月二日午後零時半に、八十八歲の高齡を以て長逝した。私も數年前、松澤病院を訪れた際に、將軍に拜謁の榮を得たが、その時將軍は既に將軍から「帝」に昇格してゐた。私にも勅語を鼻紙に書いて下賜せられ、それには麗々しく「蘆原帝」と自署してあつた。私の家寶の一つとして今なほ保存せられてゐる。

彼は晩年は既に正常者になつてゐたのだが、院外に出ても喰つて行けないので、病人を裝つてゐたのだと云ふやうな風評を耳にしたこともあつたが、病院で彼を退院せしめなかつたところを見ると、そんなことは噓なのであらう。併し病人にして八十八歲の高齡を保つて、殆ど天壽を全うしたと云ふことは、病氣と健康との差別を疑はしめるやうな事實である。精神的に不健康なものは、必然的に肉體的にも不健康になると我等は信じてゐるのに、その信念を動搖せしめるやうな事實ではある。我等は主任醫師から、いつかは彼

白と相反映して如何にも美しいが、それにしても「寢覺の床」とは奇妙な名ではないか。而も何人もその奇な奇とせず當然の如く考へてゐるところがます〲奇中の奇である。

老生の解釋によれば、「寢覺」とは「往生」の義である。「寢」が「死」の意であり「覺」が「再生」の意であることは、大槻著『精神分析讀本』中の「輪廻思想」論に於ける「往生」の語義に就いての解釋に依つて明かである。卽ち、「寢覺の床」に投身すれば、死して天國に再生するとの空想を人々が抱くのだと云ふことは明かだ。換言すれば、死の本能が觸發するところであるのだ。それにしてもその「寢覺」の美景に附するに「床」とは何事ぞや。床とは寢覺の「寢」と呼應して「寢床」であることは疑ひの餘地がない。淡流を呼ぶに「床」はをかしな話であるが、床は妻や女の無意識象徵であることは幾多の證據が上つてゐるから、從つてこゝで床とは、女の女たるところを代表するものであることは、推論せられる。さう云へば、この美景を高いところ

の症狀に就いて精しく訊いて見たい興味を感ずる。

何れにもせよ、精神病界の巨星は地に墜ちた。彼が死に臨み、蘆原死すとも誇大妄想は死せず」とでも豪語したならば、一層面白いことであつたらうが、彼は勿論そんな放言をするにはあまりに病人であるか、或はあまりに正氣であるか、何れかであつたらう。

三、内田教授の運轉手試驗

本誌讀者K氏から二月一日付『工業日々』を送られ、それに掲げられた、早大内田勇三郎教授の運轉手心理試驗の結果報告に就き、分析學的立場からの批判を求められたので、本誌上でお答へすることにした。

内田教授は筆者の尊敬する先輩であり、その實驗調査は信頼すべきものであると考へてゐるので、その點第三者の容喙すべき限りではないが、心理現象は複雜であるから、意識方面からの調査以外に無意識方面からの見解をも加へることは、一層事實への科學的評量を精緻にするものであるとは云へるであらう。

内田教授は去年の八月末から運轉手一千五百餘名に就き「クレペリン加算法」を以て調査したところ、そこには必然的に加算能率の上昇型を示すものと、下降型を示すものとの別が生じた。實驗心理學上、前者を「定型」又は「健康型」と云ひ、事務的で運轉手などには好適であるが、後者は「夜更かし型」又は「學者型」と云つて運轉手には不向きで、學者や文士には適するのである。そしてこの「學者型」の者はどんな緊張してゐる時でも茫然とする瞬間を持つ。卽ち懸命に運轉してゐる最中でも色々な雜念に捕はれて「不

から見下して御覽なさい。まるであるものを彷彿せしめる。さうして汽車は丁度その彷彿に好都合の位地を走るやうに鐵道が布設せられてゐるのだから、なかなか粋なきかせたものだ。

このやうに巨大なあるものを持つてゐる女は巨大な女（母）である。卽ち、巨母である。自然と云ふ巨母との合一、それが往生（寢覺）の捷徑であると云ふ思想を端的に示してゐるのが、この寢覺の床の命名である。

さうしてかつてこのやうな巨母（乙姫）との交りを敢行して大往生したものには浦島があるから、この浦島傳說は日本民族の無意識的自由聯想の必然性に依つてこの寢覺の床に結びつけられ、彼はかつてこゝで釣をしたと云ふことになつて、この寢覺の床の眞上に在る臨川寺には、浦島が用ゐたと云はれてゐる巨大なる釣竿が麗々しく寺寶として保管せられてゐる。それは實に、巨大なる釣竿である。それはさうだらう。巨母のお相手をする巨人浦島の竿の巨大であることは固より當然だらう。寢覺の床と浦島との自

覺の事故を起して、後に驚き慌てると云ふ。

併しながら加算法試驗により上昇型を示したものが、夜更かし型であり學者型であると云ふ結論にまで、如何にして到達し得るのかと云ふ點に就いては、私は直接内田教授から何らの説明を聽いてゐないので、そのまゝ受容れることは出來ないが、私自身に就いて見ると、私は加算試驗はして見ないが、して見れば必ず上昇型であるに相違ないと云ふことは想像が着く。さうして如何に「緊張してゐる時にでも茫然とする瞬間」を持つと云ふことも多少は首肯される。併しそれ故にとて上昇型に非ざるものゝ一切が「茫然とする瞬間」を絶對に持たないと云ふ結論に同ずる氣持にはなりにくい。

たゞこゝに次のやうな反證的な事實は統計的に上つてゐるさうである。即ち、科料處分三十回以上に亙る折紙付の不良運轉手たちに對して加算法試驗を施して見ると、其の四十五パーセントまでが上昇型であり、學者型であると云ふ。併しそれとても大體の傾向であり、統計率も四十五に過ぎないとすると、半分以下の妥當性しかないと云ふことになる。

このやうに大體の傾向と云ふ點だけしか明かでないのに、その型に屬するか否かに依つて運轉手としての職業的資格の與奪を決定すると云ふことは、いさゝか早計のやうに思はれるが如何であらうか。況んや、そのやうな傾向を「生れつき」のものであり「矯正不可能」のものであると定めて了ふことは一層大膽に過ぎる結論ではなからうかと思ふ。殊に、實驗心理學が何ら原因調査的方法ではなく、單なる結果統計法であつて、從つて治療的方法に就いては何分の方策なきものである場合に……。

科料處分三十回以上に亙るやうなものは、分析して見れば、その無意識に

由聯想的結合は、その半面に於いて同時に性と死との同一性をも意味してゐるのであつて、その事は實に分析學の研究結果と一致してゐるのである。

寢覺の山

寢覺の床は我々にまた芭蕉の名句「義仲の寢覺の山か月悲し」を聯想させる。この句に於ける「寢覺」の語義も、やはり「往生」であることは勿論であらう。この句は、大津に於ける木曾義仲打死の跡義仲寺の境内にある句碑に刻んである。芭蕉が義仲の悲慘な最期を憐み、彼があの世に於いて成佛（寢覺）してをればよいがと念じ（願望し）天上に懸つてゐる月を仰いでは、あれが或は義仲の寢覺めたる靈の姿であれかしと思つてゐる心であらうか。それにしても寢覺の「山」とは何であるか。床が女性であるならば、こゝの山は男性を意味するのであらうか。老生もかつてこの義仲寺を訪れ、芭蕉句碑の前にたゝずんで低徊去る能はざる思ひをした經驗があるのでよ

於いて何等かの破壞衝動的なものを持つてゐるのではないであらうか。この傾向は個人的コムプレクスに基く場合もあるが、年齢的には青年期に於いて殊に甚だしく顯現するやうである。從つて分析治療に依つてかゝる傾向を取去る可能性はあると共に、また年齢の進むに從つてかゝる傾向が自然に失はれて行く可能性も否定出來ない。事は人の生命と生業に關する問題であるだけに、何れの側の事を考へるにしても、斷定は愼重でなければならない。もし運轉手等の悉くが他に適當な職業がある場合には、内田教授の實驗に基く大體論を以て決定的な標準としてもよいかと思はれる。併しこれはあくまでも乘客本位の考へ方に偏するわけではある。

古今集と公德心

倉橋久雄

本多辰次郎博士は『古典研究』二月號に「古今和歌集讀後感」を寄せて、平安時代の道德觀念に言及してゐられる。その內に、古今集には「櫻でも紅葉でも折り取つて賞玩する歌が頗る多くある。他家や公園の花、紅葉を折取るとは違ふとしても、庭前とか山中とかでも相成るべくは其の儘、指し措いて卽ち（やはり野におけ）と言ふ風にすれば、大衆が見ることが出來る譯である。又木の爲にもよろしいのが、當時その思想は少ないと見える。」と云つて、次の三つの和歌を證據として擧げてをられる。

く知つてゐるが、この寺（とは云へ、昔は知らず、今では寺にあらず俳人の庵に過ぎない）は山上にあるのではなく、平地にあるのだ。それに對して山と云ふは、寺の事を一體に山と云ふためばかりではないかも知れないが、そこまでの詮鑿は芭蕉を墓から起して訊いて見るより外に途はない。併し「寢覺の床」とは、何としても云ふわけには行かないであらう。

押賣の辯

いつぞや自家に物を押賣に來た男があつた。その時その男は面白い臺詞を口にした。曰く「金錢物質に御不自由はありますまいが……」云々と。この言葉は實に意味深長である。購買者への威赫と懇願とを同時に意味すると共に、他面に於いて彼自身の劣等感と正義觀とをも同時に意味してゐることが、あとで分析的に考へて見て判つたからだ。

「金錢物質」と云ふと同じことを別々の言葉で云ひかへてゐるやうに一見思へ

鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと
折りつれば袖こそにほへ梅の花ありやとこゝに鶯の鳴く
よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

本多博士は古今集に櫻や梅を折つた和歌が多いと云ふ事を根據にして、簡單にこれを現實の事として論を進めてゐるやうだが、果してさうなのであらうか。あえて和歌とは云はず俳句でも「梅花ををりてよめる」と前書してある場合はとにかく――いや、これとても作者が梅花と共に何を折つたか、折れた梅花より折つた作者の心境にこそ和歌評の意義があるのだと思ふのだが――おほかたの作者にとつて、それが現實であつたか單なる願望又は幻想であつたかは大いに疑問としなければならない所であらうと思ふのだ。古今集序にも「秋のゆふべ、龍田河にながるゝもみぢば、みかどのおほんめに、錦とみたまひ、春のあした、よしのゝ山のさくらは、人まろが心に、くもかとなんおぼえける。」の如く現實と幻想とは表面的にはつきりと割り切れるものではないと思へる。作者が現實の事であるかの如く表現したからとて、それをそのまゝ事實として受取るのは用心されるべきだらうと思ふのだ。「やまとうたは、人のこゝろをたねとして、よろづのことのはとぞなれりける。」ともある通り、和歌の如き人間の空想的所産又は象徴的表現に過ぎないものを證據として道徳を云々することは輕卒の譏を免れないであらうと思ふ。示された三つの和歌は道徳的見地の根據とするには薄弱のものゝやうである。だからこの場合、憶測すれば、本多博士は『古今集』の和歌評に托して現今の道徳心の缺如を突かうとされたものと思ふ方がむしろ妥當でもあり、正直な見方でもあるやうに思へるのだ。丁度古今集の作者連が梅花に托して、何

るけれども、さうしてそれが恐らく彼の意識面の目的ではあつたらうが、彼の無意識では別の目的があつたらうと思ふ。何となれば、それは彼自身の態度（威赫と懇願とを同時に表現してゐた態度）がそれを證明してゐたから。「金錢物質」を二つに分けて考へて見ると、その意味が非常に判然と分る。「金錢に御不自由はありますまい、だからこんなもの一つくらゐ買つたつてお前さんの家では困ることはなからう」と云ふ威赫的な意味と、「物質に不自由はないだらうから、こんな押賣をされるのは、さぞ御迷惑だらうが」と云ふ懇願的な意味と……。その威赫と懇願との陰には彼自身の正義感と劣等感とが裏付けしてゐる筈だ。何となれば、金錢物質に不自由のないものは自分のやうに不自由なものを助ける義務があるとの正義觀と、自分は不自由のために人に懇願しなければならない者だとの劣等感と……ところで、彼はこれをもつと不自由でない人のところへ行つて云ふべきであつた。さう云ふ所に行つて云へば、さう云ふ人の罪障感に觸れて效果的

等かの感慨を示さうとしたかの如くに――。公園とか大衆とかの言葉が博士の言の中にあるやうであるが、當時は現在と事變り木々も至る所に豊富であつたのではないかと思へる。一枝や二枝、歌ごゝろのあるものが折つた所でさして大衆に悪影響も與へないだらうし、いはんや公德心云々も問はれなかつたであらうかとも思へるのだ。だとすれば本多博士はとんだ江戸の敵を討つたとも云へるであらう。

さて梅花折るべきか折らざるべきか。これは矢張り作者その人にまかせてその作者の昇華振りに應分の感慨を寄せる方が面白くもあり、賢明でもあらう。若し本多博士をして作者たらしめば、折られざる梅花に博士のコンプレクスは語られることであらう。和歌の象徴的意義については大槻氏が『やはり人間的な』（都新聞十一年十月中旬）等に於いて詳述されてをられる。本文と並讀されゝば幸甚である。（終）

新刊紹介

『問題の子供』ニイル原著・霜田靜志譯――

この書は、霜田氏の名をわが國に高からしめた名著であると共に、兒童問題への關心を强めた歴史的出版物である。內容については今更記者が紹介するまでもないであらう。この度改譯改版して手頃な上下二冊の美書となつて、一層讀書人に親しみ易い形となつて現れたことを我々は喜びたい。

（定價・上下各冊五十錢）　刀江書院發行

であつたらうが、さう云ふ罪障感のない、同じ不自由者仲間へ來て云つたものだから、到頭分析材料として利用せられるだけの結果になつたに過ぎず、一物も買つては貰へなかつたのは氣の毒であつた。

時計の子

昭和十一年新年號の『少年俱樂部』の「笑話」欄に面白い話が出てゐた。題は『時計の子』とあつて「お父さんが帶の間から時計を取出すのを見て、坊やが『坊がいくつになつたら、帶から時計が生れるの？』と尋ねた」と云ふ話。兵庫縣の小川光治氏の投稿とあつたが、この話は勿論實話であらう。こんな話が大人の架空で揑造出來る筈がない。

まづこの坊やが如何に出產と云ふことに絕大の興味を持つてゐるかゞ分る。出產と云ふことの興味は勿論、自分自身の出產の由來に就いて疑義を抱いてゐると云ふことをその裏面に豫想しなければな

らないことだ。少くとも彼は、出産とは大きな人の身邊の何處かゝら小さいものゝ出て來ることだと理解してゐるのだ。この出産觀は自分の自然の領解であらうか。次に面白い點は坊やのアニミスムス的思想で、彼が時計を擬人化し、それが帶の間から出るのを出産と同一視してゐることである。彼は自分を時計に同一化してゐるのであらう。第三に面白いのは、坊やが父親に出産能力ありと考へてゐることである。幼兒にとつては父母の性別とその性殖的性能別とは固よりあまり明白でないのであらう。それは多くの幼兒が母親にもペニスがあると考へてゐるのと同じであらう。第四に面白いのは、自分もまた出産能力を父親の如く具へるやうに早くなりたいとの願望を持つてゐることをこの一語に於いて明白に示してゐることである。子供にとつての兩親への同一化は、この出産能力の獲得と云ふことに於いてその窮極の目的に達したことになるのであらう。

二月十一日には

土屋秋實

一月三十日東京ＹＭＣＡ主催の下に開催されに天文講座において、京都花山天文臺長山本一淸博士は「本年の二月十一日は神武天皇卽位紀元二五九七年の紀元節であると同時に大舊正月朔日に當るから、日本の時局に何か興味ある問題が起るに相違ない。」と天文學者の鋭い職業的直觀を以つて興味ある豫言をした。

一般に正月においては、吾々の心は自然に原始時代にまた幼時期に退行するのであるが、紀元節である二月十一日が本年は大舊正月朔日に當つてゐると言ふことは、條件反射によつて日本國民の無意識心理に何等かの民族的自覺が昂揚するのではあるまいか。何となれば紀元節も正月も共に物の新たに生れる、又は生れ代ることを無意識論理的に意味するから……。私はそれが神經症的な形態で現れなければよいがと一種の不安を懷きながらも多少の好奇心を以つて當日を待つてゐる。併しこの雜誌が世に出る頃にはその日既に過去となつてゐる筈だ。（完）

とろんこ大將（分析漫畫）

塚崎茂明

これは昨年十二月二十日頃の每夕新聞に揭げられたもので、畫家は嘗て本誌本欄に於て取上げられた事のある『串差おでん』の作者松下井知夫氏である。とろんこ大將と云ふのは畫中の爺さんの仇名らしい、ノントウ的存在から付けられたものと見える。しかも此の漫畫的性格に冠するに大將を以てして、現在ではもう月並になり過ぎてゐるが、不釣合の極端さから來る滑稽味を助長してゐる。

とろんこ大將の漫畫は此の外二三眼にしてゐるが、漢詩的作法の起承轉結に倣つて此れ程面白く運んだのは他には無かつたやうだ。

第一場面では大將が炬燵にあたりながら、娘の乳房に吸ひ着いてゐる赤ん坊を



美んでゐる。この炬燵は胎内をシンボライズしてゐる。大將自身もう還暦で小兒化してい丶年配なのだ。第二場面では赤ん坊の幸福から必然的に想到する苦の現實を思つて、いやにセンチになつてゐるが、舅の言葉で自分自身の事を思ひ出した。第三場面ではとろんこ大將の考へと若夫婦の考へとが全然違つてゐる所に面白味がある。江戸小咄に親爺が嫁の乳房を吸つて息子に「お前は俺の女房の乳を吸つたから、俺はお前の女房の乳を吸つても文句は出まい。」と言つたとか云ふがあるが、親爺の息子に對する報復的心理は舅が養子に來た筈だから此の漫畫には當てはまらないかも知れないが、似たものを此の若夫婦は感じたものと考へられる。だから第四場面では大將が飲まんと欲したのは酒であつたと知つて微笑を禁じられないでゐる。彼等は大將の言葉に對する觀念支出が多過ぎたことを今知つたわけである。

第四場面で大將が喇叭飲みしてゐるのも意味がある。銚子は乳房、酒は母乳の

（以下第一〇一頁下段へ續く）

大島（三原山）分析紀行

大槻憲二

一、死（詩）の島、再生の島

私は昨年十二月半頃、急に機會を得て久しく一遊を望んでゐた大島へ渡ることが出來た。自分にとつては種々な意味で非常に有益でもあり愉快でもあつた。

十二月十四日の夜十時半に芝浦の棧橋から乘船した。船は橘丸であつて、これは東京汽船株式會社でも自慢にしてゐるらしい美事な船で、形こそ小振りなれ、體裁、構造すべて歐洲航路の船のやうであつた。私は同行十數名の舊友等と賑かに乘込んだが、自分の宛てがはれたのは日本室であつた。日本室と云つてもベットの代りに蒲團を敷いて寢るやうになつてゐると云ふだけで、室全體の感じは非常に西洋風で、絨壇樣のもので床全體が被はれてゐる。深夜に入らうとする刻限に芝浦を出發して文字通り眞暗な海上を、南へ南へと走つて行くのであるから、その事自身が非常に象徴的で、如何にも詩（死）の島、涅槃の國へ行くと云ふ感じが、痛切に胸に迫つて來る。さうして一夜明くれば――と云つても船が元村に着いたのはまだ五時前で、四邊は全く眞の暗であつたが、とにかく明け近くなつて、眠り（死）から醒めると共に、見知らぬ南の國に漂着してゐるのだから、如何にも死を經て彼岸の大往生境に到達したやうな氣持になる。私はかつて讀んだ英國の死の詩人ヰリアム・モリスの作『月は東に日は西に』を想起した。その詩は羽衣型の傳説を取扱つたものであるが（本誌第二卷第四號に詳し）、逝ける戀人を尋ねて主人公が世界中を漂流し最後に海底の藻屑となるが、失神から目ざめると自分は南海の怪しい孤島に漂着してゐたと云ふ話で、大島が涅槃本能強きわが民衆の無意識にとつて非常な魅惑である所以も判然と諒解せられた。

二、島のあんこ

元村へ着いて直ちに自動車で二里餘（？）をゆられ、岡田村の觀光ホテルに着いたが、そのホテルの意外に堂々としてゐるにはいさゝか驚いた。船があれほど立派でなかつたら、恐らくもつと驚いたであらうが、同じ汽船會社の經營である以上、この船にしてこのホテルあるは當然であらう。

ホテルの女中としては有名な、島のあんこ（娘）たちが例の手拭を王冠の如く輪形に頂き、漆黑の恐ろしく豐富な頭髮を特異な形に結ひなして、帶はグルグル巻きにして、素朴な姿で接待をする。この地方色はホテルが恐らく大事に保存して遊客へのサービス隨一としてゐるのであらうと思ふ。あんこたちが美しいと云ふことは豫々聞いてゐたが、それにしても島中のよりぬきの美女たちを集めたものと見えて、何れもよく顏形が整ひ、體格も美事で、如何にも立派である。皮膚に潤ひがあり容貌に一種の品位があつて、只の田舍娘とは思はれない。多分昔、大島は流人の地であつたから、文化の血がそれ等の人々を通じてあんこに流入してゐるのではないであらうか。もしさうだとすれば文化と野性とがよき調和を得たる結果であると申すべきであらう。

島には藝者なるものがあるのだが、その藝者たるや、やはりあんこなのであつて、その姿もあんこの制服制帽を着用してゐて、極めて素朴なものである。有名な大島節だの、大島踊りなどを演じて見せたが、流石に鄙びた中にも洗練せられてゐて、普通のあんこの唄とは違つてゐる。言葉は完全に大島辯である。例の「わたしや大島御神火育ち胸に煙は絶えやせぬ」云々と云ふのは有名な大島節であるが、この歌詞の分析はわが讀者諸君に對してはあまりにも容易な課題であらうが念のために試みるならば、「私は大島生れで三原山の御神火に教育されて來たから、山に同一化して私の胸にも戀情の火は不斷に燃えてゐる」と云ふ意味であるが、大地の火が本能の火（情熱）の象徴となつてゐることは定石通りであるから今更説明するまでもなからう。この大島節以外にも一つ「ガシャガシャつたら寝られない」と云ふ折返しのついた唄がある。名は聞き洩らしたが、この折返しはどう云ふ意味であらうか。竊聽症的コムプレックスの唄であらうか。かう云へばわが讀者諸賢には既にお分りであらう。

三、富士遠望と三原近望

着いた日は雨天であつたので、終日ホテルに蟄居してあんこの唄などに聞きとれてゐたが、その翌日（十六日）

は反對に天は清く晴れ、風もなく絶好の登山日和であつたので三原山見物と定め湯場まで自動車で乗りつけ、そこから林間の小徑を徒歩して行くこと一里ばかり、有名な御神火茶屋に辿り着いた。

湯場へ行く途中、山腹から海を隔てゝ右手に富士を見たが、自分はかつてこれほど美しく、これほど莊麗な富士を見たことはなかつた。思ひがけもせぬほど高い中天に懸つてゐる富士、裾の方は霞にかくれて夢の如く、眼下には靜かに白波が岸邊に打寄せてゐて、如何にも身は塵外にある心地であつた。大島からの富士を見ずして富士を云々する勿れと、私は云ひたい。

御神火茶屋は噴火口の外輪山上にある。これは恐らく舊噴火口邊であらうが、今まで見て來たところは一面の樹海であつたが、こゝは一望灰色の砂山で、如何にも凄慘な感じである。眞正面遙か現噴火口からは三原の噴煙が眞白に、遠雷の如き響きと共に噴き出される。自分は同行數名と共に初めて乘つた駱駝の背上から四邊を顧望しつゝ、身は宛も神曲地獄篇中の人となつたやうな感じがした。火口から數丁離れたところに「火口茶屋」なるものがある。その茶屋の麓まで來た時、駱駝は如何にも自分の責任を果したと云はぬばかりに立停つた。御者はも少し上まで行きませうと手綱を引張つたが駱駝はテコでも動かなかつた。駱駝の職業意識の世智辛さに苦笑しつゝ、併し遙々異鄕へ來てこんな勞務に服してゐる彼女（それは牝であつた）に同情と感謝とを寄せつゝ私等は鞍から下りた。それから一二丁の灰山道を營々と登りつめ、頂上の火口茶屋でまた小憩して愈々現噴火口を覗きに出かけた。同行の内には恐れて引返した者もあつた。無理もない。萬雷の響きが、不斷に噴火口底から響いて來、その度に怪しい白煙が濛々と立昇るのだから、大抵の者は尻込みするのは尤もである。併し私は折角こゝまで來て噴火口を見下して投身者の心理に感情移入する機會を放棄することは、讀者諸氏に對しても不忠實であるとばかり、敢然學的義務感と共に勇を鼓して出かけた。

坑口間近には金網の塀が張廻してあつて近付くことが出來なかつた。併し案內の人が間道から櫓の方へ連れて行つてくれたので、自分達同行三人は代る〲その櫓の突出た桁の上に四つ這ひになつて中を覗き込む事が出來た。そこは文字通り切立つたやうな斷崖で古い形容ながら身の毛もよだつばかりであつた。只今自分はこゝへ飛込まうとしてゐるのだと想像して見たが、一向誘惑も衝動も感じなかつたから、まづは自分の心理の健全に安堵した。併しいつまでもまご〲してゐるとどんな無意識願望が心の噴火口底から湧き上つて來ないとも限らない

ので長居は無用と早々に立上つたが、途々案内者から投身者たちの數々の珍妙奇拔なエピソードを聞かされた。歸途は徒歩で元村に下り、元村から乘合自動車でホテルに歸着した。

四、波浮の港と六踏園

その翌日は有名な波浮港へ行つて見た。「波浮の港は巾着港、惜しいところに紐がない」と云ふ俗謠があるさうだが、この謠を分析的に觀察すると、どう云ふことになるであらうか。さうしてその分析はそのまゝ波浮港そのものに就いての人々の空想の分析となるであらう。ところで現實の波浮の港はそんな詩的なものでなく（と私には見えた）、如何にも現實的に、商賣熱心な魚類の取引場である。單なる遊覽客相手の町ではないと云ふことを、そこらの空氣が切實に示してゐる。

波浮から私は直ちに乘合で元村に引返し、元村から徒歩して藤倉學園に行つて見た。この學園と六踏園とを訪れることが、分析學徒としての私にとつては最も重大な目的であつた。殊に六踏園は不良兒を取扱つてゐると云ふことなので、本號にその樣子を報道するためには是非とも行つて見たいと思つてゐたのだが、いさゝか距離が遠く時間がそれを許さなかつたので割愛することになつたのは如何にも殘念であつた。またの機會を期したい。

五、藤倉學園と川田園長

藤倉學園は低能兒の收養所であり教育場である。門前に立つて奧を覗くと、松並木が道の兩側に立ち、まるで禪院の參道でゞもあるかのやうな感じであつたが、奧まで行つて見ると、學校とも病院とも云へる（その何れでもある）空氣が新たに展開して來る。受付の姆母に刺を通ずると快く園長室に通された。園長川田貞治郎氏は五十五、六歲位の、小柄の紳士で、丁度晝時に飛込んだ初對面の私に對して「お晝食は如何ですか」と勸めてくれるほどに親しみのある人である。その代り前客の手をつけずにおいて行つた茶菓をそのまゝ私に勸めるほど（それは姆母のやつた事だが）香氣なところもある。如何にも鄙びてゐてよろしい。

藤倉學園は藤倉電線會社からその資金を供せられてゐるので、創立者中內春吉氏は藤倉熊吉氏の四男で、中內家に養子に行つた人である。中內氏と川田氏の關係は私には分らないが、川田園長の經歷はドイツ福音學校の出身。宗教學校の出身者で、醫學的知識を必要とする低能兒教育に從事してゐると云ふので、その點に就いて氏はやゝ劣等感を持つてゐられたらしく、方法論上種々苦心

をせられた結果、今日では教育學的、精神病學的、心理學的、三種の方法を綜合する方法を樹てゝ確信の域に達せられたと云ふことである。氏は一般の教育家や教育學者たちに甚だしく不滿を持つてゐられる。また各地の大學やその他の學校から多くの實地研究家たちがこの學園に研究のために來訪することを誇りとしてゐられる。古澤平作氏とも舊知の間であるとか。園長は本誌第三卷第二號『宗教心理研究號』を書棚から取出して見せられたが、同號には古澤氏の執筆があるので、或は同氏から川田園長に贈られたものであるかと思ふ。

園長は起つて、園内を隈なく案内せられた。講堂、教室、治療室、寢室から便所まで案内せられたが、何處も心地よく清掃せられあつて世の多くのこの種の公共建築物の如くでなく、家庭的な溫味を感ぜしめたことは、一つには確に園長の人格に基くものであらう。たゞ寢室に至つた時に、僅かに異臭の鼻をつくものあるを感じたので、夜尿症の患者は居りませぬかと尋ねたが、居るには居るが、毎夜二時間おきに看護婦が起して便をさせるので、粗相をするやうなことはないとて、その記錄の表を奥の方から持つて來て見せられた。その並々ならぬ世話の燒けるのには、私も自ら頭の下るのを覺えた。寢室には能力の殊に低い兒童が三名ほど殘つてゐた。（他の生徒たちは教室か作業場に赴いてゐるのに。）何れも實際年齢よりは遙かに年少に見える。七、八歳であると云ふに二、三歳位のやうな顏付、態度を持つてゐるものもあつた。彼は寢衣の紐をしきりにしやぶり、その口唇定着ぶりを露骨に示してゐたが、極めて怡樂症（オイフォリー）的傾向の子供と見えて機嫌は頗るよろしく、園長の手にすがつては廊下をピョン〳〵跳びはねてゐるのもいと哀れであつた。

講堂の黒板には學藝會か何かのプログラムが張り出されてあつたが、その內には聖書朗讀と云ふやうな項目も見え、流石に園長の出身を思はせた。私としては低能兒教育に宗教的情操の注入がどの程度にまで役立つかは全く門外漢の事とて分らぬが、併しこのやうな犧牲的な事業に携はるものに宗教的信念がなくてなし得るものでないと云ふことは、十分に同情出來ることである。園兒は目下六十五名、內三分の一は女兒、園兒とは云へ最年長者は三十餘歳であると云ふ。目下滿員で、これ以上收容能力はないとのことであつた。國家は實に屢々、あまりに屢々、かう云ふ國家的事業を民間に委任して何等關心を示さなすぎはせぬのでなからうか。

辭去するに際し、園長は私に贈るにその著『教育治療學』の一卷を以てせられた。私は園長の好意を深く謝し

（第一〇一頁上段へ續く）

講座

二三の語義に就いて

北山　隆

精神分析學の語義は、他の科學の場合と同樣、一般の人々に屢々誤解せられ勝ちであるが、これを通俗的に解くことは容易でない。英國の通俗心理學者コスター氏の說明は如何かと思はれる點もあるが、分りいゝので左に二三摘譯紹介して見ることにした。

コムプレクス

コムプレクスとは、或る情緒を自發させるが如き性質を持つた所の觀念の集合體にして、それが、當該個人にとつて、一定の事柄を聯想させるものである。或は、もつと簡單に云へば、コムプレクスとはXなる刺激によつて、Aの心の中に呼び起こされる個人的聯想の一集合體である。

總て人間の心は、コムプレクスの塊である。我々は最幼時から、何でも我々の觸れる物に對して情緒的聯想を構成する事を始めるのであるが、それらの物は日毎にどん〱大きくなり、益々込み入つて來る。かくして爐端の敷物に坐つてゐる赤ん坊は、火が自分の食物を溫めてくれると云ふ事から、火と暖かさ、輝かしさ、腹のくちくなる事等と云ふ心持よい感じを關聯させるのである。又彼がストーブ圍ひの上で火傷をすると、苦痛と恐怖と云ふ情緒的な觀念が、彼のコムプレクスの中に加はるのである。注意が行屆いて再び傷をしなくなると、苦痛な聯想は消えて行き、一方、愉快な聯想は每日の反復の爲に强められて、遂に彼は燃え上る火を見る時の喜ばしいコムプレクスを再び取返すのである。一つの事について意圖的に得られた智的觀念は、コムプレクスと學術上云はれてゐる物とはならないのである。私がアルコール中毒と酒類釀造禁止の事を、一生懸命頭を使つて覺えても、この問題に就てのコムプレクスを構成しはしないのである。私は酒が無數の不幸と墮落を生ぜしむると云ふ事を知つてゐる。所が酒類に就ての私の情緒的聯想と云つたら、野外で長い一日を送つた後、火の傍で飲む熱い奴かさもなければ御馳走のテーブルの上に光つてゐるグラスや、ピカ〱した銀器の贅澤な事などである。酒と云ふものに就いては、私は喜ばしいコムプレクスを持つて居

り、それが私の覺えた知識なんかより根强い爲に、私は禁酒論者の説のために猛烈に反應する事はあまり無さゝうな人間なのである。

コムプレクスは一生涯、取付くこともあるし、又、僅かな時間の中に發生したり消散したりすることもある。晴れゝばいゝと烈しく望む情緒的因子が私にあると、まぎれもない雨降りの徴候も私には薩張り目に入らぬかも知れない。目下の所、私は天候コムプレクスを持つてゐるわけなのだが、明日になつて、天候に對する私の感情的聯想が消散したら、天候を判斷する能力も戻つて來よう。

心理療法は、奥深く潜んでゐる苦痛なるコムプレクスを大抵は處理するのである。かゝるコムプレクスにまつはられてゐる事柄は無意識中に退却して、そこに葛藤を惹起すのである。

心理療法家は種々な方法によつてこれらの事柄を發見し、圖星を指された時に、患者の起す激しい感動によつて、彼は患者の無意識を理解するに到るのである。

例へば醫師が一人の女兒を扱つてゐて、彼女は兎と云ふ言葉に特に非道く感じ易いと云ふ事を發見する。やがて彼は、その少女が兎狩を見て、怖がつた時に起つた所の、深く抑壓された恐怖を表面に持來すのである。又、或る男を取扱つて見ると、水、湖、泳ぐ等と云ふ言葉が彼のコムプレクスを示す物だと醫師に分る。即ち、これらの言葉に依つて譯の分らぬ感情をこの男は起すのである。醫師は此の患者が投身自殺をやらうと企てゝゐたのだと云ふ事を發見するのである。

抑壓と禁制

抑壓とは、不愉快なコムプレクスをその意識なくして無意識中に追ひ返す事である。即ち、故意にではないが、何等かの觀念を忘れる樣にしてゐる場合、我々はそれらの觀念を抑壓してゐるのだ。禁制とは、或る情緒を故意に隱蔽する事である。かくて我々は、勘定を拂つたり、面倒な手紙に返事を書くのを毎日々々忘れるので、そこに我々の無意識的抑壓が有るわけなのだ。併し非常に不機嫌になつて階下に降りて來たと云ふ事實を隱さうとしたり、隣人の談話にホト〳〵困つてゐると云ふ事實を隱さうとしたりするが、これ即ち禁制である。意識的禁制はそれと分らないほど微妙な漸層をなして無意識的抑壓と隣接してゐるのが普通である。かくて、レオポルドとロエブと云ふ少年犯の行つたシカゴの殺人事件を最近研究した事からして、この若者共はその情緒的反應を變態的に抑壓したのだと云ふ事が分つた。レオポルドは

元来チト變な子であつたが、極く幼い時、憐憫、愛情等と云ふ自然的な感情は自分の滿足の爲には邪魔になる事を知つたので、それらを故意に禁制したと云ふ事が明にされたのである。

後になつて此の禁制は自働的になり、彼の意識的制禦以上になつてしまひ、かくて抑壓となつたのである。しかし抑壓がそのやうに禁制から變化せず始めから卽時的に存立し、自働的になる事も、等しく普通な事である。

理窟付け

抑壓されたコムプレクスから起る情緒は元來無意識的であるから、意識に於ては尤もと人に思はせるに足る原因があるわけがない。現に、私は隣家のマシウズ氏を非道く嫌つてゐる。實際の所、私はそのやうに猛烈に彼を嫌ふ理由なんかないのである。しかし、彼が何かの事で私の馴染トムソン君をチト惡く云つたと云ふ事を偶然聞いて、私が私自身も秘かに驚く程、一生懸命トムソンの肩を持つならば、そこにマシウズ氏を嫌ふ立派な理由が成立つのだ。トムソンの肩を持つことは理窟ぬきにマシウズを嫌つてゐる事の結果だと云ふ事に私が氣付かない事もある、或は「マシウズがいやな奴だと云ふ事は、私は元から本能的に知つてゐたんだ。」と云ふやうなこぢつけで、この不合理を說明することもある。明かに不合理な情緒に對して、合理的な根據を與へる此の過程を「理窟付け」と呼ぶのである。もし私が自分の無意識を知ることが出來るなら、こんな事を發見するかも知れない。卽ち、マシウズの聲は、私に豫備將校時代の或る敎師の聲を思ひ出させてをり、其の敎師を嫌つた事にはチヤンと譯があるのだが、しかし私は其の敎師の存在なんぞ疾くに忘れてしまつてゐて、その聲のコムプレクスからマシウズを嫌つたのだと云ふことを。

又別の例を擧げよう。貧乏な境遇の一靑年が或る病院の無料診察を受けに行かねばならなくなり、長い事、四邊の氣持が惡くて汚ない所に待たされてゐる。やうやつと醫者が彼を見る段になると、いきなり彼はこの病院では看護婦共が貧乏人の女や子供を冷遇し虐待すると云つて、猛烈にヒステリックに憤慨する。醫者は彼の非道く憤慨するのを見て、訝かしく思ひ、又、外來患者達は大體に於いて人道的に丁寧に扱はれてゐることを知り、長年の經驗からして大抵こんなことでなからうかと察し、さうして美事に知るやうになる。卽ち、此の靑年の貧乏コムプレクスは慈悲深いお助けを受けると云ふことを屈辱と考へ、氣持の惡い所に待たされたりした事から、ひどく憤慨するやうになつたのだ、と。この場合に關係し

た醫者が、他人に於いて深切な感情や利他的な感情を總て疑ふ所のつむじ曲りではなく、外に現れた感情のヒステリックな烈しさに依つて却つてそのコムプレクスが察知出來たと云ふ事を注意すべきである。そこには政治的、社會的弊害に對し、或は他人の苦惱に對して憤る所の感情みたいな物が存するのだ。しかし、一見我々自身と何ら個人的關係のなさゝうな事について我々が熱烈に議論したり感情を激させる傾向が我々の中に常にある事を我々が發見する時には、その事に就ての我々の個人的聯想の何であるかを觀察し理解するがよいのである。

抵抗

我々は苦痛にして不面目なる經驗を無意識の中へ抑壓するものであるから、かゝる經驗を意識させやうとするものに對しては我々は勿論、抵抗するのである。分析受療中の患者は、意識的に分析者と協力しようと熱心になつてゐる事からして感情が鋭敏になるのを經驗する事はよくあるし、又、如何なる感情上の犧牲を拂つたにしても、無意識的抵抗に打勝つた時には、エネルギー解放から生じた安樂は實に大きく、その後味とも云ふべきものは疲勞よりも寧ろ一種の爽快の氣分である。分析治療を要する者は屢々、分析と云ふ物は自分の日常の仕事を邪魔して、とても骨の折れる處置なのだと考へるのである。けれども多くの例に於ては、實はその逆である。治療の終極の結果としてのみならず、直接の結果としても、彼のエネルギーは增加するのである。

轉嫁

轉嫁と云ふ事の性質に就て深く哲學的に考究する事は、本稿の範圍を踏み越える。轉嫁は微妙で混み入つてゐるが、しかし實際的な目的の爲には轉嫁とは患者の醫師に對する信用、尊敬、親和の感情であると解しておいてよからう。多くの者は、この感情を彼等の醫師に對して持つし、又、誰でも良いから指導者の樣に振舞ふ者や、カトリツク敎徒であれば牧師に對して持つし、又、誰でも良いから相談相手に對して此の感情を持つのである。先に述べた抵抗なるものは、分析者に對する消極轉嫁と呼ばれる形を取るのが屢々である。換言すれば、患者は自分の無意識に御目にかゝりたくない所から、分析者に對して嫌惡の感を起し、この感情を利用して、治療に信用を置かない口實にしたり、治療に行かぬ口實にしたりするので、これは勿論、理窟付けの一種である。何故なら、もし治療を受ける心算ならば筋の通つた理由もないのに之に抵抗すると云ふ事は道理に合はんからである

る。尤も、消極轉嫁が必ずしも常に理窟付けだとは限らない。消極轉嫁は他の理由に基いて起る事もあるだらうが、これが頑張つてゐる限り效果ある治療は妨げられるのである。

分析的心理學の早期の解說者たちは、分析者と患者の間の感情關係はその感情の歴史に於いて新しいものだと云ふ觀念を人々に與へ、之に就ては多くの有害な痴言が語られたり書かれたりしたのである。患者は神秘的な、明かに寧ろ變態的な方法で醫師に惚れ込むのだと說かれたのである。しかし乍ら、非常に熟達した醫師には（精神醫にせよ肉體醫にせよ）自然で當然な、乃至は目茶で度を越した感謝・尊敬を捧げる熱狂的な人々がくつゝいてゐると云ふ事はよく見かける所である。この關係は何も新しい物ではなく、人間性その物と同樣に古いのであつて、或る人が與へるだけの力を有し、別の人が受けたいとの願望を持つ限り、何としても必ず現れ來るのである。

コスターは右のやうに云つてゐるが、それが誰の事だか我々は知らない。さう云ふ誤れる解說者も英國にはあつたかも知れない。（終）

相談

老父と若い妾の問題

問——私は三男一女の父でございます。十六年前妻に死別しましたが子供達がふびんさに是まで獨身で通して來ました。それを子供達も私の德として理解してくれ、お互に奮勵して皆一家をなし、妻帶又は入嫁して幸福に暮し、私を又なき父と敬愛して呉れて居りました。尤も私は八年前長男に嫁を迎へると同時に數町離れた所に單身別居して居ります。處が誠にお恥しい次第ですが、今から三年前誘はれるまゝに或闇の女と遊んでからは、此女の身の上が如何にも薄倖なのに同情して、少しの金で私の手元に引取り、一通り女の藝を仕込んで女中代りとして使ふやうになりました。女は非常に經濟的で又責任觀念が強く骨身吝まず働いて親切にして呉れます。處が此事以來伜、嫁、娘、婿達は今迄と打つて變つて私を冷視し、路傍の人の樣に素ッ氣なくいたします。然しそれも私の非行故と決して他を恨んでは居りません。今回女の親許から今迄の事情を少しも知らないらしく、娘も年頃故（廿二歲）返して貰ひたいと云つて來たので、面會して

一切の事情を話しましたら、親御は貧困な生活はして居られるが、誠に無慾な人らしく、娘一人を無き者に思ふから貴公の御存分に取計らひ願ひたいとの事に私も感心して居ります。本人は私の死ぬ迄傍にゐて盡したいと申しますが、何分年が親子程も違つてゐるのですから應分の事をして歸國させたものかとも思ひますし、尤も子供達は彼女が私の遺産を目的としてゐると思つてゐるやうな樣子もあります。私は今或慢性病に罹つてゐるので壽命も後一二年ですが、取るべき道をお敎へ下さい。彼女は闇の女でございましたが一家の境遇上止むを得ずなつたのだと思ひます。正しい精神の持ち主で、兩親も無慾の善人である事を念頭に於て御批判下さい。

（下谷、健三）

答――實にあり勝ちの事で皆さんの立場の何れにも同情します。併し記者は貴殿が御自分の立場に對して都合のいゝ解答を與へて欲しい願望を露骨に出して質問して來られたことに對しては、いさゝか反感を持つたと云ふことをまづ申上げたいと思ひます。

十六年間子供のために後妻を娶らず孤獨の生活を送つて來られたことに就いては、誠に同情に堪えませんと共に、大いに感心もします。併しその事が子供等への恩着せの理由になり、且つ自分の自らの行動に對する自己是認の理由になつてゐるらしいことは（是認理由にはならぬと云ふわけではないが）面白くないと思ひます。そのために貴殿が狡猾であると云ふのではないが、性格が弱いとだけは云つておきたいと思ひます。そんなことを恩着せがましく持出さないで（貴殿は恐らくそれを恩着せがましく子供等の前に持出されたことゝ思ひますが）、自分の已むを得ない要求ならば、堂々と始めから子供等に斷つておやりになつた方がよかつたと思ひます。恩着せがましいことを云ふから子供等は反感を持ち、またその弱目につけ込んで攻撃的な態度を示すやうになるのでせう。

どうせ人間には幾つになつても性の要求は全然消えると云ふわけのものではないのですから、それは已むを得ない事でせう。併しそれは生物人間として已むを得ないことであつて、人格人間としては、さう云ふことは超越すべき筈になつてゐるので、貴殿の子供衆から見ると、貴殿は尊敬すべき父親として（超自我の原型として）完全な人格人間であつて欲しいのでせう。ところがその願望が見事に裏切られたので、非常に不愉快になつて來たので、その心持ちはよく分りますが、それは云はゞ彼等の我儘であり得手勝手でもあると云はゞ云へませう。自分達は結婚して性の滿足を得てゐるのに、永らく自分等

のために性の禁斷（或は制限）をして來た父親に對しては、それを永久に許さぬと云ふことは、共に同じ生物人間としての道德から云へば非常に利己的な、自己本位的な考へ方であります。さうして貴殿は恐らくその立場を取つて物事を考へてゐられるのでせう。ところで、子供衆の方は人格人間としての立場をとつて別種の道德を奉じて貴殿に臨んでゐるのだから、まるで兩者の考へ方がチグハグになつてゐます。

貴殿は次に、その側女及び側女の親達を非常に辯護して、絕對善人として見てゐられますが、これは併し貴殿の願望の表れに過ぎなくて、果してそのやうに「無慾」であるかどうかは分らないと思ひます。と云つても私は惡人だと云はうとしてゐるのではないので、人の善惡などはその時、その場合、その境遇によつて區々になるので、「無慾」だから善良だとも云へますまい。さう云ふ風に娘を（失禮乍ら）死にかけたやうな老人に妾奉公させてゐて全く「無慾」であるとすると、私なら馬鹿だと思ひます。妾にする位なら、どうせ遺產をアテにすべきで、それをアテにしないやうに考へてゐられるのは貴殿の「願望」であり「空想」であると申上げたい。そんなことでは到底子供衆の心持は分らないし、心持が分らないやうなら彼等を統御することは出來ますまい。

子供衆は女及びその親達が貴家の遺產を目當にしてゐることを心配してゐるやうですが、それは尤もでせう。實際、目當にしてゐるだらうと私も思ひます。妾本人はまだ若いからさうでもないかも知れぬが、親達は娘を闇の女にしなければならないほど貧困であるのだから、それ位の事は勿論考へてゐると思ひます。然らば子供衆から見れば財產を繞つての大競爭者が突如として出現したことになるのですからなア。それは貴殿への人格人間的要求もさることながら、財產上の競爭者を製造したと云ふ恨みもあるのでせう。

だから今の貴殿としては、とるべき途は二つだけだと記者は思ひます。第一は、貴殿が完全な人格人間として（今からでも遲くはないかも知れない）妾と手を切り、應分の手切金を與へてあとくされなくすること。併しそれは只今の貴殿としては恐らく不可能の事でせう。生物人間としての要求が許さないでせう。それならあまり無理なことはなさらぬがよいと私は申上げい。今より一層いけない事態が惹起するかも知れないから。第二は、完全なる生物人間として居直り、子供衆等に父親への幻覺（完全な人格人間としての）を打破するやうに努めること。財產に關しては、女に與へる分と子供等に分配すべき分とを今から遺言書の中に明記して關係者一同の了解

を得ておくこと。第一が不可能だとすると、第二をとるより外はないが、根本の問題は貴殿が自分の內なる生物人間と人格人間との二つの立場の間に統一を求められることでせう。貴殿自身の立場が判然してゐないから、子供衆は妙な不安を抱くのでせう。貴殿は老齢のために退行して幼兒的になつてゐられることが文面でも察せられます。だから考へ方が理知的でなく感情的です。幼兒的だから側女を泥海中から「救助」してそれを母代償とせられたのでせう。母に去られては幼兒は生きてはゐられますまい。だから私は第二の途をおとりなさいと勸めるわけなのです。（記者）

（第九三頁下段より續く）

て辭去し、直ちにまた徒歩にて元村に歸つた。

着船場の待合室にて同行の者等と落合ひ、一同再び橘丸に乘込み、恙なく東京へと歸着したのは、その日の夕であつた。（完）

（第八八頁下段より續く）

代償である事を思へば猪口を使つてゐない方が漫畫としては効果的である。娘が乳房を手で支へて恰も子供に見せびらかしてゐるやうにしてゐるのも面白い。意識的には違つた銚子と乳房の無意識的同一性を强調してゐるのだから。

×

我々は人生の苦難を忘れる一つの方法として酒精飲料を用ひて來てゐるが、その理由は忘れ切れない口唇性感への働きかけとアルコールの藥理的作用による抑壓の解放により我々を小兒に迄還元してしまふ爲によるものである。

此う云つた點を、漫畫家的な皮肉な感覺から此處にまとめた才を買ひたいと思ふ。併しこの前の『串差おでん』の場合でも、今度の場合でも、共に乳房が主題になつてゐるのだから、或は偶然かも知れないが、この作者松下井知夫氏の母乳定着、口唇性感の相當なものであらうことが察せられる。

——一九三七・二・三——

內外彙報

アランディ博士の第二信

先號にフランスの分析家アランディ氏（Dr. René Allendy）の延島氏宛來翰を紹介したが、今度はまた大槻氏宛に手紙が來たからそれをこゝに紹介しておきたい。

「十一月九日付のお手紙並びに貴所の分析雜誌二部確に拜受いたしました。小生は只今ではパリ精神分析學會の主事を勤めてをりませんので、御手紙は現在の主事リウバ博士に移牒しておきました。同君から當方の雜誌はお送り致すことゝ存じます。

御所望の小生の寫眞及び小傳はこゝに同封しておきました。印刷せられましたら一部御惠送下さいますやう、お願ひ申上げます。敬具

アランディ」

寫眞は本誌本號卷頭に揭げておいたから御一覽を願ひたい、まるで東洋の坊さんのやうな感じの人である。一體に、分析者はみな東洋的な感じがするやうであるが、どう云ふわけであらうか。分析學が東洋的なせいであらう。次に延島氏に囑して、アランディ氏小傳を邦譯して貰つたものを次に揭げておく。

「ルネ・アランディ博士は一八八九年二月十九日パリで生れた。一九一二年に彼は醫學史上に於ける錬金術に關して博士論文をパリ醫科大學に提出したが、其通過後は決定的にヒッポクラテス學派に轉じた。一九二〇年以來彼は解熱が臨床上重要なることを强調（此の考へは其後基本的變換作用の名の下に發展せしめられることになつた）して、ブーシャール Bouchard 及フランス學派の見解によれば營養（變換作用）と關聯ある氣質に關する研究を公けにし、續いて內分泌腺の役割に關する研究を發表した。一九二二年に「氣質論 Les Tempéraments」と題する彼の著作が公刊を見た。

以上と時を同じうしてアランディ博士は原始思想及象徵思想の研究に着手し、『數の象徵思想 Le Symbolisme des Nombres』と題する重要著作を公けにした。此方法は博士を精神分析學に導き、彼は一九二二年來それを醫科大學精神科臨床部附屬の聖アンナ精神病院に於て實地に應用したが、博士はフランス人の精神分析者としては其率先者の一人である。

一九二二年、博士はソルボンヌ（パリ醫科大學）に哲學的及科學的研究グループ Groupe d'Etudes Philosophiques et Scientifiques を創設し、今日でも猶其中心人物となつてゐるが、それはフランスの公衆に精神分析學理論を普及する最初の中心の一つであつたのである。

アランディ博士はパリ精神分析學會の創立委員として學會の主事を四年間勤めたが、次いで『精神病學上の進化 L'Evolution Psychiatrique』（精神分析學徒が他の精神病學者と共同してゐる學會で同名の雜誌を發行してゐる）の創立委員にも任じ、一九二六年にはフランスに於ける精神分析學の最初の臨床觀察の集錄たる「精神分析學と神經官能症 La Psychanalyse et les

Névroses』をラフォルグ R. Laforgue との共著として公刊し、次いで夢に關する二著、「夢と其精神分析學的解釋 Les Rêves et leur Interprétation psychanalytique」及「夢と精神分析學 Le Rêve et la Psychanalyse」(後者は共著)を公表した。更に又博士は幾多の問題に就いて精神分析學的見解を知らしめる目的を以つて、次の如き夥しい著作を公けにした。『運命の問題 Le Problème de la Destinée』(一九二七年刊、一九三〇年獨譯さる)。『醫學思想の是正 L'Orientation des Idées Médicales』(一九二七年刊、一九三二年櫻澤如一氏により日本譯さる)『精神分析學 La Psychanalyse』(一九三一年刊)。『資本主義と性的本能 Capitalisme et sexualité』(一九三二年刊)。『治癒論 Essi sur la Guérison』(一九三三年刊)。アランディ博士は今夢の解釋に關する新著の準備中であるが、それは博士がパリ精神分析學研究所に於て四年來續けた講義の材料に據るものである。

以上の他にアランディ博士は醫學、心理學及一般思想に關する多數雜誌に寄稿した。博士は又精神分析學に關して多くの講演を爲したが、(博士は殊に社會科學自由大學 College Libre des Sciences Sociales の教授であり、又聖ジャック病院の講師でもある)それは單にフランスのみに限られず、ベルギイ、デンマーク、スエーデン等の諸外國にも及んでゐる。(一九三六年十一月三十日現在)」

ファイゲンバウム博士の來翰

米國ニウヨークの分析者にして『精神分析學季刊誌』の編輯者たるファイゲンバウム博士（Dr. D. Feigenbaum）宛に大槻氏から通信あつたに對し、ファイゲンバウム博士から次のやうな返事があつた。

「拜啓。十一月十日付の御手紙誠に有難う存じました。私は一九三七年一月號からの小誌を今後毎號交換的にお送りするやうに取斗ひ、只今二部ほどお送り致させました。

なほまたもし貴殿が廣告様のもの丶寫しを當方にお送りになつて小誌に掲載方を希望せらる丶ならば、當方にては交換廣告の儀も喜んで致したいと存じてをります。當方の廣告原稿はこ丶に同封しておきました。（前頁下欄參照）。

同時に、小生は、貴誌が獨、英、佛、何れかの文にて要領を掲げられるやうならば、當方にては非常に役に立つのでありますが、如何なるものでせうか。嘗て貴誌ではさう云ふことを試みられたことがあるやうに存じてをりますが。

數日前、小生論文の拔刷を數篇お送り致しておきましたが、それに就いては飜譯權をも同時に讓渡いたしておくわけであります。これ等の論文が貴殿の興味を牽き、一部分又は全體をお譯しになるならば、それは小生の甚だ喜びとするところであります。敬具

ニユーヨークにて、ドリアン・ファイゲンバウム

北山氏が本號に紹介してゐる論文は、右に言及せるその拔刷の内の一つに依つたのである。

『イマゴー』昨年度第四冊

一、『同情と戀愛』ルドヰヒ・イエーケルス（ヰイン）――「可哀想だとは惚れたつてことよ」と云ふ俗諺が日本にもあるが、この二者の關係と相違とは極めて微妙である。

一、『幾何、算術及び物理學の精神分析』パウル・シルダー（ニウヨオク）――數字や形態や空間などに關する人間心理の病理性を多くの實例について調べたものである。

一、『凶眼不安症』エミリオ・セルヴヰオ（ローマ）――日本にも三つ眼小僧、一つ眼小僧など丶云つて、眼に關する妖怪の話は多いが、それ等は抑々眼に關する不安症の表はれである。その不安症に關する分析をフロイド、フエレンチ等先哲の説を參考しつ丶研究せるもの。

一、『賭博者の心理』エトムンド・ベルグラー（ヰイン）――賭博心理についてはフロイドの『ドストイエフスキーと父殺し』に論及がある位であまり他に見當らぬ。これは貴重な文獻である。全能念慮と賭博心理との關係を研究してゐるところにその特徴があるらしい。

一、『比較原始人心理學』イムレ・ヘルマン（ブダペスト）

一、研究會に於ける論文討議、

一、新刊批評數種

『精神分析季刊誌』昨年度第二冊

アメリカの精神分析專門雜誌にて、ニウヨークにて發行せら

れ、ファイゲンバウム氏編輯に當つてゐる。卷頭にフロイドの最近肖像と博士の八十歳への賀辭を掲げてゐる。

一、『分析取扱中に於ける勉學の臨床的研究』フレンチ――精神分析は再教育であるとフロイドは云つたが、そのことは患者を分析取扱中に痛感することであるとて、その實際を物語つてゐる。

一、『南カリフオルニアのインド人間に於ける夢と夢の併釋』トツフエルミヤ、ルオマラ共著――南カリフオルニアには、「夢醫師」なるものがある。その夢醫師の蒐集したる蠻人間の夢の材料に基き、分析的研究を施せるもの。

一、『卑猥語に就いて』エドムンド・ベルグラー（ボイン）――卑猥語を用ふる時の心理に就いての研究。

一、『男性と女性』（フエレンチ）――フエレンチの『性器説』の一部の飜譯。（オールデン・バンカ・氏譯）

一、『禁制と症候と不安』フロイド原著の譯。（譯者はやはりオールデン・バンカー氏）。

一、新刊批評數種。

最近國內事實

▼本研究所客員醫學博士木村廉吉氏は本年二月五日を期し、市内中野區氷川町二十三番地（省線東中野驛東口青バス終點、南を西へ入る）にて、精神分析學を基礎として神經症の診療並びに精神衞生の相談に應ずることゝなつた。

▼醫學博士佐藤亭氏は一月二十二日夜、文理科大學心理學教室にて精神分析學の要領につき講演した。

▼『文藝春秋』一月號所載創作『ピンニラ物語』には精神分析に關して少し書いてある。夢の事、戰爭の事、或る事件から性格が更ること、息子や娘が二人共社會運動に投ずることなど。（久下貞夫氏報告）

▼『芭蕉を哀しく切りきざむ』高橋鐵稿――俳誌『鳥柴』昭和十一年十二月號。

▼『現代娘はどんな男を望むか』高橋鐵稿――『奧の奧』三月號。

▼『新媒體としての絕對映畫』高橋鐵稿――『廣告界』三月號。

▼『少女心理と貞操擁護』大槻憲二稿――『通俗醫學』二月號。

▼『凡人强者道德』大槻憲二稿――『人生創造』二月號。

▼『徳川家康の心理の觀察』大槻憲二稿――『現代佛教』二月號。

▼『犯罪願望と演劇愛好』大槻稿――『演劇』二月號。

▼『女の干物化に就いて』大槻稿――『女性の光』二月號。

▼『岡邦雄氏の戀愛問題と渡邊代議士夫人身賣問題に就いて』大槻稿――『オール女性』三月號。

▼『戀愛性慾の處置』大槻稿――『人生創造』三月號。以下每號連載。

▼大槻憲二著『精神分析概論』は二月一日に第五版を上梓した。

▼フロイド精神分析學全集第六卷『分析藝術論』は一月中に再版を上梓した。また同全集第九卷『分析戀愛論』は二月中に再版を上梓した。

長崎氏フロイド賞受領祝賀會

前號既報の通り、長崎文治氏は第一回フロイド賞を受けられることになり、昭和十二年一月十五日の新年例會を兼ねて、同氏祝賀會に宛てられた。會場はいつものアメリカン・ベーカリであつた。

已むを得ざる用事のためや、遅れて出席せられた詮衡委員の一人岩倉具榮氏の臨席を待ち、大槻憲二氏立つてフロイド賞贈與の次第を述べられ、同氏の手から（研究所の長老長谷川誠也氏缺席のため）長崎文治氏に賞狀、賞牌及び賞金が渡された。その瞬間席に列る會員一同思はず祝福の拍手を送つた。長崎文治氏續いて立つて謙譲な態度で所感及び挨拶を述べられ、今後の一層の精進を約束せられた。賞牌は日本美術院彫刻部俊才大內青圃氏作に係る白銅の美事なメダルで、表面に「フロイド賞」の文字と共にフロイド先生のプロフイルを刻み、裏面にはナルチスの姿と寄贈者某氏の紋章とが刻まれてある。美少年ナルチスの凭れかゝつてゐる臺には「T. I. P. A」（東京精神分析學研究所の略稱）の四文字が圖案化して畫き込まれてある等、細々した注意の程によくお目とめて（口繪寫眞を）御覽願ひたい。複製のものは説明書と共に近くフロイド博士の許にも贈られる筈である。

會後、紀念撮映をしたが、口繪第一面最下の圖が、それである。圖中前列右より、田內長太郎、大槻憲二、長崎文治、岩倉具榮、竹田浩一郎、內藤梅子、木村廉吉、霜田靜志、伊藤龍朗、富田義介、梅木米吉、小山良修、小林一、高橋鐵、塚崎茂明、立川玄一郎の諸氏。後列右より倉橋久雄、平塚義角、白田靜代、大槻岐美、加藤己酉三郎、土屋秋實、武田忠哉、北垣照雄、田中虎男、平野弘の諸氏。他に寫眞に映つてゐない人に山口櫻氏があつた。

本研究所研究會例會

昨年度十二月の例會は二十一日夜、例によりアメリカン・ベーカリに於いて催された。當夜は折惡しく、昨年末に入つての初雪の日に當り、寒氣極めて凛烈、出席者の難澁を思はせたが、熱心なる會員は意外に多數に集まられて司會者を感激せしめた。

會食後、まづ宮田齊氏からナチス黨支配下のドイツの社會事情や教育事情などに就いて、種々興味のある話があつた。續いて、本夕の研究主題に入り、高橋氏まづ不良少年の心理に就いての話があつたが、それに對して長崎文治氏不良少年の定義に就いて質問があつた。それに續いて、氏が永く研究せられた結果に就いて分類的な話があつた。

それに聯關して富田義介氏と竹田浩一郎氏とから罪障感からの犯罪に就いて二三のケースの報告があつた。

最後に大槻氏立ち、氏が過般の大島行きの感想、殊に藤倉學園訪問の所見を語られた。それは本誌本號に探訪として掲げら

れてゐる。

×

一月例會に就いては長崎氏受賞祝賀の報告の條に於いて、既に多少報告した通りであるが、當夜は、東北帝大精神科にその人ありと久しく我々の聞知つてゐた、木村廉吉博士が出席せられ、上京開業の辭と共に、分析醫としての今後の覺悟を語られた。その要領は大體本誌本號に揭げたるものである。

續いて、武田忠哉氏立つて、氏が得意の題目たる「ノイエザハリヒカイト」に就いて久しき研究の結果を發表せられた。これに對して大槻氏は精神分析學との關係に就いての說明を要求せられ、高橋鐵氏其他から批評があつた。

次に長崎文治氏の不良少年論があり、その内懲罰絕對無用の主張があつたので、それに對して大槻氏、高橋氏から疑問が發せられ、霜田氏は懲罰絕對無用論に讃せられたが、木村氏、富田氏等は折衷說をとられた。結局、神經症的犯罪者には無用であるが、正常兒に對しては必要であると云ふことに大體に於いて落着いた。大槻氏の本誌本號の論文はこの問題に就いてその後の考究をまとめられたものである。

出席者は長崎氏受賞祝賀報告の條にある通りであるからこゝには繰返さない。長谷川誠也、松井定之、西御門千代、その他の諸氏から鄭重な缺席挨拶があつた。

×

二月例會は十五日夜、同會場に於いて催された。

食後、初出席の櫻澤如一氏夫妻の紹介が司會者に依つてなされた。櫻澤氏は本誌本號アランディ博士傳記中にも言及せられてある通り、同博士の著『西洋醫學の沒落』の譯著であつて、豫々食養運動に從事せられてゐる。

本夕は『生理と心理』との研究題目が揭げられてあるに基き大槻氏まづ立ち、『精神分析學と條件反射』の關係につき、米國の分析學者パウル・シルダー氏の研究紹介が試みられた。その内に言及せられてゐるロシアの條件反射學徒イシュロンドスキーの分析觀に就いて、長崎氏、續いて立つて紹介をせられた。それについて、大腦生活との關係につき、木村廉吉氏、高橋鐵氏、塚崎茂明氏等の間に討議が交された。

次に櫻澤如一氏再び立つて、氏の立場である陰陽學（インヨロザー）や食養生論に就いて說明をなされ、二三の人々から質問があつた。食養生論とは身地一如の原則に立つものであると云ふ。それにつき、北山隆氏或る偏食兒童のケースを報告せられた。

次に高橋氏は「上田秋成の分析」の未定稿を發表せられ、續いて直ちに現代少女の男性觀について述べられた。最後に、宮田齊氏は世界各國の敎育界からの報告に基き、分析學の敎育に應用せられてゐる實狀につき報告せられ、最後にハンス・ツリガーの著書中に報告せられてゐる興味ある分析的實話の二三を紹介せられた。

出席者は右言及諸氏の他に、岩倉具榮、井岡畯一、大久保眞太郎、田中虎男、倉橋久雄、大槻岐美、松井定之、小山良修、内藤梅子、小林一、竹田浩一郎、伊藤龍朗の諸氏であつた。な

ほ、武田忠哉、田内長太郎、富田義介、霜田靜志の諸氏からは鄭重なる缺席挨拶があつた。

本研究所講習會例會

一月例會は十一日夜、研究所に於いて催された。

當日は新年宴會を兼ねて、夕食を共にし、いさゝかの酒肴が供せられ、一同打くつろいだ。その代り、フロイド著書の精讀はお流れとなつてしまつた。併し談論の花は頗る賑かに咲き亂れ、延島英一氏から政治上のスターシステムに就いての社會分析を試みてくれとの依頼が高橋鐵氏に對してなされたりした。その他、集合無意識説への疑義（北垣照雄氏）、芭蕉の分析（高橋氏）その他種々な題目に關する種々な意見が飛出し、時の移るを覺えず、氣がついた時は既に十二時直前であつた。

出席者は、右言及諸氏の他に、北山隆、倉橋久雄、加藤己酉三郎、塚崎茂明、大槻憲二、同岐美の九氏であつた。

×

二月例會は一日夜、同所に於いて催された。

『快不快原則』第六章末を精讀した。擔任は大槻氏であつた。生物體は生を受けた當時に小部分に分れ、その後絶えず性本能に依つて再結合を求めてゐるのだとの假定を下すべきかどうかと云ふ問題に就ての考究の個所であつた。

精讀後、土屋秋實氏、『ゲーテ魔王の分析』論その他二三を朗讀せられ、一同それに就いての批評を試みた。

また高橋氏も研究調文を朗讀せられて、相互批評が相當に峻嚴であつた。出席者は右言及三氏の他に、北山隆、倉橋久雄、延島英一、小林一、加藤己酉三郎、塚崎茂明、大槻岐美の諸氏、即ち十名であつた。

編輯後記

こゝにやうやく『不良少年少女心理』號を編輯し終へて、後記を書く段取となつた。後記を書く編輯者の心境はたゞこの經驗あるものゝみが知るところであらう。不良少年少女問題に就いてはまだ論及すべきことが澤山にありますが、また追々試みて行きませう。

杉田博士が公務多端の寸暇を割かれて卷頭論文を執筆せられた御好意を深謝します。その他、諸岡、木村の兩博士の御執筆も久しぶりの事でありました。兩博士は今後も暫く續けて御執筆下さることになつてゐます。今度は初執筆の方は一人も御座いませんから、改めて御紹介は致しません。

×

本年は本研究所創立十周年、機關誌創刊第五周年に當りますので、五月頃、何か紀念の講演會を催したいと存じますが、さういふ催しは非常に勞力と金錢とを要しますことでありますので、只今のところまだ考慮中であります。催すとすれば、五月六日（フロイド博士誕生日）前後に定め、餘興として、本研究所員にしてホルモン研究の權威小山良修博士作映畫『女性とホルモン』を同時に上映いたす豫定になつてゐます。催しますやうならば、詳細は次號誌上で詳しく御報告申上げます。この映畫は學術映畫として一覽の必要あるものでありますが、公開禁止になつてをります。

×

新誌友及び關係者が簇々增加して行きますことは、御互に同慶の至りであります。左に御紹介申上ます。

▼福岡市……………彌吉正人氏
▼岡山市……………野村典康氏
▼市内中野區……………馬場由子氏
▼市内杉並區……………奈良嘉幸氏
▼京都市……………松崎政雄氏
▼市内中野區(客員)……木村廉吉氏
▼市内牛込區……………杉本廣作氏
▼市内本鄉區……………三浦豐彦氏
▼市内大森區……………深谷恭平氏
▼市内芝區……………濱島行良氏
▼市内世田ケ谷區……今枝常男氏
▼市内本所區……………渡邊角之輔氏

×

大槻氏新著『新しき立身道』は別項廣告の通り、春陽堂書店から出版になりましたが、讀者諸氏も全國各地の大小新聞紙上で盛んな廣告を御覽になつたことゝ存じますが、大書肆春陽堂が非常な確信と乘氣で出版いたしましたので、著者もいさゝか面喰つてゐるやうな有樣であります。とかく地味な著者としてはこんなはでなことは恐らく始めての經驗のやうです。本誌讀者諸賢にも聲援的に御購讀を願へれば幸甚であります。著者は書店に損失のかゝらざらむことを偏に念願してゐられるのです。內容は本誌上で常に讀者の見てゐられる著者の面とは全く違つた面を——碎けた、話術者としての一面を——そこに、見出されるでありませう。通俗的講話でありまして、前者『社會生活法』と、姉妹篇の觀を呈してゐます。

×

本研究所發行の『阿部定の精神分析的

診斷』も幸にして當局の忌諱に觸れることなく、直ちに再版に附せられて、盛んな反響を呼んでゐます。流石に一代の人氣者を對象にとつての書であるだけに意外の方面からの註文があります、再版では正誤してあります。從つて七九頁に掲げた正誤表は再版の分には適用せられません。但し一字だけその後の發見があります。

×

フロイド全集の逐次重版も殆ど完了しましたが、なほ二册ばかり殘つてゐます。が、四月號までには何とか全部重版の完了を見たいと思つてゐます。

重版とは云へ、只の重版に非ず。實に良心的な改訂改譯の重版であります。同時に第二期刊行の大計畫を春陽堂が發表致しました。第二期刊行はやはり十册、別册として『精神分析學辭典』が附加せられて通卷堂々廿一册。これにてフロイドの全著作が邦譯せられるわけであつて、實に譯者畢生の大業であります。内容目錄御希望の方はなるべく郵券二錢を添へ(特別誌友は無料)御申込み下さい。

★

次號は『**生理と心理**』又は『**精神分析と條件反射**』の關係に就いての特輯號といたします。これは實に重大問題であると共に興味ある主題であります。

一、精神分析學と條件反射學…林　髞
一、精神分析から條件反射を見る…大槻憲二
一、ベヒテレフの生理心理研究…延島英一
一、生理と心理の相關關係…長崎文治
一、上田秋成の精神分析……髙橋鐵
一、幼兒の現實感覺の發展段階(フエレンチ)…伊藤龍朗譯
一、夜ふけて(マンスフイールド)…岩倉具榮譯
一、アレキザンダーの分析論…木村廉吉
一、心理研究ノート(續)…長谷川誠也
一、少年期心理と自己分析…齋藤多喜男

その他種々計畫中のものもあります。

★

昭和十二年二月二十五日印刷
昭和十二年三月一日發行
(隔月刊)　定價五十錢(郵税四錢)

編輯及發行　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二
印刷所　東京市淺草區北三筋町五五　三進堂印刷所

定價一部　五拾錢(郵税四錢)
半年分　一圓五十錢(送料共)
一年分　三圓(送料共)

御注文規定

本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、**振替口座東京七八八一七番**へ御拂込み下さい。

・郵券代用の場合は一割増に願ひます。

・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所　振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館・北隆館・(大阪)福音社

研究所事業案内

一、分析部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄症想、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は毎日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齡、病歷、手記、感想、夢の記述などに、料金（十圓）を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絕對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〳〵適當の人々にふり向ける。

三、敎育部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

四、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研究會

・研究の發表とその討議を目的とす。毎月一回、第三月曜夕、　　にて開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講習會

毎月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主として

フロイド著書の精讀。會費二十錢。

大槻憲二著

精神分析雜稿

定價金二圓・送料金十錢

わが國に於ける斯學の歴史に不朽の足跡を印しつゝある大槻先生の業績の内、比較的柔い、隨筆的な文章を輯めて頂いて、茲にこの一書を公にする事を得ましたことは、人間心理の動きに興味ある諸賢の共にお喜び下さるところと信じます。何れも永く斯學史上に残るべき重要な、獨創的な文獻ばかりであります。

口　繪（大槻先生作油繪「浦島と乙姫」、青山熊次畫伯作「金佛」
川端龍子畫伯作「愛染」、福澤一郎畫伯作「馬」）

戀愛と性慾――戀愛に於ける救助願望の心理とその種々相。獸性への憧憬と恐怖の矛盾心理。（ジーキル博士とハイド氏の分析、その他。）

男ごゝろ・女ごゝろ――或る新婚者の心理。或る晩婚者の心理。童貞の誘惑。女心の分析。

傳說・行事・民俗――東西桃太郎譚。破花と破瓜。高い山から。家と室と女と。カフエ參籠の歴史必然。初夢分析考。象徴としての馬。蝶と蝶番。

人物月旦――將軍綱吉と犬。東郷元帥と乃木大將。生田春月の投身心理。水谷八重子。谷崎潤一郎。日夏耿之介。井伏鱒二。室生犀星。有島武郎。芥川龍之介。坪内逍遙。坪田讓治。山本有三。川端龍子。志賀直哉。水上瀧太郎。土方與志。石井鶴三。豐島與志雄。

文藝と美術――文學の醫力。デジヤギウの藝術。龍子作「愛染」。變裝したる國王。

世情人情――書物蒐集癖。千軒盜み分析考。泥棒に扮裝する心理。復讐心の效用。犯罪と善行の同一性。野球フアンの分析。現代童貞論。

術語略解――重要な術語に、砕けた說明を、實例を以て……。

神田區淡路町
二ノ七・小ロビル

岡倉書房

（振替）東京二五九三五
（電話）神田二〇一〇・二〇一一

學問の世界性と エスペラント

學問は人類全體の共同の財産であつて、決して、一民族や、一國民の私すべきものではない。

☆……したがつて、學問上の重要な新發見や新創意は、必ず世界へ發表して、文化促進の助けとするのが、學者の義務である。

☆……ところが、その實行上、日本の學者は、一つの大きな困難に行當るのである。それは……**言語**の問題である。ヨーロッパの學者達は、自國の言葉であるドイツ語、イギリス語、フランス語等で、その業績を發表してをり、それによつて文化に貢獻してゐる。

☆……が、日本人は、日本語が孤立してゐるため、これで發表したのでは、世界に認められるわけにゆかない。そこで、從來は**國辱**を忍んで外國語で發表したものである。科學日本の體面上甚だ情けないことであるが、それだけならば、文化の向上を願ふ者の襟度として、堪へ得るとしても、多大の貴重な時間を空費することは、學問を愛する者にとつて、實に惜しんでも餘りあることである。

☆……外國語を讀み得るまでになる努力だけでも容易ではないが、讀むためだけに外國語を學ぶことは、まだやむを得ないであらう。そこで、せめて、最も困難な『外國語で書く』努力だけでも逃れる手段はあるまいか。この問題の解決策として、學界の一部に、『學習に容易な……**國際**共通語エスペラントを學説發表用語とせよ』といふことが叫ばれ、現に活用されてゐる。高象氣象臺は、毎年浩瀚な報告書を、この言葉で出し、多くの醫學者や、理研の一部の科學者達は、その業績の發表に盛んに、これを利用し、全世界の科學界から注目されてゐる。

エスペラントで發表すればエスペランチストでなくとも、ヨーロッパの學者は、自分の專門のことなら、容易に理解し得るから、決して看過される心配はない。

☆……語學の素養が相當にあれば、エスペラントで論文を書き得る程度に達することは、さほど困難でないから、日本の……**學者**は、すべてエスペラントを學んで、これによつて、人類のために、大いに貢獻すべきである。

☆……エスペラントの學習法や學習書の選擇については、日本におけるエスペラント普及、研究の中心機關財團法人日本エスペラント學會（東京市本郷元町）あてに照會すれば、答へてくれるはずである。

フロイド精神分析學全集

（第一巻）夢の註釋　定價一圓五十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第二巻）日常生活の精神分析　定價一圓七十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第三巻）社會・宗教・文明　定價一圓八十錢　送料十二錢　長谷川誠也　大槻憲二譯

（第四巻）快不快原則を超えて　定價一圓八十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第五巻）性慾論・禁制論　定價一圓七十錢　送料十二錢　矢部八重吉譯

（第六巻）分析藝術論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第七巻）トーテムとタブー　矢部八重吉譯
自我とエス　對馬完治譯
定價一圓八十錢　送料十三錢

（第八巻）分析療法論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第九巻）分析戀愛論　定價一圓八十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第十巻）精神分析總論　定價二圓　送料十二錢　大槻憲二譯

東京市日本橋區通三丁目八番地
春陽堂書店
電・日本橋・一五一番
振替東京一六一七番

ベルグソン著
廣瀬哲士譯

夢と哲學

四六判脊布上製
口繪一葉挿入

定價一圓五十錢
送料十四錢

忽ち再版

故芥川龍之介は『ベルグソンの哲學は美しい透明な建築を見るやうな感じだ』と云つた。この言葉を證明するものはベルグソンの初期の作品で、就中、本書に譯載した「夢」及び「形而上學序説」の二篇は、後年の大著にも見られない美しい詩藻が盛られ、ベルグソン哲學の眞髓に觸れる絶好の入門書である。

（内容）

夢
形而上學序説
* *
ベルグソン雜記

メレジユコーフスキイ著
昇曙夢譯

トルストイとドストエーフスキー

定價一・六〇
送料一〇

小林秀雄氏評……ドストエーフスキイに關する外國の研究書は、僕の語學のゆるすかぎりいろいろ讀んでみた。メレジユコフスキイの「トルストイとドストエーフスキイ」も昔讀んだので最近讀み返してみた。やはりこの論文は光つてゐると思つた。ことにトルストイの分析は鮮やかであると思つた。（文學界）

ベルグソン著
廣瀬哲士譯

笑の哲學

定價二・〇〇
送料一〇

ルナン著
廣瀬哲士譯

耶蘇

定價一・五〇
送料一〇

ヘルマン・コルフ著　高橋禎二譯

人本主義と浪漫主義

定價二・〇〇
送料一〇

ヒユーマニズムとロマンチシズムは近世の二大思潮だ。本書は獨逸學界に令名嘖々たるコルフ博士の名講演を譯述せるもの。ヒユーマニズムの問題の喧しい折、大方の一讀を薦む。

東京市麴町區九段一丁目　**東京堂**　振替東京二七〇番

大日本圖書

醫學博士 杉田直樹著

（若溪會推薦圖書）

社會病理學（一）

定價金一圓 送料十錢

新四六判高雅裝 總クロース函入 三〇〇ページ

◎不良少年の科學的研究◎

「わが社會病理學は、畢竟今後に興るべき凡ての社會事業・社會保護事業・司法保護事業・社會教化事業等の實施に對し、その被保護者の個人的方面の特質に就いての正しい知識を與へ、その事業を一層効果的ならしめる方策に對し、幾分なりとも參考となり、指導ともならんことを期して居る次第であります」と著者は述べてゐる。犯罪少年が段々激增をして來るにつれ、生物學的立場からの研究氣運が盛んとなり、少年教護事業や司法保護機關に對し、重大なる寄與をなすに至つた。しかし是れは一部專門家のみの研究題目や知識であつてはならない。社會惡を根絶し、社會を淨化し、家庭を明朗化する爲には、惡の萠芽たる少年の犯罪的傾向・不良性に就いて、正しい科學的知識を持ち、それを未然に防ぎ、善導することが必要であると思はれる。本書は實にその指針たるべきもので科學的に不良少年の本態を明かにし、その原因・矯治を講話風に叙述したものである。少年教護關係者はもとより、全國の教育家諸賢、子女を持つ兩親の必讀すべき名著。

◇內容目次◇

『社會病理學(二)』以下續刊

東京市京橋區銀座一丁目・振替口座東京二一九番

大日本圖書株式會社

V. Jahrgang, Heft 2. März–April, 1937. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse"

(Sonderheft für das Problem der Schwierigen Kinder)

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongoku Tokio Nippon